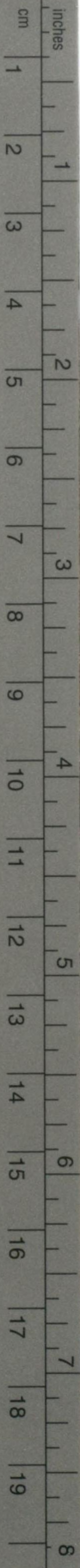


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



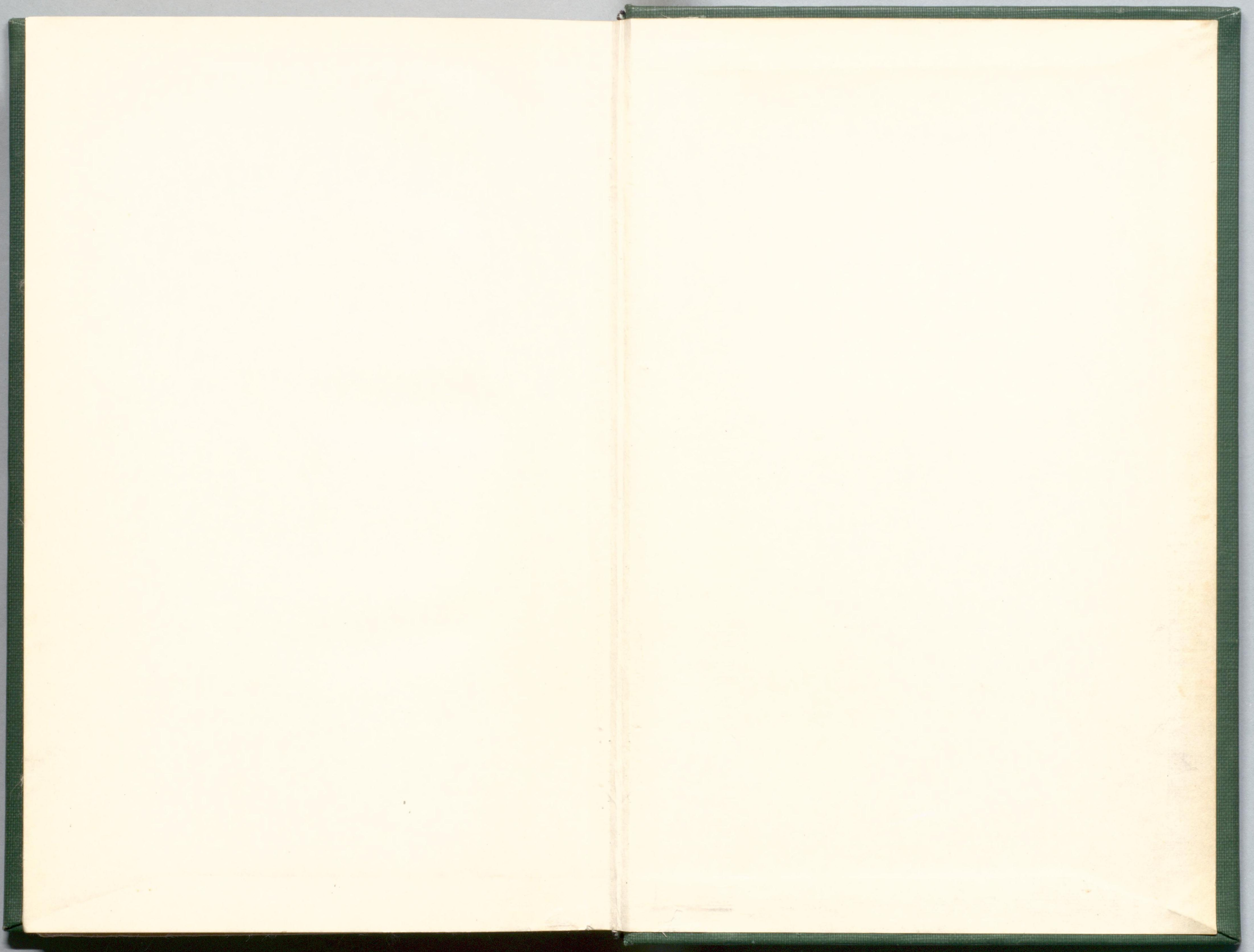
Kodak Color Control Patches

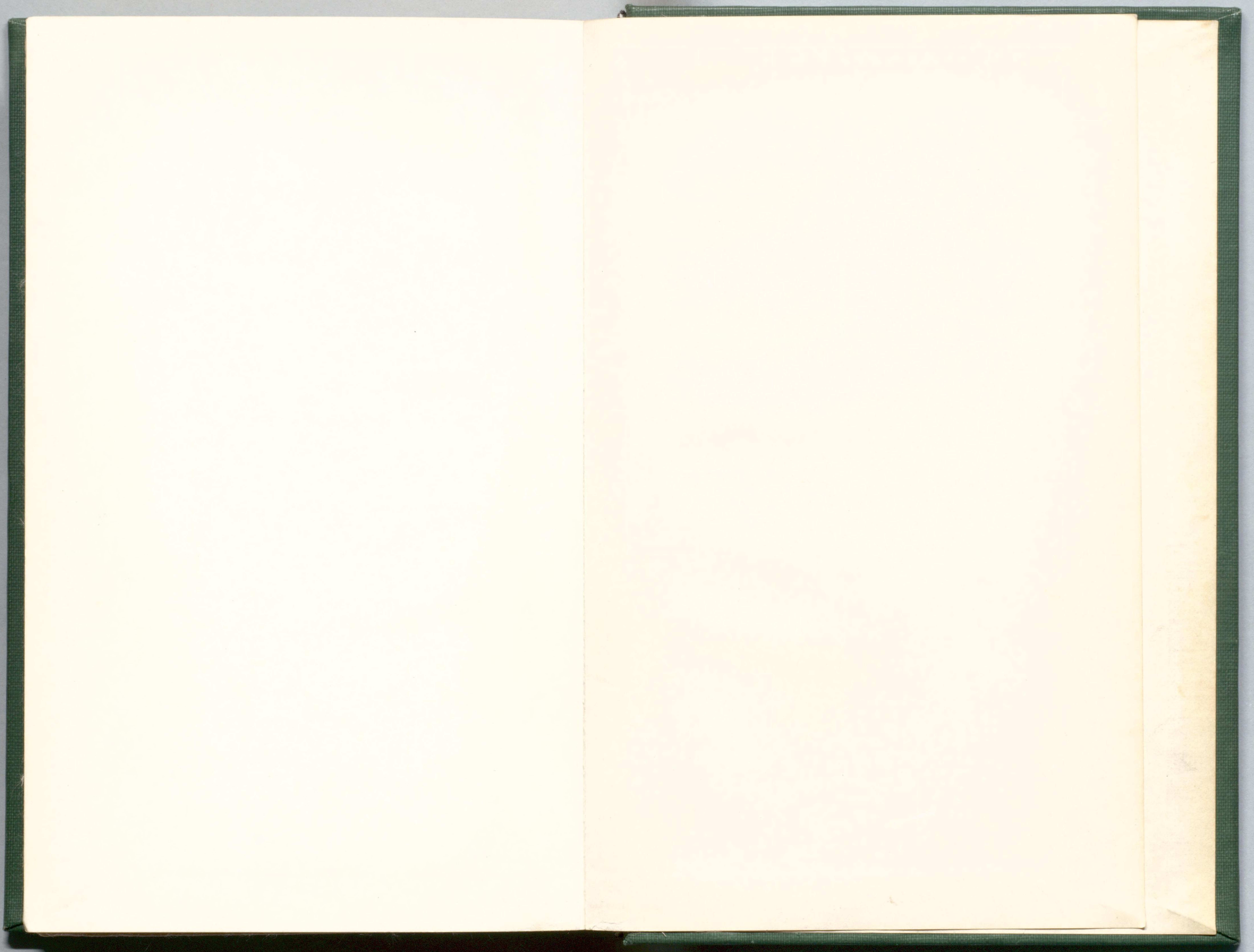
© Kodak, 2007 TM: Kodak



水-26
1200500275800

0 複写





77015

水路部沿革史

自明治二十八年
至同

(附錄上下二冊附屬)

[Blank page with faint bleed-through text from the reverse side]





凡例

寄贈本

一本書ハ我水路部ノ明治二年ニ創設セラレシ以來明治十八年ニ至ルマテノ進歩状態ノ一斑ヲ知ランカタメニ特ニ編者ニ命シテ編述セシメタルモノニシテ其明治十八年ニ擱筆セシハ明治十九年以後ニハ水路部年報アリテ各其年度内ノ進歩ノ蹟ヲ徵スルヲ得ヘケレハナリ

一歲月ノ推移ニ從ヒ水路部創設以來ノ主要ナル當局者ハ漸漸代謝シ今後尙數年ヲ經過セハ或ハ其進歩ノ蹟ヲ記述スルニ由ナキニ至ランモ未タ知ルヘカラス幸ニ前ノ當部編修石川洋之助ハ明治六年以來故柳少將ノ命ヲ受ケ今日健在セラル、肝付中將ト共ニ諸般ノ調査ニ從事シ爾來明治四十年ニ至ルマテ三十四年間主トシテ誌類編輯ノ業務ニ從ヒタルモノナルヲ以テ當部創設以來ノ沿革ヲ記述セシメ以テ今後ノ參考ニ資セントスルニハ最モ適當ナルモノトス因リテ特ニ同人ニ本書ノ編纂ヲ委託セシモノナリ

凡例

大正
6. 3. 18
寄贈

一本書編纂ニ用ヒタル材料ハ大略左ノ如シ

(一) 水路局事業摘要短冊

右ハ明治初年ヨリ十二年迄但シ明治六年頃迄ハ重ニ柳少將ノ記憶ニ取レル零碎記事其後ハ不完全ナル文書ノ摘記

(二) 水路局沿革史料

右ハ明治十三年ヨリ十六年迄ハ故海軍屬八木隆治同十七、十八兩年ハ元海軍屬林文啓カ各記録文書ニ依リ摘記セシモノ

(三) 明治四年ヨリ十八年ニ至ル水路局大日記、往復録、外國往復録、上申簿、本省

指令録、本省達簿、秘本簿諸測量事件簿及朝鮮事件簿、金星經過事件簿萬國標準時會議事件簿水路部職員履歷簿及編者ノ私録ノ類數百冊

但シ缺本甚々多シ

(四) 法例彙纂及諸規則

(五) 海軍省年報明治十二年後

(六) 水路雜叢

右ハ故柳少將カ事業ノ參考トシテ内外水路技術業務ニ關スル重要書類及臨時ノ調査ニ係ル意見書類ノ抄集ナリ然レトモ其目錄ト對照スルニ過半ハ脱

落セリ

(七) 故柳少將ノ自宅ニ存セル私録日記ノ類

右ハ故柳少將ハ十四歳ノ時ヨリ終身筆記セル日記アリシカ明治廿二年火災ノ爲メニ殆ト烏有ニ歸シ此ニ參照セシモノハ僅ニ殘層中ヨリ拾得セル明治初年以前ノ殘片ニ過キス

(八) 圖誌目錄明治十八、十九兩年版

(九) 英版圖誌目錄一八八一年版

(十) 寰瀛水路誌明治十及朝鮮水路誌明治四

(十一) 重ナル海軍海圖拾葉

但シ如上ノ類ニ加フヘキ書類現存セサルモノ多シ觀象臺引渡内務事件簿等ノ如キ是レナリ

右ノ外英國水路局記録、米國水路局總制、米國水路局基礎及發達史ヲ參考ス一前記(二)ヨリ(五)ニ至ル文書ノ下調査ニハ元海軍屬林文啓ヲシテ編者ノ命ヲ受ケ從事セシメタリ同人ハ明治十二年ヨリ同四十年迄水路部ノ庶務及ヒ會計ニ職ヲ執リ當部ノ經歷ニ就キ知悉スル所尠カラサルヲ以テナリ

凡例

一本書原稿中往々編者カ重要ト認メタル事項ニ意見ヲ付セル所アリ今之ヲ
刊行スルニ當リ其意見中後來ノ參考ニ資スヘキモノハ悉ク採録セリ

緒言

我カ水路部ノ事業タルヤ約シテ之ヲ言ヘハ戰時平時ヲ問ハス直接ニハ軍艦
商船ヲシテ其行動ニ一日モ缺ク可カラサル至要ノ或ル用具ヲ備ヘ方針ヲ定
メ航海ヲ安全ナラシメ間接ニハ文明的各事業ニ利用厚生ノ便ヲ得セシムル
ニ在リ而シテ創業以來其公私ノ要求ヲ招ク日ニ益々多キヲ加ヘタルヲ見レ
ハ我カ水路部ノ設置ハ從來國制ノ大闕典ヲ補ヒ得タル者ト謂フヘシ然レト
モ其事業タルヤ建國以來ナキ所ノモノニシテ且ツ其性質タルヤ極メテ細密
多端且ツ複雑ナルヲ以テ創業以來三四十年ノ久シキニ及フト雖其起原沿革
進歩ヨリ其職制及困難事件ノ情況ニ至テハ親シク其局ニ當リ熱心ニ研究ス
ル者ノ外ハ容易ニ了解ス可カラサルノ類ニ屬ス此事タル獨リ我ノミナラス
英米先進諸國ノ歴史ニ徴スルモ明白ナル事實ナリトス
凡ソ事物ノ發達ノ永劫ニ互リ休止セサルモノハ一ニ確乎不拔ノ基礎アルニ

因ス而シテ斯ノ如キ基礎ナルモノハ決シテ人力ノ能ク創成シ得ヘキモノニ
非ラスシテ全然神ノ權化ニ由テ成ルモノナルコトハ斷シテ疑フ可カラス萬
人一齊ニ金甌無缺ヲ謳歌スル我カ帝國ノ基礎之ヲ證シテ餘アリ又其基礎ヨ
リシテ發達ノ步武ヲ進ムル經路ニ於テ本末秩序ノ一貫シテ存スル所ノモノ
アルハ過去ノ歴史確ニ之ヲ證明ス米將マハン亦言フ凡ソ進歩ナルモノハ保
守ヨリ來ル保守ヲ離レテ進歩ナク進歩ヲ離レテ保守ナシ保守ト進歩トハ嚴
正ナル本末ノ存スルアリ知ラサル可カラスト是レ千古動カスヘカラサル定
理ナリト信ス故ニ此理ヲ度外ニ措キ施爲シタル事跡ニ就テ考察スルトキハ
所謂其本ヲ揣カラスシテ其末ヲ齊フスルト一般方寸ノ木ヲシテ岑樓ヨリ高
カラシメタル觀アルモノ、多キハ過去ノ歴史又確ニ之ヲ證明ス是ニ由テ之
ヲ觀レハ緊要ナル一大事業ニ對シテハ其發達ヲ全フセシメン爲メ其沿革ノ
由ル所ヲ知ルノ必要ナルハ論ナキノミ顧フニ前段所陳ノ如キ建國以來ナキ
所ノ水路部事業ノ基礎ヲ創建シタル所以ノモノハ實ニ柳部長カ自己ノ腦裏

ニ我カ建國ノ基礎ヲ成セル威靈ヲ感受シテ終始渝ルコトナキニ根元シ又約
二十年間ニ於テ其基礎ヨリシテ今日ノ如ク發達セシメタルモノハ一ハ時勢
ノ逼促ニ出ツルモノアリト云ヘ抑モ亦肝付部長カ之ヲ紹キテ本末段階ヲ誤
マラス辛苦經營シタル結果タラスンハアラス故ニ今者本書編纂ノ舉タル此
等沿革ノ由ル所ヲ明示セントスルニ在ルヲ知ル乃チ明治三十二年今泉大佐
カ職ニ圖誌科長ニ補セラル、ヤ肝付部長ノ旨意ヲ承ケ熱心ニ此ノ事ニ注意
シ又命ヲ奉シテ歐米各國ノ水路部事業ノ百般ヲ調査シ我カ事業ニ利用セラ
レタル結果益々沿革史編纂ノ必要ヲ希望セラレ明治三十八年其活歴史タル
肝付中將ニ代テ松本少將ノ職ニ就カル、ヤ同少將亦後繼者ヲシテ此ノ大切
ナル事業ノ由來ヲ知ラシムルノ必要ヲ感シ同中將及今泉大佐ト共ニ特ニ余
ニ其沿革史ヲ編述センコトヲ希望セラル然レトモ此事タルヤ前陳ノ如ク重
且ツ大余ヤ到底其人ニ非ラサルヲ以テ之ヲ固辭シタルモ今ヤ他ニ委託スヘ
キ人存セストシテ切々懇諭セラレ其不才ヲモ顧ミス遂ニ之ヲ諾スルノ止ム

ヲ得サルニ至レリ然レトモ當時在職中日露戰役ノ後ヲ受ケ業務繁ヲ極メ且ツ身體羸弱ノ爲メ僅ニ餘暇ヲ以テ其沿革總論ヲ編述シ之ヲ呈スルニ止マリシカ今般休職ノ命ヲ受ケ閑地ニ就キタルト同時ニ現任坂本部長ヨリ急速ニ編了センコトヲ委囑セラレタル結果漸ク全力ヲ擧ケ其編述ニ從事スルヲ得ルニ至レリ然レトモ緩々此ニ從事スルノ餘地ヲ有セス匆匆之ヲ編述スルコト、ナレルハ甚遺憾トスル所ナリ茲ニ其編述ニ關シ聊カ略述スル所アラントス

本書ハ最初各事業ヲ分類シ各其沿革ノ由ル所ヲ示スノ心算ナリシモ必要ノ文書材料ハ分類の保存法ニ依ルモノ少ナク大抵各種類ヲ混シ唯年月ヲ追フテ記録シタルモノナレハ其分類調査ノミニテモ短時日ノ間獨力ノ能ク爲シ得ヘキ所ノモノニ非ラス且ツ分類の沿革ヲ知ルト同時ニ水路事業全體ノ沿革ヲ觀察スルハ必要ノ事ナリト思惟シタルニ依リ此ニ編述スル所ノモノハ創業以來ノ事業發達進歩ノ跡ヲ年月順序のニ示スヲ主眼トシ且ツ他日各事

業分類の沿革ヲ叙述スルノ便ニ供セン爲メ各事件ノ要領ヲ一々欄外ニ摘記シタリ故ニ大體ヨリ言ヘハ沿革史ト稱スルモ別ニ妨ナキカ如シト雖畢竟水路部ノ起原及發達ヲ略記シタルモノナレハ表題ノ如ク之ヲ命シタリ

本書ハ故柳部長出身ノ始メヨリ同廿一年其退隱ノ時迄ヲ水路部事業ノ第一期トシテ叙述スルノ目的ナリシモ同十九年後ハ年々刊行セル水路部年報ナルモノアリテ事業沿革ノ大要ヲ知ルノ便アルト其以前ニアリテハ全然之ヲ存セサルトニ依リ此ニハ第一期中十八年迄ニ筆ヲ止ムルコト、セリ故ニ柳水路部長一代ノ事蹟ヲ知ラント欲スル者ハ本書ニ續キ十九年乃至廿一年ノ年報ヲ通覽センコトヲ要ス而シテ水路部各事業カ異常ノ發達ヲ成シタルハ第二期即チ肝付部長時代ニ在リテ殊ニ明治二十七八年戰役及三十七八年戰役ニ於テ其最モ顯著ナル事蹟ヲ徵シ得ヘク沿革上頗ル肝要ニシテ大切ナル歴史ノ存スルモノアレハ此等ハ他日識者ノ名著ニ待ツ所アラントス

本書編纂ノ材料ニ關シテハ明治二年三年ハ故柳少將ノ私記日録及編者ノ記

憶同四年ヨリ十二年迄ハ同少將カ他日事業沿革ヲ知ルノ一助ニ供セン爲メ
屬員ヲシテ多少ノ事項ヲ摘記セシメタル短冊同十三年ヨリ十六年迄ハ故海
屬八木隆治ヲシテ記セシメタル文書ノ抄録同十七、八年ハ今者編纂ニ臨ミ
元海軍屬林文啓ヲシテ諸記錄ニ就キ重要事項ト認メタルモノヲ記セシメタ
ル抄録及ヒ大日記、往復録、上申簿、指令録等凡例ニ列記セル書類ナリトス
本書ノ編纂ニ臨ミ如上ノ方針ト材料ヲ基礎トシテ之ヲ調査セシニ創業初年
ニ在リテハ文書ノ制定マラス事業ハ概ネ不文ノ實行ニ出テタレハ該材料ハ
故柳少將ノ私記及編者カ當時ノ當局者ヨリ聽取シタル談話ノ記憶ニ依リ四
年以後ハ一ニ既往ノ不完全ナル文書ニ依リ摘記シタルモノニ過キササルノミ
ナラス前記ノ筆者ハ一局部ノ屬員ナリシヲ以テ事項ノ取捨選擇ノ點ニ於テ
其大小輕重ヲ視ルノ明ヲ欠キタルハ亦已ムヲ得サル所況ンヤ其原料タル文
書ハ其事實トナリテ發動スル迄ニハ幾多不文ノ徑路ヲ取リタル結果ナルコ
トハ古今歷史上ノ通則トモ謂フヘキモノナレハ單ニ文書ニ依テ其原因結果

ノ真相ヲ示スハ至難ノ業ニシテ唯事實上其責任ノ局ニ當リタル者ニ非ラサ
レハ爲シ能ハサル事ニ屬ス編者ハ幸ニ明治六年以來故柳少將ノ命ヲ受ケ肝
付中將ト共ニ諸般ノ調査ニ從事シ引續キ明治四十年迄職ヲ奉シタルモ重ニ
圖誌事業ニ從ヒタルヲ以テ他分科ノ事業ニ至リテハ多少ノ關係ヲ有シ其頭
腦ヲ刺激シタルモノ、外ハ各其專科ニ屬スル重要ナル技術事業ノ進歩發達
ニ關スル點ニ於テ固ヨリ其真相ヲ解説スルノ資ヲ有セス況ンヤ不學無能淺
識ニシテ其記憶ニモ欠クル所多ク且ツ官署ニ存スル必要ナル參考材料ヲ遺
憾ナク通覽スルノ便ヲ有セス而カモ僅々六ヶ月ノ間ニ於テ三十餘年前ニ
遡ホリ獨力ヲ以テ之ヲ編述シタルハ蓋シ自カラ揣カラサルノ甚シキ者其叙
事ノ粗漫ニシテ重要ナル事項ヲ逸シタルモノ多々アルヘキハ宥恕ヲ乞フノ
外ナシ要スルニ此書タル當路者カ非凡ノ識見材幹ト熱誠努力トヲ以テ深遠
ナル學術技藝ヲ運用シ以テ成立セル此一大事業ノ沿革ニ關シテハ僅ニ其一
斑ヲ示スモノタルニ過キス然カモ斯ノ如クナリト雖若シ識者カ此ニ由テ其

全豹ヲ知ルノ一助トナルヲ得ハ何ノ幸カ之ニ如カン
 終ニ臨ミ一言セン水路事業創建ニ關シ努力盡瘁セラレタル人ニシテ其主腦
 タリシ柳少將ハ既ニ逝ケリ其今日ニ存セラル、人ハ創業初年ニ在テハ男爵
 伊藤中將明治六七年ニ在テハ男爵相浦中將其終始セシ人ニ在テハ男爵肝付
 中將一人ノミ而シテ製圖事業ニ在テハ元海軍技手大後秀勝ナリトス故ニ肝
 付中將ヲ主トシ其誤ヲ正シ其足ラサル所ヲ補ハル、アラハ所謂無中ニ有ヲ
 生シ死中ニ活ヲ求ムルノ思ヒアラン

明治四十一年七月廿五日

休職海軍編修 石川洋之助誌

水路部起原及發達略史附錄目錄

年	號	番	號	項	目	枚	數
明治二年			一	崎陽執業雜記 <small>(柳方二郎氏ノ筆記ノ寫)</small>			一二二
同 三年			一	鹽飽諸島實測原圖ノ緣起			三
同 五年			一	水路局本年資金定額			二
同			二	水路局規則			二
同			三	測量生規則			六
同			四	海里算出ノ件			一
同			五	水路寮生徒規則			一三
同 七年			一	諸艦船準備品員數假定表			二
同			二	水路寮技術官加俸表			一
同			三	銅版彫刻手傳規則			八

同	明治七年	四	觀象臺規則	二	四
同	八年	五	七年經費表	一	一
同	九年	一	水路寮分課諸規則	一	一七
同		二	八年上梓書目	二	三
同		一	艦船附屬測器目錄	二	二
同		二	分課一覽	三	三
同		三	九年經費表	一	一
同		四	水路局事務取扱順序及各課假章程	壹冊	
同	十年	一ノ一	同 十年度經費豫算	二	二
同		一ノ二	同 年度決定額	二	二
同		二	分課一覽	三	三
同		三	刊行書籍拂下手順	七	七
同		四	十年經費表內譯	一	一
同		五	附屬月給及加俸表	一	一

同		六	宇內各港海洋圖注文	六	六
同		七	華盛頓天文臺ノ略記	九	九
同		八	年末現在局版海圖目錄	三	三
同	十一年	一	宇內各港海洋水路誌注文	一二	一二
同		二	沿岸測量成績	二	二
同		三	分課一覽	四	四
同		四	柳大佐歐行通信	六	六
同	十二年	一	沿岸測量成績	四	四
同		二	分課一覽	四	四
同		三	海圖式沿革	三	三
同		四	水路報告記事始末錄	一五	一五
同	十三年	一	製圖課事務取扱順序	一	一
同		二	英版水路誌目錄	五	五

同	明治十三年	三	石版石注文目錄		一
同		四	天氣新報執行方法調		二
同		五	羅針盤製造注文ノ應答		一
同		六	十二年度刊行物等ノ總數		二
同		七	水路局假章程へ計算課取扱順序追加		二
同		八	英國へ注文諸器械目錄明細書	圖面	二四
同		九	十三年暴風記事通知書目錄		一
同		十	航泊日誌改正原稿	表	五
同		十一	分課一覽		四
同	十四年	一	局用測器目錄假調		三
同		二	鎮守府所轄艦出測規則		三
同		三	露國寄贈海圖目錄		三
同		四	十三年事業ノ要領		六

同		五	彗星測量ノ心得		三
同		六	海軍內務兩省ニ於テ觀象臺設置ノ件上申		四
同		七	水路局書籍總目錄		三
同		八	外國注文器械契約書并明細書		六
同		九	全國海岸測量ノ爲メ定額別途下付ノ義上請	圖	二〇
同		十	私設燈臺届出方府縣へ達		二
同		十一	分課一覽		四
同	十五年	一	護謨搖動帶羅鍼ノ試驗報告	圖	一二
同		二	測量艦借受之件		五
同		三	十四年度事業要領		一
同		四	十五年度上半事業要領		一五
同		五	經線儀保護ノ件ニ付上申		四
同		六	朝鮮臨時事件費		三

同	明治十五年	七	內務、海軍、文部三省協同觀象臺新設ノ件下問ニ付 水路局意見上答	一九
同		八	海門號測器注文製造ノ豫算調	二
同		九	測量課員増雇ノ件ニ付上申	二
同		十	諸圖書拂下ニ關シ農商務省ヨリ太政官へ上申	二
同		十一	海圖製造ニ關シ技術員増員ノ上請	四
同		十二	圖誌拂下代價差繼拂ニ立度上陳ス	四
同		十三	十六年和蘭國安斯特堤ノ萬國博覽會へ出品海圖目 録	四
同		十四	獨逸圖書翻譯施行ノ爲メ増額ノ上請	三
同	十六年	一	萬國普通標準時刻新定ニ付委員差遣方上申	一四
同		二	海圖水路誌製造費増額ノ上請	二
同		三	艦船測器定數表改正ノ上申	九
同		四	岡山、大村兩灣深淺略圖ノ測法第二丁卯艦へ問合ノ 件	二
同		五	十七年磁針差ノ概數	一

同		六	十六年事業要領	二〇
同		七	水路局各課事務章程外ニ附則添	一三三 別冊
同	十七年	一	可搬子午儀外國ヨリ購入上申	二
同		二	航泊日誌改正草案	表 六
同		三	測量官被置度儀ニ付上請	二
同		四	各局主管事務取扱内規定	四
同		五	十六年西行出測復命書	一一
同		五	同上分行復命書	七
同		五	陸奥國尻矢崎近傍出測復命書	六
同		六	技術官加俸給與表	二
同		七	水路局學舍規則	一一
同		八	水路局測量生徒人員	二
同		九	千島及擇捉島藥取之位置	三

同	明治十七年	十	商船航泊日誌用紙	一
同		十一	經線儀貯藏品建築圖	二
同		十二	觀象臺新築計畫圖	(缺)
同		十三	新艦製造著手等ノ調書	一
同		十四	外國へノ注文軍艦備付測器明細表	四
同		十五	十七年事業總覽	一六
明治十八年		一	水路局定員表	二
同		二	新版内外國沿岸海圖準備並海圖改正等ノ義軍事部上申水路局意見上申	四
同		三	出測用測器買入代調	一
同		四	艦船營備付測器定表改正	四
同		五	寰瀛水路誌第一卷序及緣起	九
同		六	水路局技術手傳再置ノ上研究爲致度上申	二
同		七	十九年海岸測量方面撰定ノ義ニ付軍事部上申水路局意見上申	六

同		八	十七年七月ヨリ十八年六月迄筆紙墨消耗高	一
同		九	十八年事業總況	一八
同		十	水路局官職沿革表	表 一

合計

六一九

圖 七

表 一二

水路部沿革史

沿革總記

抑モ水路部事業ハ直接世界的ノ關係ヲ有スルモノナルヲ以テ其沿革ヲ記スルニ臨ミテハ順序上先ツ其發端ノ世界ノ何レニアルヤヲ見テ然ル後我國ニ及バントス茲ニ該事業ノ濫觴ヲ釋ヌレハ佛國ハ洋紀一七二〇年ニ於テ路易第十五世ノ勅命ニ依リ海圖水路誌調査所ヲ創設シ一七三七年ニ於テ第一號海圖ヲ出版シタルヲ始メトシ其水路部ノ具體的成立ハ一八八六年ニアリ英蘭二國ハ此年ニ於テ佛國ノ海圖ヲ再版セルヲ始メトシ英國水路部ノ設立ハ一七九五年ニ在リ而シテ米國ハ一八二九年圖誌測器局ノ設置ニ著手シタルヲ始メトシ水路部ノ設立ハ一八六七年ニ在リ

我國ニ在リテハ明治二年兵部少輔川村純義後チ海軍大將伯鸞海軍部主任タリシ時津藩士柳楯悅後チ海軍少將ヲ徵シ與ニ俱ニ水路事業ノ創設ニ從事シ明治四年九月ニ至リ兵部省海軍部ニ水路局ヲ設ケタルモ殆ト名ノミ全五年

十月海軍水路寮文官組織ニ改メラレタルモ設備ノ見ルヘキモノナク事業ノ分課ハ尙ホ辛苦試設ノ途ニアリ、全九年ノ初ニ當リ米國水路局總制ナル一書ヲ得テ始メテ必要ナル分課ノ事業ヲ詳カニシ之ニ倣ウテ大ニ改良スル所アリ次テ英國水路局記録ヲ得テ又得ル所アリ全九月ニ至リ海軍條例ヲ定メラレ寮ヲ廢シ局ニ改メ職司ヲ明ニシ四分課ヲ置カレタリ我カ水路部ノ具體的ニ成立シタルハ此時ニアリト云フヲ以テ適當トセン

乃チ此時ニ於テ庶務、測量、製圖、計算ノ四課ヲ置キ編誌ト供給トハ庶務課ニ測器ノ供給ハ測量課ニ付シ各具體的分課規定ト事務取扱順序ヲ定メ各務ヲ遂行セリ

明治十二年編誌事業中ノ水路誌反譯事業ヲ測量課ニ移シ庶務課ニ編譯掛ヲ置キ水路告示ヲ開始シ水路誌、雜誌等諸出版ノ事ヲ掌ラシメ整什課ヲ置キ測器ノ製造修理及測器圖誌供給ノ事ヲ掌ラシメ十五年圖誌課ヲ置キ從前各課ニ分掌セシ圖誌製作ニ關スル一切ノ事ヲ合シテ之ヲ掌ラシメ十六年測量課

ヲ量地觀象ノ二課ニ分チ十九年ノ大改革ニ於テ水路部條例ヲ新定シテ武官組織トシ水路部ニ測量科、圖誌科、測器科、會計課ヲ置キ又別ニ觀象臺ヲ置キテ水路部ニ隸屬セシメラル是ニ於テカ水路部ノ基礎全ク確立ス

以上ヲ水路部事業沿革第一期ノ大要トス

第一期ニ屬スル要領

發端

元來水路ノ事業タル世界中如何ナル地ヲ問ハス凡ソ水面ニ於ケル船舶ノ位置ト其位置ニ關スル百般ノ事態トヲ詳知スルニ足ルヘキ必要ノ機關ヲ整備運用スルヲ以テ其主眼トス故ニ先進諸國ニ在リテハ夙ニ其主眼タル圖誌製造、測器試驗、海岸測量、測天觀象ナル四大機關ヲ設備スルヤ至レリト謂フヘシ、苟モ其一ヲ欠カンカ決シテ船舶保安ノ實ヲ全ウスルコト能ハサルナリ而シテ此等ヲ遺憾ナク齊整セシムルノ計畫施設ニ至リテハ洋式船舶ノ航海測量術ニ充分ノ經驗熟練アル航海者ヲ主トシ水路學の智識ノ濫

奥ヲ極ムル者ト該専門的事業ニ習熟シタル者トヲ從トシテ成立スルモノニ非サレハ又決シテ其目的ヲ遂クルコト能ハサルナリ然ルニ我國ニ在リテハ此三大要素ニ關スル知識ヲ有スル者ハ當時殆トアルコトナク而シテ四大機關ノ創業ノ任ニ當ラントス亦難カラスヤ

最初ノ部長タル柳海軍少將ハ舊津藩士ニシテ安政年間舊幕臣及諸藩士ト共ニ長崎ニ於テ荷蘭人ヨリ數學測量ノ傳習ヲ受ケ成業ノ後チ舊津藩ノ航海術教頭トシテ教鞭ヲ執リタル人ニシテ時ノ大阪府知事五代才助兵部少輔川村純義ノ推薦ニ依リ徵サレテ水路部創業ノ任ニ當リタルナリ然ルニ其創業ニ當リテヤ必要ナル補助員ノ欠乏ハ第一ノ困難ヲ醸シ測器ノ不全ハ第二ノ困難ヲ成シタルニ拘ラス前記四大機關ノ必要ナルヲ看破シ力ヲ竭シ身ヲ殲シ人物ヲ養成シテ銳意此等ノ事業ニ著手シ遂ニ百難ヲ排シテ畧其基礎ヲ建設シタルハ後繼者ノ最モ感謝ニ堪ヘサル所ナリ

左ニ其基礎始設ノ由テ起ル所ノ大要ヲ述ヘン

一、分課規則

明治九年海軍條例ヲ定メ水路局ノ職司ヲ明定サレタル迄ハ諸種ノ假規則ヲ設ケタリト雖分課法不完全ナルノミナラス創業ノ當時規律的行動ニ慣レサルヲ以テ多少公私混淆ノ弊尙ホ存シタルヲ以テ實際ニ行ハレタルコト少ナク此年ニ至リ各課長ヲシテ米制ニ倣ヒ英制ヲ參照シ起案セシメ討議ノ上具体的分課規定及事務ノ順序ヲ定メタリ當時尙ホ規律的行動ニ慣レサル創業ノ餘弊ヲ受ケタリト雖此時始メテ部内諸機關ノ連環運動ノ基礎ヲ立ツルニ至レリ

二、測量事業

海上測量術ニ於テハ明治三年英艦「シルピア」艦長シント、ジョン、ト伊勢各港及内海ニ於ケル連合測量時ノ見學ニ於テ測術上大ニ得ル所アリ次テ柳大佐量地括要ノ著述アリ今日ノ測術進步ノ端緒ヲ開キタリ

天測術ノ一大進歩ヲナシタルハ明治七年長崎ニ於ケル金星經過觀測ニ當

六
リ米國ノ博士ジョージダビンノ測法ヲ傳習シタルト、全氏ノ寄贈ニ係ル「タイム、アジマス、ラチチュード」ヲ得タルト、引續キ全博士ノ熱心ナル誘掖ニヨリ獨逸特製ノ精工ナル赤道儀及子午儀ヲ觀象臺ニ使用シタルト、明治十一年柳大佐(後チ少將)磯野少尉(後チ少佐)ノ歐洲天文臺視察トニヨリ發達スル所アリ

海岸測量ハ創業以來數年間ハ遺憾ナカラ外國艦船ノ測量請願ヲ拒絶スルコトヲ得サルノ情況ナリケレバ柳局長ノ苦辛容易ナラス日夜速ニ自力之ニ任スルノ方法ヲ講究スト雖經費用具人物ノ欠乏ニ加フルニ幾多ノ事情之ヲ許ササリシカ明治十四年ニ至リ始メテ全國海岸十二ヶ年測成ノ大計畫案ヲ立テ其實行ヲ始メテヨリ漸ク外國人ノ測量ヲ拒絶スルヲ得ルニ至レリ而シテ該計畫案ハ柳局長ノ命ヲ受ケ肝付少佐之カ主任トナリ異常ノ學識才幹ヲ以テ極力調査セル結果ニシテ此事タル我カ海岸測量事業發達ノ大端ヲ啓キタルノミナラス各事業ノ發達モ之ニ隨ウテ進行シタルナリ

然レトモ此大計畫ノ基礎ヲ爲サシメタルモノハ贈從四位伊能忠敬ノ實測地圖及其實測録ニシテ若シ是ナカリセハ該計畫ノ起案ハ容易ニ立チ難カリシナラン其後各區各班ノ測量豫定計畫モ亦同シク常ニ同圖ノ餘惠ヲ受ケタル鮮少ナラサリシ

此大計畫ハ明治十五年ヨリ實施シ此時ヨリ始テ海岸測法ヲ實行セリ
驗潮法ハ柳大佐ノ最モ苦辛セル所ナルカ明治十四年肝付大尉ノ英書譯述調査ニ據リ編定セル驗潮心得ニ依リ發達ノ端緒ヲ開キ全廿四年加藤大尉ノ調査ニ依リ現行ノ新式驗潮推算法ニ改正シタリ

三、觀象事業

該事業ハ柳大佐ノ最モ精誠ヲ瀝キタルモノニシテ同大佐ハ水路測畫ノ基本點トシテ海軍觀象臺建設ノ必要ヲ感シ其意見ヲ建議スルヤ川村海軍大輔ハ速ニ之ヲ納レ自邸ノ地若干ヲ割キテ之ヲ獻シ柳大佐ノ辛苦ニ依リ其基礎ヲ置キ肝付加藤磯野ノ三士官ト共ニ之ヲ經營シ明治十一年大佐カ歐

洲觀象臺視察ノ結果磯野中尉ヲシテ專ラ其任ニ當ラシメ著々進歩ノ端ヲ開キタリ

四、圖誌事業

編誌製圖事業ハ嘗テ素養アルモノナク製圖ノ方法ハ明治三四年英測量艦「シルビア」ニ就テ見學スル所アリ次テ英國商社ノ筆者ヒンドレー著及「ゼームス、イムレー」會社出版及英蘭水路部ノ古圖ヲ模範トシテ研究シ海圖式ハ各國海圖式ニ考證スル所アルモ重ニ英式ヲ根據トシテ假定シ水路誌モ亦前記英商社及水路部ノモノヲ模範トセリ然レトモ圖誌トモニ水路語ノ反譯ニ關スル非常ノ困難ハ英ノ海軍大將スミス著ノ「ノーチカル、ターム」ト、清人ノ漢譯ニ係ル英水路誌ヲ得タルトニ由リ大ニ之ヲ排スルコトヲ得次テ柳大佐、石川出仕ノ調査ニ成レル水路提要ヲ圖誌學ノ初步トシテ刊行シタルハ大ナル進歩ノ端緒トナレリ而シテ艦隊航海士官ノ水路記事ノ報告ニ貢獻シタルハ海軍中尉岡部政實、全本宿宅命、全大尉柏原長繁、諸岡賴之等最

初ノ人ナリシ

彫刻印刷ニ於テハ本邦舊來ノ法ニヨリ獨力研究シタルヲ以テ諸種ノ困難湧起シ其發達遲緩ナリシモ石版術ハ伊國人ノ傳習ヲ受ケタル者ヲ用ヒタルヲ以テ比較的進歩セリ然レトモ柳大佐歐洲視察ノ結果彫刻ノ分業ト器械トハ獨逸ニ、石版石ハ澳國ニ、布目器械ハ蘭國ニ、印刷器械印刷紙等ハ多クハ英國ニ據リ各進歩スル所アリタルモ印刷肉ニ至リテハ技術未タ熟セス外國製ノモノヲ適用シ得ルニ至ラス絶エス研究ノ途ニアリシ

五、局用器械

測量及製圖器械ハ明治四年英艦「シルビア」艦長ノ厚意ニ依リ天測器械ハ明治九年米人ダビン博士ノ厚意ニ依リ購得セシモノ實ニ局用器械ノ基礎ヲ成セリ此等ノ器械ハ左ノ如シ

一、經緯儀

六吋 各一器

一、經線儀

三箇

- 一、天測セキスタント六分儀
- 二器及臺
- 一、水銀盤
- 一箇
- 一、甲板時計デックウオッチ「デント製」
- 一器
- 一、鍾測六分儀サウンデンクセキスタント
- 一器
- 一、三杆分度儀ステーションポインダー
- 六吋各一箇
- 一、分度儀プロトラクトル
- 一器
- 一、製圖器コンパスボックス（繪具付）
- 二箇
- 一、振付「チバイダー」
- 六箇
- 一、木製「バラレル、ルール」二呎物
- 六箇
- 一、製圖紙及映臨紙
- 若干
- 右英「シルビア」艦長周旋
- 一、赤道儀及子午儀
- 右米國博士「ダビソン」周旋

六、原備圖

原備圖誌ハ我カ圖誌調製上最要ノ基本材料トシ且ツ世界圖誌ノ改良進歩ノ沿革ヲ明カニスル爲メ明治九年石川庶務課長ヲシテ米國ノ制ニ倣ヒ分類保管出納ニ關スル方法ヲ調査セシメ之カ設備ヲ新定セリ即チ現今ノ原備圖誌ハ此ノ基礎ニ由リ發達スル所ナリ但シ未タ測量ノ幼稚ナル創業當時ニアリテハ必要ナル圖書材料ノ蒐集ノ苦辛ト効果トハ顯著ノモノナリシ

七、圖誌、測器ノ供給

圖誌ノ供給ハ多年ノ間難境ニアリ開局初年ハ殆ト各艦從來備付ノ英蘭二國製ノモノニヨリ我測量圖ノ刊行成ルニ從ヒ之ヲ補充セシモ英版圖ノ補充ハ購求ノ途開ケス多ク寫圖ヲ用ヒタリ朝鮮及支那事件ニ關セシ當時ノ航海ニハ殊ニ然リトス當時外國注文ハ領事ヲ經由スルカ然ラサレハ横濱ノ商館ガ外國船ノ爲メニ準備シタル少數ノ圖誌ヲ求ムルノ外ナキヲ以テ補充ニ非常ナル不平均ヲ生シ甚タ困難ナリシ其供給準備法ノ確立シタ

ルハ明治十九年海圖水路誌供給規則(省令)ノ發布サレタル時ニアリ然レトモ第一區域ノ圖誌ト雖過半英圖ニヨリ尙ホ獨立スルニ至ラサリシ測器ノ供給モ亦圖誌ト全ク其趣ヲ同ウシ困難ヲ極メタルモ明治七年三月ニ於テ早ク既ニ艦船供給測器定表ヲ規定シタルハ海軍兵學校付教師英海軍少佐(今ハ中將)ドーグラスノ厚意ニ基クモノナリ然レトモ是レ唯目的ヲ定メタルノミニシテ實際補充ハ常ニ臨時費ニ據ルノミナラス補充ノ不平均ハ常ニ受渡ノ雙方ニ大困難ヲ感シタリ明治九年ニ至リ定表ノ改正アリ全十三年部内ニ於テ海軍大尉橋口兼備ヲシテ製造ニ着手セシメ且ツ測器ノ改良及検査ノ事稍ヤ進歩ノ緒ニ就キ十九年ニ至リ其供給法ハ直接艦船ニ配付セス各鎮守府ニ配付スルニ至リ供給上ニ一步ヲ進メタルヲ見ル正當ナル測器検査ノ基礎ヲ開キタルハ明治十一年後ノ觀象臺ニ於テ之ヲ行ヒタルニアリ

八、第一期事業ノ方針

水路部各事業ノ端緒ヲ開キタルハ大要前記ノ如クナリト雖其原動力トシテ始終柳部長ノ取リタル方針ノ要ハ左ノ如シ

(一) 水路事業ノ一切ハ海員的精神ニ依リ徹頭徹尾外國人ヲ雇用セス自力ヲ以テ外國ノ學術技藝ヲ選擇利用シ改良進歩ヲ期シタリ

(二) 海上測量事業ハ總テ艦船ニテ施行シ下級補助員ハ必ス水兵ヲ用フルコト

(イ) 測量ノ許可アル毎ニ必ス鎮守府ニ測量艦ヲ要求セリ

(ロ) 測量下級補助員トシテ水兵若干名ヲ部内ニ常置シ出測計畫上不足アル時ハ必ス之ヲ鎮守府ニ要求セリ

(ハ) 屢々測量艦ノ建造ヲ建議セリ

(三) 測量艦ノ建造容易ニ行ハレス借用軍艦ノ測量ハ常ニ時機ヲ失シ全國測量速成ノ目的ヲ立ツルヲ得ス明治十四年遂ニ方針ヲ一變シテ真正ノ測量艦建造成ル迄ハ測量艇測量ニヨリ全國沿岸十二ヶ年測成ノ大

計畫ヲ遂行セリ

9 (四) 測量、觀象、圖誌、測器ノ整備及改良ニ關シ外國ノ施設ニ注目スルコト

(イ) 水路事業ニ關シ務メテ外國當局ト交際シ爲メニ外國通信掛ヲ設ケ
タリ

(ロ) 外國製ノ改良器械及新書籍ニ注目シ爲メニ英學ノ外獨逸及露語ニ
通スル者ヲ編修員ニ採用セリ

(ハ) 觀象事業ニ關シ各國天文臺長ト智識ヲ交換シタリ

(ニ) 原基器械ノ購買ニハ最モ重キヲ置キ英獨ノ天文臺長又ハ英國水路
部次長ニ特別検査ヲ依頼シ其盡力者ニハ贈品ヲ酬ヒタリ

(ホ) 外國測量艦及水路ニ關シ特別任務ノモノ近港ニ入ル時ハ部長自身
又ハ部員訪問ノ上圖書器械其他諸般ノ水路事業設備等ヲ視察シタ
リ

(ヘ) 交際上ノ義理又ハ利益アリト認ムル外國軍艦入港ノ時ハ海圖ヲ贈

リ又ハ本部及觀象臺ヲ觀覽セシメタリ

(五) 航路標識ノ位置構造等ニ關シ屢々意見ヲ陳シ委員ヲ出シテ其改良ヲ
促シタリ

(六) 水路事業ニ關シ將來必要ノ參考トナルヘキ件々ヲ常ニ蒐集保存スル
ニ勗メタルコト即チ水路雜叢是ナリ(此書類ハ永代保存ヲ要ス)

(七) 事業員ノ養成

(イ) 水路官ヲ養成スル爲メ生徒ヲ置キ其廢止後モ他ノ方法ニテ之ヲ養
成セリ

(ロ) 成業ノ武官候補ニハ運用術修業ノ爲メ兵學校練習艦ニ通學セシメ
タリ

(ハ) 測量練習ノ爲メ艦船ノ航海科士官ヲ部内ニ勤務セシメタリ

(ニ) 間接上水路學智識ヲ職員一般ニ普及セシムルノ目的ニテ測量、編修、
製圖各員有志者ノ私立ニ成レル水路學會ニ便宜ヲ與ヘタリ

(ホ) 水路學舎ヲ觀象臺内ニ設ケ部員ヲ選ミ學術ヲ研究セシメンコトヲ建議セリ

(ヘ) 銅版彫刻生ヲ置キ該技術ヲ練習セシメタリ

(ト) 測器製造工ヲ置キ製造修理ト共ニ技術ヲ研究セシメタリ(布目器械ノ如キハ良品ヲ製造スルニ至レリ)

右方針實行ニ伴ヘル困難

(イ) 事業ニ適スル人物ノ欠乏ト養成ノ困難

(ロ) 第一期年間ハ屢々内外征討ノ事及ヒ政府財政減縮ノ舉アリ創業ニ必要ナル經費ヲ局限或ハ節減セラレタル爲メ異常ノ打撃ヲ受ケタルコト

(ハ) 艦隊ト水路部ト事情ノ疏通セサリシコト

(ニ) 一方ニ測量生徒ヲ廢シ一方ニ艦隊ヨリ航海士官ヲ要求スルヨリ生スル紛議

(ホ) 測量艦管轄權及艦員ト測量官トノ間ニ於ケル權限及給與ノ區別

(ヘ) 艦船供給圖書器械ノ主務及供給法ノ久シク一定セサルコト、購買ノ不自由及之ニヨリ需用廳及艦船ト供給廳トノ間ニ起リシ紛議

(ト) 磁針ニ關スル智識ノ欠乏

(チ) 諸原備圖書器械類ノ欠乏、購買ノ不自由、使用法ノ不明

(リ) 彫刻、印刷ノ技術研究及印刷紙不良ノ困難

(ヌ) 各員中少數ヲ除キ責任的精神ノ普及セサルコト

(ル) 複雑ナル技術的水路事業ノ眞ノ狀態カ他方面ニ解セラレサルヨリ起ル幾多ノ事件

以上ハ創業ヨリ明治十九年ノ大改革ニ至ル迄ノ時期ニ屬スルモノナルカ此期間ハ水路部史上最モ大切ナル各事業ノ基礎構成ノ時代ニシテ即チ上ニ列記セル各事項ノ要領ハ之ニ續キテ列叙スル事實ニ就テ之ヲ證セン抑モ明治中興ノ際我邦ハ歐米文明ノ學術技藝ヲ輸入シテヨリ百般ノ事業發達ノ途ニ

アリト雖概シテ聘用セル外人ノ指揮監督ニ基クモノ多キニ拘ラス我水路事業即チ夫ノ航海、觀象、岸測、鍾測、地形測、磁針測、驗潮、水路記事、製圖、彫刻、印刷等ノ諸術及諸器械ノ用法其他之ニ關スル諸設備等ハ地測術ノ開祖タル贈正四位伊能忠敬ヲ除クノ外殆ト我邦人ノ夢想タモセサル事業ナルニ獨リ我邦人ノ力ニ依リ文明諸國ノ智識ヲ吸收シ之カ基礎ヲ置クニ至リタルハ豈偶然ナラシヤ思フニ此等ノ文明的要素ハ自然カ平等的ニ世界人類ニ與ヘタルモノナルニモ拘ラス其之ヲ發揮シ得ルモノハ西洋諸國ニアリトノ一般觀念ニ埋モレツ、アリシ時ニ突然亞細亞洲中我日本ニ於テ之ヲ陸ニシテハ伊能忠敬之ヲ海ニシテハ柳樽悅之ヲ發揮シ以テ之ヲ世界ノ海國ニ紹介シ其賞讚ヲ博シ其畏敬ヲ受クルニ至リタルハ洵ニ我國ノ名譽ナリト謂ハサルヘカラス是ト同時ニ基礎ヲ定ムルニ當リテハ事物ノ發見又ハ進步ノ段階トシテ困難ニ繼クニ困難ヲ以テスルモ毅然トシテ撓マス屈セス其目的ノ爲メニ進行シタルハ以テ柳少將ノ職分ニ熱誠ナルト精力ノ人ニ殊絶スル所アルトヲ見ルニ足

ル然レトモ亦川村海軍卿ノ慧眼ト達識トハ柳少將ヲ信任シ少壯有爲ノ士官タル肝付、加藤、磯野等其下ニ在リ左提右携シテ各方面ニ關スル難關ヲ排キタルニ由ラスンハアラス唯其後測器事業ノ一時頓挫シタルト柳少將ノ精誠ニヨリ完成シタル海軍觀象臺ノ他ニ移リタルハ最モ遺憾トスル所ナリ以上ハ水路部事業第一期ニ關スル沿革ノ大要ナリ今其進步經過ノ蹟ヲ略ホ年次ニ隨ウテ列舉スレハ左ノ如シ

明治二年 發端

(兵部省所屬)

全 三年 測量見學練習時代

(兵部省水路掛)

全 四年 測量創業時代

(兵部省水路局)

全 五年 諸業創設調査及海圖試刊時代

(海軍省水路局)

全 六年 水路官教育觀象臺計畫等施設時代

全 七年 天測術傳習時代

(海軍省水路寮)

全 八年 事業分課試設時代

- 全 九年 廢寮置局分課章程ノ新定基礎假設時代
- 全 十年 學術調査時代
- 全 十一年 柳局長歐洲視察時代
- 全 十二年 新智識應用及寫圖ヨリ漸次刊行物ニ入ル時代
- 全 十三年 經費大節減諸施設困難時代
- 全 十四年 十二ヶ年全國測量大計畫時代
- 全 十五年 測量計畫ノ實施、觀象臺ノ整備及圖誌科ノ新設ニ依リ基礎確立時代
- 全 十六年 諸事業發展時代
- 全 十七年 全上
- 全 十八年 全上

(海軍水路局)

水路事業ノ
發端

明治二年

明治維新百事興張ノ時ニ當リ軍事ハ總テ兵部ナル一省ニ於テ處理スル所トナリ部務ノ大体殆ト陸軍ニ屬シ其海軍ノ如キハ一ノ分課ニ過キス又其軍艦ト稱スヘキモノモ各藩ノ獻艦ト舊幕府ノ殘艦トヲ併セテ僅々數隻ニ過キス是時ニ方リ當局者ハ夙ニ水路測量事業ノ必要ナルヲ認メ明治二年十一月(廢藩置縣ハ四年)始メテ津藩士柳檜悅及當時海軍傳習所出仕ナル田邊藩士伊藤雋吉ヲ徵シテ兵部省御用掛トシ水路測量ノ事ヲ計畫セシム當時事急遽ニ起リ二士未タ海上測量ノ術ニ慣レズ其計畫準備ニ關シテハ多大ノ苦辛ヲ極メタリ次テ英艦「シルビア」内國沿岸實測ヲ請願スルノ事起レリ

因ニ柳檜悅ハ安政年間航海測量術ヲ長崎ニ於テ幕府ノ雇用セル蘭人ヨリ勝鱗太郎等ト共ニ傳習ヲ受ケタル人ナルカ其傳習當時ノ雜記ヲ見ルニ頗ル興味アリ依テ附錄第一號ニ之ヲ抄録シ讀者ノ參考ニ供ス

明治三年

四月

海軍創立ニ
關スル柳ノ
建議

海軍創立計畫ニ關スル諮問アリ之ニ對シ柳御用掛ハ意見ヲ上申ス即チ左ノ如シ

今ヤ宇内鎮定萬民

王化ニ浴シ候折柄愈以テ海陸兩軍ヲ練兵シ

天威ヲ海外ニ輝シ候様被爲在度段ハ奉建言候迄ニ無之候海軍ノ創立ハ必ス航海測量ヲ基トス然ルニ和船渡海ノ宿弊未タ去ラス候ヨリ航海ノ術全ク行ハレス近來海防且ツ通商ノ爲メ列藩ニテ艦舶ヲ採入レ候事大約百有餘號其價殆ト千万金ニ及ヘリ然レトモ著沙艘舶シ或ハ撞礁破壊セルモノ又二三十隻却テ此カ爲メニ國利ヲ失ヒ困弊致シ候藩モ有之哉ニ傳聞仕自然航海ノ便捷有益ナルヲ表セス艘舟撞礁ノ說ノミ唱ヘ候ヨリ海軍開化ノ基本ヲ妨ケ候之レ全ク靄霧朧朦ナル天色ニ會シ猝風怒濤ニ遇ヒ天變地動

不得止トハ申ナカラ恐ラクハ航海測量ノ術ニ疎ク器械轉用ノ理ヲ曉ラサル輩ヲシテ擧ケテ艦將舵工ニ命シ卑蜚漁夫ヲ招キ水路ヲ嚮導セシムルヨリ司令行ハレス鴉說紛々遂ニ方向ヲ錯ヘ其位置ヲ誤リ巨大ノ寶貨ヲ海底ニ沈入スルニ到ル竊ニ聞ク泰西花旗國ノ舵工ト云フトモ險甚ナル颶風ニ會シ萬全趨避ノ策ヲ遂ケ候ニハ無之由ニ候ヘトモ沈沒破壊ハ多ク商船ニシテ兵船ニ甚稀ナリ此レ兵船ニ在テハ舵工水師等航海ノ術ニ精ク避颶ノ法ニ密ナル故ナリ方今

萬機御親裁ノ秋ニ當リ

神國ノ名分ヲ汚シ且人命ニ係ルノミナラス海軍開化ノ期ニ到リ申間敷遺憾不過之附テハ不肖菲才ナカラ積年航海ノ術技ニ苦心仕居候故素志建言仕度ト存候得共纔ニ其一斑ヲ握リ候迄ノ義深ク恐懼罷在候處今般海軍御創立ノ義ニ付御垂問被成下不堪欣躍之至粗忽夙志ヲ不顧潛越建言仕候則チ方今ノ急務ハ東京浪花ノ二港ニ海軍局ヲ造立シ先ツ指向キ一昨年御採入

ニ相成候鐵艦其他宿錨ノ迦農艦護送船等ヲ聯セ海軍一隊トシ品海ニ御備
 被遊府藩縣有志ノ徒ヲ招キ海軍一手ノ學即チ海上答古タクク知幾海上砲術航海
 術測量術操帆學器械轉用學其他海軍ニ關係致シ候術技ヲ教育演習シ且ツ
 測量操帆器械運轉ヲ練熟セシメン爲メ時々四方ヲ航海シ艦内ノ官員ハ其艦ノ
大小ニ係リ候故其船
ヲ定メテ後チ其員數ヲ定ムヘシ又
航海入費ノ償ヒ方追テ可奉建言候其術ニ熟シ其任ニ堪エ候輩ヲ追々御選舉被爲
 在度此レ海軍創立ノ基本ト奉存候俯シテ願ハクハ不熟至極ニ候得共航海
 測量ノ術ニ於テハ別紙ノ書籍ヲ譯シ專ラ之ヲ施用仕度此儀何卒御委任被
 下置候様奉懇冀候以上

明治三庚午四月

柳惣五郎檣悅頓首敬白

兵部卿殿

航海學スチエールマンキエント

千八百六十七年式ブローヘル氏ノ法ヲ用ユ但シ起原細解ニ至リテハビ

ラール氏第二版ノ式ヲ用ユ
量地學ヘオデンシ

千八百五十五年式フアンケルキウーキ氏ノ法ヲ用ユ
談天學ハテルレヘメル

カイセル氏ノ法及ヒフローエル氏ノ法ヲ用ユ
度量學メトキエント 單式度量學 高上度量學 矩規度量學

ストロートマン氏ノ法ヲ用ユ
演段學アルヘブラ

ケンペース氏ノ法ヲ用ユ

微分積分學インテグチルツヒヤンチール

弧三角術デニゴノメトリホニオメトリ

「スターチカ」(靜力學)

「デナミカ」(力學)

右スミット氏ストロートマン氏ノ法ヲ用ユ
操帆學

千八百六十五年モッセル氏ノ法ヲ用ユ

五月

水路測量ノ發端
此月ニ至リ太政官達第三三一號ヲ以テ第一丁卯丸(舊萩藩獻艦)ヲ英國軍艦(測量艦「シルビア」)ニ合併シ南海測量ヲ命セラレ全時ニ全第三三五號ヲ以テ此等諸艦ノ廻航支配地ニ其諸用ヲ支辨スヘキ旨達セラル因テ柳御用掛ヲ測量主任トシ伊藤雋吉ヲ其副トシ全月東京ヲ發シ英艦ト共ニ的矢尾鷲ノ諸港ヲ測查ス○初メ柳御用掛ハ水路測量術ノ經驗ニ富マスト雖豫テ習得セル測量術ヲ應用發揮スルコト敢テ難キニ非ス寧ロ其技術ハ外國測士ヲ凌カントノ確信ヲ堅持シ共ニ上記地點ノ測量ニ從事セシカ其測量進行中海岸測角位置ノ連結、鍾測術、驗潮法及器械ノ用法等ニ於テ甚タ其豫期ニ反スルヲ發見シタリ故ニ此測量ハ事實上測量練習ト云フヲ適當トス

測量練習

七月

内海ノ鹽飽諸島ニ達シ合併測量ニ著手ス當時之ニ從事セシ分業職員ハ左ノ如シ

測量ノ分擔

明治三年軍艦第一丁卯從事測量

大三角及地形測	兵部省御用掛	柳	樽	悅
岸測	兵部省御用掛	柳	樽	悅
	兵部省御用掛	伊藤雋吉		
天測	兵部省御用掛	伊藤雋吉		
	兵部省御用掛	柳	樽	悅
鍾測	第一丁卯二等士官	青木住真		
	兵部省御用掛	伊藤雋吉		
第一丁卯一等士官	第一丁卯乘組	今井兼輔		
	第一丁卯一等士官	石田鼎三		

製圖

〔第一丁卯乘組 中村雄飛
第一丁卯一等士官 石田鼎三

十二月

海上測量ノ
成績及聯合
測量ノ情況

鹽飽瀬戸即チ今ノ所謂備讚瀬戸ノ大部分ヲ測了セリ。○當時諸員ハ地形測量ニ於テハ多少ノ智識ヲ有セルモ海上測量術ニ慣レス且ツ測器ノ如キ古式ノ「セオドライト」「セキスタン」トノミニテ英艦ノ豫備品ヲ借リテ僅ニ其欠ヲ補ヒ殊ニ鍾測術ニハ慘憺ヲ極メタリ然レトモ之ニ由テ測術上得ル所蓋シ莫大ナルモノアリテ遂ニ我海軍水路事業上今日ノ如キ發展ノ基礎ヲ成シタリ而シテ當時「シルビア」艦長ハ柳御用掛ノ自信ト反シ亞細亞人何ノ知ル所アラントノ推想ヲ抱キタルニ我測圖ノ正確ナルヲ視テ大ニ其推想ノ誤リナルヲ悟リ柳御用掛ヲ時ノ外務當局者ニ向ヒ賞揚シタリト云フ要スルニ水路測量法及製圖法ニ於テ分業上「シルビア」艦長シント、ジョンニ負フ所多大ナリシハ吾人ノ永ク忘ル可カラサル所ノモノナリ(附錄第一號ヲ見ヨ)

我國當時圖
誌ノ現狀

此測量モ尙ホ測量練習ノ状態ヲ免カル、能ハサリシモ的矢尾鷲ニ比シテハ驚クヘキ急激ノ進歩ヲ見タリ

編者案スルニ我邦ニハ當時ニ至ル迄所謂海圖ヲ製シタルモノアルナク外國船ノ維新前我沿海ニ到ルモノ數百年前ヨリナキニ非サルモ我三大島ノ形狀港灣ニ關シ殆ト信スヘキ圖ヲ有セス竊ニ伊能忠敬ノ日本全圖ヲ見テヨリ其眞形ヲ知リ是ヨリ外國船ノ往來漸次多キヲ見ルニ至レリ而シテ維新前ヨリ明治初年迄ニ幕府ニ強請シテ外國船ノ我港灣等ヲ測量シ其海圖ヲ發布セシモノ即チ明治二年ニ於テ英海軍海圖トシテ發行セシモノハ大約九州ニ於テハ長崎港、富岡、玉之浦、平戸、瀬戸、呼子港、本洲北西岸ニ於テハ七尾、三國、伏木、宮津、佐渡、新潟諸港、本洲北岸ニ於テハ青森灣、諸錨地、津輕海峽、北洲ニ於テハ函館港、本洲南岸ニ於テハ東京海灣、橫濱、橫須賀、下田、清水、紀州大島及浦神、由良内、田邊、大崎、紀伊川口、日本内海ニ於テハ兵庫、大阪、明石、瀬戸、鳴門、鞆及姫島錨地等ニ過キスシテ其測量製圖モ亦

今時ノモノニ比スレハ殆ト畧測走測程度ト選ム所ナク又水路誌ニアリ
テモ僅々「チャイナ、パイロット」ナル一小冊子中ニ支那、日本、朝鮮、黑龍沿岸
州ノ大海面ヲ網羅シタルヲ以テ日本部ノ如キハ航海日誌ノ一部ノ抜抄
ニ過キサル觀ヲ呈シタリシモ當時ニアリテハ其航海者ニ貴重セラル、
想像ノ外ニアリ當時我レ既ニ艦隊ヲ有ス而シテ我萬里ニ渉ル沿岸及千
百ニ餘ル港灣中古今内外ヲ通シテ其測量ヲ經タルモノ此ノ如ク其レ乏
シク且ツ粗ナリ其測量ノ術及圖誌ノ編製ニ至テハ茫乎トシテ知ルモノ
アルナキニ當リ伎倆素養アリテ意志強健精力殊絶ナル柳少將ノ蹶然起
テ其創業ノ任ニ當リタルハ誠ニ我海軍ノ至幸ト謂フヘシ然レトモ其創
業ノ困難ナル事業ノ性質ト當時該智識ノ普及セサルトハ到底一朝一夕
ノ成業ヲ期スヘキニ非ス
維新時勢ノ驅ル所外人ノ争フテ我國ニ關係ヲ生セントスルヤ依然トシ
テ航海上必要ナル圖誌ヲ求ムルノ急ナルヨリ英、佛、米、伊等ハ維新前ノ如

燈臺ニ關ス
ル告示

全上

ク屢ハ我邦沿岸ノ測量ヲ請願スルニ從ヒ其許可ヲ與ヘタルハ自國ニ其
機關備ハラサル爲メ彼ノ強請ヲ拒絕スルニ辞ナク止ムヲ得サルニ由リ
シハ恰モ現時支那、韓國ノ状態ノ如クナリキ明治以後ハ其三年英測量艦
「シルビア」ヲ始メトシ外國軍艦ノ我沿海測量請願ヲ拒絕シ得サリシ情況
ハ引テ明治十五年ノ長キニ及ヒ全年我沿海測量十二年計畫成リ著々其
歩ヲ進ムルニ至リタルヲ以テ始メテ外國ノ測量ヲ拒絕シ得ルニ至レリ
相州城ヶ島ノ篝火ヲ廢シ西洋形燈明臺ヲ建築ス(太政官布告第八九八號)
是レ今ノ水路告示ニシテ當時布告ニ據ル
相州劍埼ニ燈明臺ヲ建築シ來ル正月十一日ヨリ點火ス(太政官達第九四六號)
是レハ達ヲ用ユ

明治四年

測器購入ノ
發端

正月
「シルビア」艦長シント、ジョンニ英國ヨリ必要ノ測量及製圖器械購入方ヲ依囑
ス

外國艦測量

佛國軍艦内海測量トシテ從備前尻見以西長門下ノ關迄航行被差許旨達セラ
ル(太政官達第二十七號)

二月

第二ノ外國
艦測量

北海道沿海測量ヲ兵部省ニ御委任相成リ御雇入英艦へ付添諸事可取計
(太政官第七十二號)トノ命アリ當時柳檜悦ハ海軍少佐ニ任シ春日艦長ヲ命セラレ伊
藤出仕ハ兵學中助教ニ任セラレ中村雄飛(後少佐)青木住真(後大佐)五藤國幹(後
少佐)ヲ春日ノ士官トシ二月下旬英艦ト連合シ北海道各地測量ノ爲メ出發ス
英艦「シルビア」モ亦至ル因テ相議シテ測量區ヲ分チ我ハ野付錨地、瑯瑤瑠水道、
壽都灣、小樽港、彼ハ厚岸灣、室蘭港及國後近海ヲ測量ス○此測量ヤ柳少佐ハ專

ラ大三角測及水路記事ヲ伊藤中助教ハ專ラ天測ヲ主管ス

七月

始メテ局ヲ
置ク官制ヲ
發ス

兵部省中ニ海軍水路局ヲ置キ少將ヲ以テ水路監督長官トシ中佐一人少佐二
人ヲ定員トス(太政官第五十七號)然レトモ當時北海道測量中何等ノ實行施設スル所
ナシ

八月

獨立測量ノ
發端

北海道ノ豫定測量ヲ了へ我艦ハ歸途宮古、釜石ノ兩灣ヲ測量シ石卷灣東名海
岸ヲ視察シテ九月歸京ス之ヲ我海軍獨立測量ノ權輿トス但シ此行ニ於テ使
用セル測量器械ハ英艦「シルビア」ヨリ借用シタルヲ以テ非常ノ便宜ヲ得タリ
○當時ノ潮測ハ小潮升ト小潮差トヲ區別スルノ智識未タ開ケス故ニ其潮升
推算上ニ非常ノ苦辛ヲ費セリト云フ

但シ此役ヤ太政官ヨリ獨逸汽船ヲ雇用シテ測量船用石炭ヲ廻送スルコト
ヲ許可スル旨及開拓使ヲシテ缺乏品ヲ兩艦ニ供給スヘキ旨達セララル

九月

兵部省海軍部内條例ヲ定ム太政官第一百十三號

第一條 海軍部内ニ五局ヲ置キ事務ヲ分掌ス

中畧

第四、水路局

水路測量、浮桶、浮標、瀨印、立標、及燈明臺、燈臺ノ庶務及諸出入金額ノ
勘査ヲ司ル

細則

局内ニ記註庶務掛ヲ置キ浮桶、瀨印、燈明臺ノ築造、入用諸物ノ蓄藏、
浮桶等位置移轉ノ詳記及水路測量諸圖管轄一切ノ庶務ヲ司ル

第二十一條 兵部省ニ出仕スル將校並學術上又一般ニ關スル職務ノ官
人ノ事

一、右ニ舉ル將校官人ハ左ノ通

中畧

第六、水路監督長官 省中第四局長官

右ハ各直ニ兵部卿ニ隸スルコト

一、日本國諸河口ノ水利及沿海水路ノ用ニ供スル諸建築物ハ少將監督
長官ニ委任スルコト

中畧

第四十七條

一、第三局並第四局ニテ雛形ノ細工人、圖畫彫刻ノ職人等ハ直ニ其局長
ニ隸スヘキコト

參照

兵	
海	
大元帥	一等
元帥	二等
帥	三等
大將	等四
將中	等五
將少	等六
將大	等七
佐中	等八
佐少	等九
佐大	等十
尉中	等十一
尉少	等十二
尉曹	等十三
長權曹	
長軍曹	

省	部			
	會計局	水路局	造船局	軍務局
				秘史局
				兵部卿
			兵部少輔	
		監督長官		
		中 佐 少 佐 大 録 權 大 録 中 録 權 中 録 少 録 權 少 録		

因テ海軍操練所(今ノ大學校及水交社ニシテ)即チ元ノ海軍省ニ假局ヲ置ク而シテ柳少佐(檜悅)ハ春日艦長ヲ中村中尉(雄飛)青木中尉(住真)五藤少尉(國幹)ハ春日乗組ヲ免セラレ何レモ水路掛ヲ命セラレ屬員大後秀勝ニ製圖ヲ錦部清謙ニ書記ヲ掌ラシム然レトモ當時局ノ全部ハ僅ニ八坪ニシテ諸員皆此中ニ群居シ事ヲ執レリ而シテ航路標識ニ關スル業務ハ條例ノ規定アルニ拘ハラス工部省ニ於テ實施シ水路局ハ之ニ關セサリシ

因ニ云フ兵學中助教伊藤雋吉ハ海軍少佐ニ任シ春日艦長ニ補セラレ爾後

官
武官
又官
屬員

水路局ニ職ヲ取ラス歷任シテ海軍次官トナル

十月

設局草創ノ際諸職員及諸器械圖誌類ハ殆ト皆無ノ状態ニシテ事業設備ノ先決問題トシテ左ノ要件ヲ行ヘリ

- 一、諸艦船ニ有スル圖誌測器等巨細ニ取調ヘ水路局ヘ一旦納付ノ儀布令相成度其上ニテ適當ニ之ヲ配布シ度旨本省ヘ上申ス
 - 二、造船局ノ會計貯藏ノ測器類ヲ悉皆水路局ヘ引渡方本省ヘ上申ス
 - 三、伊能忠敬實測ノ日本地圖全部ノ借用方ヲ文部省ヘ要求ス
 - 四、テオドライト一器ヲ英艦「シルビア」ヨリ借用シ翌月返付ス
 - 五、コロノメートル「貳器」ヲ造船局ヨリ受取ル
 - 六、富士山艦備付ノ海圖ヲ領收ス當時備付ノ外國版海圖ハ十五葉ニ過キ
- 測量傳習生五名(皆舊鹿兒島藩士)ヲ置ク柳少佐專ラ航海測量ノ術ヲ教授ス該

三名ハ何レモ卒業ニ至ラスシテ漸次他ニ轉ス内一名ハ隈崎佐七郎ト云ヒ後
チ海軍中佐ニ任シ病歿ス又一名ハ今ノ餅原中將ナリ
柳少佐春日紀行四卷ヲ著ハシ北海道各地ノ水路及風土事情ヲ述ヘ之ヲ奏上
セリ之ヲ水路記事ノ始トス當時北海道ハ到處二三ノ土人部落ヲ見ルノ外浩
漠亘寒無人ノ地ニシテ文書ノ徵スヘキナク道路ノ由ルヘキナキニ拘ハラヌ
此有益ノ記事ヲ得タリ即チ其水路ニ關スルモノハ北海道水路誌トシテ創業
ノ初刊ニ供セリ

十一月

英艦「シルビア」ニ兼テ依囑注文ノ英國製測量及製圖器械屬具トモニ到著ス之
ヲ檢スルニ何レモ精良ヲ極メ今日ニ至ルモ尙ホ必要ヲ保チツ、アリ其種類
左ノ如シ

- 一、經緯儀 テオドライト
- 一、經線儀 コロノメートル

大六吋 各壹器
小四吋 各壹器
參箇

- 一、天測六分儀 セキスタント

貳器及臺

- 一、水銀盤

壹箇

- 一、甲板時計 デツキウオフチ 「デント製

壹箇

- 一、錘測六分儀 サオンジグ、セキスタント

壹箇

- 一、三杆分度儀 ステーシヨンポイント

六吋 各壹箇
四吋 各壹箇

- 一、分度儀 プロトラクトル

壹箇

- 一、製圖器 コンパス、ボックス 繪具付

貳箇

- 一、振付「デバイダー」

六箇

- 一、木製「バラレル、ルール」

呎物六箇

- 一、製圖紙及映臨紙

若干

右定價總計洋銀二千三百六十五弗

兵部省內ニ保管ノ測量書及海圖悉皆水路局ノ請求ニ依リ引渡アリ○又兵學
校へ海圖、測量書、インメンヌ及ゼンヌノ航海術及英字書ノ類及必要ノ職員轉

燈臺ノ設置

用ヲ屢ハ要求シ其同意ヲ得タルヲ以テ大ニ便宜ヲ得タリ
九段招魂社(今ノ靖國神社)常夜燈ハ品海ニ對スル燈臺ノ目的トシテ建設セル
モノニシテ本月ニ至リ海上ヨリ試験看測スルノ擧アリシモ濛氣ノ爲メ果タ
サス

第一回局ノ
移轉

當局人員漸次増加シ諸事業室狹隘ナルヲ以テ築地、ホテル、買上ノ上經線儀室、
製圖室、推算室、傳習室等設置ノ儀ヲ上申シ其許可ヲ得タリ

曆曆ノ刊行

和洋比較曆ヲ編纂發行ス

外國船測量

此月英國測量艦ニ周防灘ヨリ以東ノ瀬戸内諸島及四國南東岸諸港豊後灘邊
姫島並ニ志摩國ノ海岸岬角等ノ測量ヲ許サレタル旨太政官達(第五七七號)ア
リ

外國ヨリ海
圖ノ寄贈

英國海軍省ヨリ公使アダムス氏ヲ經テ副島外務卿へ宛英海軍海圖(鳥羽及的
矢三葉ヲ寄贈シ來ル是レ客年「シルビア」ノ測量ニ係ルモノナリ

十二月

測量書ノ刊
行

柳海軍少佐ハ測量生及航海用ノ爲メ量地括要二冊ヲ著ス活字版ノ業未タ廣
ク開ケス舊來ノ木版ニ依リ之ヲ刊行ス是レ當時ニ於ケル最便ノ測量書トシ
テ珍重セララル

肝付中將ノ
出身

江田船太郎(今ノ肝付中將)兵部省十五等出仕申付ケラル

測量艦

春日ヲ測量艦ト定メラレ海軍少佐伊藤雋吉ヲ以テ其艦長ニ補ス

里程表調製
ノ發端

各港里程表ヲ調製ス會計局ヨリノ照會ニ依ル之ヲ里程表調製ノ始トス而シ
テ當時各廳海上ノ事ニ通セス海里公定ノモノナク從ウテ政府各廳ヨリ其調
査ヲ依囑シ來ルヤ引テ十數年ニ及ヘリ

觀艦式

去月軍艦天覽アリ柳中佐旗艦龍驤ニ陪乘ス今ノ觀艦式ニシテ當時之ヲ海軍
天覽ト稱ス本月ニ至リ右海軍天覽圖四枚ヲ調製シ軍務局へ送付ス

測器ノ試驗

英國ヨリ購入ノ測器試驗及生徒傳習ノ爲メ品川灣測量ノ儀上申許可アリ當
時經緯度ノ起點未タ定マラス依テ柳中佐ハ横濱ニ至リ英海軍病院ノ經緯度
測點ニ關シ出張取調ノ儀届出ツ

本局及海軍各部ノ測器修理ヲ辨スル爲メ鹿兒島縣人富森友藏ヲ傭入レ外ニ玉屋藤左衛門ニ命スルヲ例トセリ○富森ハ夙ニ長崎ニ於テ蘭人ニ就キ經線儀ニ關スル智識ノ修養ヲ受ケ元ト島津公ノ器械師トシテ測器構成修理ニ從事シタル者ニテ資性篤實職務ニ忠勤ナル一般技工ノ比ニ非ス是ヲ以テ水路局創業ニ當リ其功績ヲ舉クル少ナカラス勤續十數年ノ後尙ホ其子一作ヲ推薦シテ其職ヲ襲カシメ前後三十有五年ノ間測器修理調査上ニ大ナル便益ヲ與ヘタリ

本年末ノ職員及事業分掌ノ概況左ノ如シ

水路局現在員表

明治四年十二月調

奏任	中佐	一名	大尉	二名	九等出仕	一名	少尉	一名	十二等出仕	二名	十三等出仕	一名	十四等出仕	三名	十五等出仕	二名	等外	三名	出仕	二名	附屬	二名	小使	二名	計	二拾四名
判							中錄	一名																		
任																										
等外其他																										

外ニ測量練習生五名

參考

中佐

判任官姓名

柳 檜 悅

大尉	青木住眞	大尉	中村雄飛
九等出仕	五藤國幹	少尉	兒玉包孝
中錄	大山直路	十等出仕	大後秀勝
十等出仕	吉田重親	十二等出仕	狩野守貴
十二等出仕	錦部清謙	十三等出仕	狩野一記
十四等出仕	吉田銀藏	十四等出仕	平野久三郎
十四等出仕	大友鏞藏	十五等出仕	山崎錄之助
十五等出仕	江田船太郎(肝付)		

計十五名

職務分擔左ノ如シ

略之下以

- (一) 測量艦航海之節乗組勤務
- (二) 天測兼航海簿取調掛
- (三) 製圖編集掛
- (四) 製圖掛
- (五) 量地、驗潮、驗温、驗氣、測天「コロノメートル」兼日次時差推算掛
- (六) 器械修補兼火艇掛
- (七) 局中諸器械管轄
- (八) 諸艦機械地圖等請渡兼練習生掛
- (九) 局中製圖管轄
- (十) 銅板製圖掛
- (十一) 局中庶務掛

歲計豫算ナシ

五年度豫算ノ要求

(三) 測量大器預リ

(三) 日簿方

(四) 測天量地附屬並按針手兼務

(五) 測天量地附屬

括弧二以下ノ諸掛ノ内ニテ括弧一ノ職ヲ兼務スルモノ數名アリ

右ノ如ク分課スト雖當時測量出張者多ク且各人事ニ熟セス多クハ空文ニ屬ス

本年度ニ於ケル經費ハ未タ本局豫算ノ定メナク事ニ臨ミ細大ノ別ナク一々

本省ニ上申許可ヲ得テ實施シタル迄ニシテ其費目決算ノ如キ書類ノ徴スヘキモノナシ

本年末ニ於テ明治五年ニ要スル經費豫算ヲ調製シ俸給、測量費、製圖編集費、器械費、假局設立費、外國圖誌購買費ヲ合シテ五萬二千二百十八兩ヲ計上シ上申要求シタルモ其結果ハ詳カナラス(明治五年附錄第一號參照)

明治五年

正月

驗潮ノ發端

東京品川灣ニ於テ四十日間驗潮シ以テ其潮候時ヲ測定ス○當時驗潮ノ學未
タ開ケス小潮升ト小潮差トヲ混同セリ故ニ當時ハ現今ノ小潮升ヲ兩弦干滿
差ト稱シ其實質ハ大約現今ノ小潮差ニ似タルモノナリ

二月

海軍省設立

兵部省被廢陸軍省海軍省被置(太政官第六二號布告)

規則ヲ定ム

始メテ水路局規則ヲ定ム(附錄第二號參照)

第二回局ノ
移轉

水路局(俗ニ築地「ホテル」ト稱ス)類焼ス因テ假ニ芝山内松蓮社(今尙ホ存ス)ニ移
轉ス然レトモ家屋狹隘ニシテ各員殆ト群居セリ

事業擴張ノ
意見上申

柳局長ハ將來事業ノ施設ニ關シ左ノ事ヲ海軍省ニ上申セリ

- 一 水路誌實地調査編修ノ爲メ春日艦ニテ約五十日間全國周航ノコト
- 一 水路局定員制定ノコト

- 一 必要ノ地ニ航路標識設置ノコト
- 一 水路局ヲ適當ニ新築シ天文臺ヲ始メ諸製作所ヲ設クルコト
- 一 測量船ノ製造ヲ英國ニ注文スルコト
- 一 銅版器ヲ英國ニ注文シ且銅版術傳習ノ爲メ一員ヲ英國ニ出張セシ
ムルコト
- 一 測量士官取立ノコト
- 一 經線儀ヲ英國ニ注文シ當局ニ保管シ諸艦渡シノ準備ヲナスコト
- 一 測量船ノ士官及水火夫ノ舉動ハ水路局長ヲ經テ秘史局へ報告スル
コト
- 一 伊能勘解由ハ本朝測量ノ開祖其功業莫大ニ付其遺圖子孫ヨリ爲出
相當ノ賞典ヲ舉ケラレタキコト
- 一 經線儀ノ日差ヲ定ムル爲メ毎日天測施行ノコト
- 一 皇國海岸圖追々出版致度コト

- 一 平常測量船ヲ以テ二ヶ月宛士官ト生徒ト交代内國海岸測量ノコト
- 一 航海曆ハ諸艦年々入用ニ付英國ヨリ年々適當ノ部數購入シタキコト
- 一 觀象器械及書類英國ヘ注文シタキコト
- 一 測器圖書類ハ當局ヨリ諸艦ヘ相渡シタキコト
- 一 燈明臺浮標等ハ工部省ノ所管ヲ止メ水路局ニ於テ製作設置ノコトニ相成リタキコト

水路誌ノ欠

英版支那チヤイナ水路誌一モ備付ナキニ付諸艦及兵學校ヘ借用ヲ申込ミタルモ東

京丸ニ唯一部アリシノミ

測器ノ献納

足羽縣ヨリ「セキスタント」屬具共又「テオドライト」等六器ノ献納ヲ受ク

海圖彫刻者

海圖彫刻ノ爲メ京都府平民松田儀平ナル者ヲ採用ス松田ハ代々日本舊式ノ銅鑄ヲ業トシ儀平ハ其素養アリ且出藍ノ技ヲ有ス初メ固辭シタルモ京都府知事ノ懇諭ニ依リ其職ニ就ケリ是レ我海圖彫刻ノ創始者ニシテ其事業ノ困

難ニ耐ヘ幾多ノ苦辛研究ヲナシタルハ他ノ事業ニ讓ラス實ニ今日彫刻進歩ノ基礎ヲナシタルモノニシテ其功績ハ後人ノ宜シク牢記スヘキ所ナリ

三月

海軍省設立

二日元築地海軍所ニ海軍省ヲ置カル次テ勝安房ハ海軍大輔ニ川村純義ハ海軍少輔ニ任セラル而シテ卿ハ缺ク

附屬ヲ置ク

水路局ニ附屬ヲ置カル(海軍省第三五號達)附屬トハ總テ海軍職工ノ業務ヲ執ルモノニ付シタル名稱ナリ而シテ富森友藏ヲ八等附屬トシ諸器械ノ修理ヲ命ス當時修理用ノ器具ハ一モ官備ナク總テ本人ノ私品ヲ用フ

測量艦

春日艦ノ測量艦ヲ止メ第二丁卯艦ヲ以テ之ニ代フ

水路官ノ教育

水路局ニ測量生ヲ置カレ一等測量生ノ月俸ヲ七兩二分、二等測量生ノモノヲ六兩ト定メラル全時ニ測量生規則ヲ定ム(附錄第三號參照)

海圖蓄藏ノ發端

海圖蓄藏ノ目的ヲ以テ海軍大輔勝安房ニ請ヒ海軍倉庫ヲ調査シ數多ノ海圖ヲ得タリ此等ハ戊辰ノ役舊幕府脫艦ノ備ヘタルモノニシテ荷蘭圖及英國ナ

海里法ノ假
定

リ又全時ニ勝安房所藏ノ米版海圖及モーリー風圖ヲ請ヒ受ケ其他橫濱外商
ハルトリーヨリ購入シ或ハ艦船備付ノ現品ヲ借用シ之ヲ寫取シ僅ニ内國及
支那海岸ノ海圖ヲ蓄フルヲ得タリ之ヲ海圖保管ノ始トス
龍驤艦航海掛成松少佐ヨリ航海里法ハ皇國ニ於テ地球ノ一度二十八里有奇
ナルモ推算上無益ノ繁數タリ西洋ニテハ奇零ノ里法ハ用ヒス英米六十里荷
蘭十五里ナリ依テ我カ航海里法ハ三十里ト改定ノ意見ヲ提出シタル結果柳
局長ハ左ノ答辯ヲ與フ(附錄第四號參照)

- (一) 一海里ハ一度六十割ノモノヲ用フ即チ一里ハ我十六町九分七厘五毛
- (二) 尋ハ六呎ヲ以テ一尋ト定ム
但シ測量圖海底ノ淺深ハ干潮ノ時尋數ヲ以テ定ムルモノトス
- (三) 起經ノ本地ハ姑ラク英國綠威ヲ以テ初度トス
但シ我國ニ在テハ橫濱英國海軍病院ヲ以テ東經一百三十九度三十
九分二十四秒ト定ムルヲ確數トス

海里法ノ制
定

四月

我國海上里數區々一定セサルニ付柳局長上申ノ結果太政官甲第三百三十號ヲ
以テ附錄第四號ノ通り布告セラル

因ニ明治十五年飯倉觀象臺(今ノ天文臺)ノ綠威東經一三九度四四分五七秒
(今ハ三〇秒)北緯三五度三九分一七秒五海面上高七十呎ヲ原標ト改正シ明
治五年ノ布告改正ノ儀ヲ上申セシモ省セラレス

柳中佐本月海軍大佐ニ任セラル

水路局出仕柳田龍雪ノ出仕ヲ免シ銅鑄術修業ノ爲メ英國へ差遣ハサル然レ
トモ後チ水路局ニ出仕セスシテ罷ム

五月

今上陛下軍艦乘御京阪及山陽西海二道御巡幸ノ儀詔勅下ル二十三日御發艦
柳大佐水路官員ヲ率ヒ第二丁卯艦ヲ以テ水路嚮導ノ任ニ當ル當時沿海港灣
實測ヲ經タルモノ殆トアラサルヲ以テ過クル所辛苦慘憺淺灘水深ヲ測查シ

柳局長ノ昇
任
銅版術ノ研
究

水路嚮導

局用書籍

僅ニ安全ノ航海ヲ遂ケタリ當時肥後沿海ハ略測スラ經サルヲ以テ宇土塩屋波止ニ於テ天測ヲ施シ東經一三〇度三六分五二秒北緯三二度四二分五六秒ヲ得タリト云フ

ヨング著述航海字書、ゼンス著三角術其他天文書、地理書等常ニ兵學校ヨリ供給ヲ受ケ多大ノ便利ヲ得タリ

測量

五藤國幹等十四名ニ總州木更津ヲ測量セシム之ヲ東京灣測量ノ發端トス

六月

測量圖天覽

木更津測量成ル而シテ其淨圖ヲ天覽ニ供セリ

出版書ノ差

海軍創立以來各廳ニテ上梓ノ書籍二部宛本省へ差出サシム(本省達)

七月

測量

御巡幸ノ際第二丁卯艦ヲ鹿兒島灣ニ停メ薩隅内海ノ測量ノ任務ヲ執ラシム海軍大尉中村雄飛ヲ其艦長ニ補シ五藤國幹、吉田重親、兒玉包孝等(其他ノ人名ハ薩隅内海ト題スル原備圖ニ詳カナリ)ト共ニ測量ニ從事セシム十月測量成

測量日當

リ次テ山川港ヲ測了シ十一月歸京ス

測量日當支給方ヲ定メラル(乙第九十號達)

八月

基本經緯度及磁針偏差ノ測定

本局勤務海軍省九等出仕大伴兼行(後チ肝付ト改姓)ヲシテ水路假局ノ經緯度及磁針差ヲ測定セシム其結果左ノ如シ

一 北緯三五度三九分二四秒四六

東經一三九度四五分三七秒四

此測點ヨリ茅場町兩替屋心柱(今ノ第一銀行)ヲ正北四八度五六分一

〇秒東ニ望ム

一 磁針差三度五八分二〇秒

右洋紀一八七二年七月三十日ヨリ九月四日ニ至ル迄太陽フラネット曜星及恒星ヲ

測量シ以テ其確數ヲ定ム

右上申ノ結果本省ヨリ諸艦へ經緯度磁針差ノ根數トシテ之ヲ採用スヘキ旨

測器修理器
械ノ備付

寫圖ノ準備
供給

寫圖ノ供給

銅版製造ノ
困難

民有船舶ノ測
器修理

達セラル之ヲ磁針偏差測定ノ始トス

測器修理ハ附屬富森友藏へ命セシモ之ニ要スル器械ハ總テ私有品ニシテ局
内ト私宅トニアリシカ類燒ノ爲メ三百貳拾餘種ヲ失ヒタルニ由リ官費買入
ノ上官器ヲ使用スルコト、ナレリ

朝鮮及對馬附近ノ圖ヲ外務省ヨリ借用シテ之ヲ臨寫シ僅ニ該地方ノ略地圖
ヲ得タリ當時ハ準備供給共ニ大抵寫圖ヲ以テ臨時ノ供給ニ充ツ

臺灣香港邊ノ海圖艦船ヨリ要求アリシモ古圖一枚ノ外ナク至急寫圖ヲ製シ
之ニ充ツ

銅版調製ノ法備ハラス當時二分一以上ノ大版ヲ製スル能ハス山尾工部大輔
及横須賀造船所ニ調査ヲ依頼シタルモ何レモ其法ヲ知ラサル旨回答ニ接シ
其製作上ノ調査ニ苦辛ヲ極メタリ

民有船舶ノ測器修理ハ本省へ出願ノ上當局ヨリ商人ヲ選定シ其修理ヲ命ス
ルコト、ナレリ

外人金星經
過測量ノ請
願

海圖彫刻ノ
發端

製圖法ノ由
來

明治七年金星經過實測ニ付横濱長崎兩所ニ天文臺設置許可ノ儀ヲ米國政府
ヨリ我政府へ請願ニ付海軍省ヲ經テ當局へ意見ヲ下問セラル

編者案スルニ當時此ノ如キ天体實測ノ學術及方法ハ我國ニ於テ經驗セル
モノアルナク答申案ニ苦慮シタルノ觀アリ然レトモ幾モナク其天學研究
上非常ナル利益ト興味アルヘキヲ豫期スルヲ得ルニ至レリ(明治六年八月
全七年九月ノ部ヲ參照スヘシ)

釜石港ノ銅版彫刻成ル即チ海圖彫刻ノ發端ニシテ松田儀平ノ刻スル所ナリ
然レトモ其圖積ハ當時四分一版ニ出ツル能ハス且ツ其術未タ至ラス航海用
トシテ不完全ナリシハ已ムヲ得サル所ナリキ

編者曰フ此測量原稿ノ製圖ハ大後秀勝ノ擔任スル所ニシテ其製圖法ハ全
人カ英艦「シルビア」乘員大尉ベーリーニ就キ懇切ナル教授ヲ受ケタルニ由
ル爾來狩野家ノ後裔狩野守貴狩野應信等ヲ採用シタルモ皆多少大後ノ指
導ヲ受ケ其他ノ製圖員モ其指導ヲ受ケタリ

圖誌ノ外國
大注文

九月

海圖備付僅少ニシテ業務上ノ困難少ナカラス因テ英版海軍海圖一揃即チ二千四百貳拾七枚代價百六拾四磅拾參時令拾邊斯英版全水路誌九十九部代價貳拾壹磅五時令六邊斯ヲ英國へ注文ノ儀上申ノ末許可セラル(川村海軍少輔ノ歐洲視察ノ便ニ托ス)

外國ニ於ケル我測圖覆版ノ嚆矢

十月

海軍省ニ水路寮ヲ置キ二等寮トス(太政官第三〇五號布達)

水路寮ヲ置ク○文官組織

制	官											
	二等寮	官等	四等	五等	六等	七等	八等	九等	十等	十一等	十二等	十三等
水路寮	頭	權頭	助	權助	大屬	權大屬	中屬	權中屬	少屬	權少屬		

水路寮職掌ヲ定ム

編者案スルニ官制ハ文官組織ナルモ當時柳檜悅ハ海軍大佐ヲ以テ水路權頭ヲ兼任シ其他海軍尉官ハ官制以外ニ勤務スルモノ數名アリ
海軍條例ヲ定メラル(十一月二日ヨリ施行ノコト)

中略

第二、水路寮ハ海路測量、水路嚮導監督、燈臺浮標建築補持配置等ヲ司ル

水路頭ハ海軍卿ニ隸シ大少丞ニ議シ卿ノ命ヲ奉シ事務ヲ取扱フ

當時柳大佐ハ自ら測天量地、製圖編製、測量生教授ノ主任トナリ海軍大尉瀧山正門ヲ測量生教授兼取締トシ九等出仕五藤國幹(後チ海軍少佐)ヲ製圖編製掛、量地掛、兼測量生教授掛トシ海軍大尉青木住真(後チ海軍大佐)ヲ量地掛兼測量生教授掛トシ寮務ヲ執ル

編者曰フ當時事業ノ計畫遂行ヨリ庶務會計ノ事務ニ至ル迄一ニ柳權頭ノ直接指揮ニ出テサルナク其職務ニ熱誠ナル官衙ニアルト私邸ニアルトヲ問ハス全力ヲ官務ニ傾注セリト云フ以テ其精力ノ殊絶ナルヲ見ルヘシ

海圖ノ拂下

當局測量ニ成レル刊行海圖販賣人ニ相當代價ヲ以テ拂下ケ國內一般ニ配布スルコトヲ許可セラル

水路官ノ養成

編者曰フ海圖代價算出ニ關スル書類ナキヲ以テ代價ノ標準不明ナリ從前ノ測量生ヲ廢シ更ニ水路寮生徒二十名ヲ置キ兵學校生徒ノ例ニ倣ヒ規則ヲ定ム(上申許可ノ結果)規則ハ附録第五號ヲ見ヨ(生徒ノ人名ニ關シテハ十七年附録第七號ヲ見ヨ)

編者曰フ當時水路事業ニ素養アルモノナキコトハ事業遂行上劈頭ノ故障タリシカ爲メ當局者ハ水路官ノ教育ヲ緊急要務トシテ最モ之ニ苦辛シタルハ柳大佐自カラ測量教授ノ任ニ當リ英學ハ其教員ナキヨリシテ生徒志願者中稍ヤ其素養アル者黒野元生ヲ説諭シ英學教授ノ任ニ當タラシメタル等ヲ以テ之ヲ知ルヲ得ヘシ

十一月

横須賀横濱間電信線架設ニ付距離及其他ヲ測定スヘキ省命アリ工部省ノ所

陸上電信線路ノ測量

觀象臺設立地ノ購入

印刷器械ノ創製

海圖ノ刊成及供給

曆ノ編刊

管ニ屬スル事項ナルモ之ヲ當寮ニ命セシハ當時測量技術者ノ缺乏ナリシヲ知ルニ足ルヘシ

海軍觀象臺設立地トシテ芝區飯倉戸澤從五位邸ノ内及石井海軍少丞邸ノ内若干坪ヲ買入ル

海圖印刷器トシテ木製轆轤大小二箇ヲ作成ス

宮古、壽都、小樽ノ三港圖刊成ス○當時海圖ノ配付ハ本省ヨリ指定ノ部數ヲ本省ヘ回附シ本省ヨリ諸向ヘ配布セリ

十二月

晦望曆ヲ編纂刊行ス需用甚タ多シ毎年改版ヲ例トス(實物參照ヲ要ス)

太陰曆ヲ廢シ太陽曆ニ改メラレタル結果十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト定メラル

明治六年

一月

第三回ノ移轉

臺灣水路誌刊成

海圖ノ刊成

測量艦

圖器天覽

假居松蓮社ヨリ芝山内海軍屬舎九番十番ニ移轉ス

石川洋之助水路寮十等出仕被申付反譯編修及書籍調査ヲ命セラレ

臺灣水路誌刊成ス英版支那海水路誌ヨリ抄譯スル所タリ當時臺灣生蕃ノ琉

球船人殺害事件ヨリ國際問題ヲ惹起スルノ虞アルヲ以テ速ニ他日ノ準備ニ

應センカ爲メナリ

箱館及瑤瑤瑠水道ノ圖刊成ス

第一丁卯艦ヲ以テ測量艦トシ海軍大尉中村雄飛艦長ニ補セラレ又大阪丸ヲ

以テ測量艦トシ海軍大尉磯邊包義ヲ其艦長ニ補セラル但シ他日臺灣事件ノ

豫期ニ應スル爲メ琉球近海測量ノ便宜ニ供センカ爲メナリキ

東京灣木更津彩色測圖現用測器及英國ヨリ購入ノ鐵製定規圓形分度儀製圖

器械等ヲ兵學校御臨幸ニ際シ天覽ニ供フ

二月

琉球測量

琉球全島測量ノ命下ル重ナル從事人員左ノ如シ

大阪丸

柳 水路權頭

青木大尉測鐘

大伴中尉天測岸測

水路寮九等出仕高橋惟熙製圖 水路寮十等出仕石川洋之助事記

水路寮十五等出仕加藤重成測岸

第一丁卯艦

中村大尉測鐘

水路寮十等出仕兒玉包孝測鐘

其他 水路寮生徒補助

十二日品海拔錨下田港、神戸港、呼子港、鹿兒島港、山川港ヲ經テ南島各港ヲ測量シ七月十六日品海ニ歸著ス

編者曰フ此測量ハ當時開局以來ノ大計畫ニ屬スルモノニシテ其測量タルヤ單純ナル平面測量ナリシモ其測量セシ箇所ハ山川港、口之永良部港、一湊灣、名瀬港、大島海峽、運天港、那霸港、慶良間海峽、石垣泊地ナリトス當時船體ハ不完全諸供給ハ不備ヲ極メ且ツ屢ハ南西信風ニ苦シメラレタルニ拘ハ

ラス其大風期ニ先タチテ業ヲ了ヘタルハ其成功顯著ナリト謂フヘシ柳大佐ハ此行ニ關シ大伴(肝付)加藤二官カ確ニ他日ノ大器タル伎倆アルヲ認メ大ニ之ヲ獎勵シタリト云フ

測器ノ購入
港灣記事ノ
調査書蒐集

英國製甲板時計注文五箇到著ス内一ハ代價四拾貳磅餘ハ貳拾八磅七時令日本諸港灣調査書ヲ差廻スヘキ旨沿海府縣ヘ依頼ス

三月

私費生徒

私費水路寮生徒五名ヲ置クヲ許サル

定額金

本省ヨリ當分ノ内常費定額ヲ金二千圓ト定メラル但シ一口二十圓以上ハ必

支那海岸圖
ノ欠乏

ス本省ノ許可ヲ請フヘキコト又測量費旅費ノ如キハ臨時ノ請求ニ屬ス龍驤筑波二艦ヨリ同時ニ支那海岸圖ノ要求アリ寮備唯一通アルノミ依テ之ヲ各方ニ照會要求シタルモ得ル所ナク遂ニ本省ノ命ニヨリ本省ニ提出其處分ニ委セリ

寮務代理

海軍中佐相浦紀道水路寮出勤被仰付尋テ柳權頭出張中寮務代理被仰付

水路誌ノ刊
行

北海道水路誌刊成ス是レ柳春日艦長ノ春日紀行ヨリ拔萃スル所ニシテ我カ實驗水路記事ノ嚆矢ナリ

四月

測器

最良經線儀貳拾器供給準備ノ爲メ英國注文ノ事ヲ上申ス其價格壹箇約四拾磅定額以外ニ屬スルヲ以テ許可セラレス

觀象臺建築
調査
大形海圖初
刊及銅版製
作ノ成功

觀象臺建築ニ關スル書類ヲ在澳國中牟田少將ニ依頼ス下田港及東京海灣圖刊成ス是レ水路寮ニ於テ四分之一以上ノ大圖ヲ刻成スルノ始トス

編者曰フ海圖ノ製版ハ固ヨリ銅ヲ善トス而シテ其版質ノ硬軟能ク彫刻ノ度及凹形ノ持久ニ適セシメサル可カラス小版ハ能ク此旨ニ適セシメ得ルモ大版ニ至リテハ其銅ノ分子密度ニ平均ヲ得難ク動モスレハ罅裂ヲ生シ用ニ適シ難シ嘗テ横須賀造船所ニテ槌製セシモ其用ニ適セス外國工士ニ托スルモ事容易ニアラス頗ル難況ニ陥リシカ府下柳原町住民渡邊三次郎

ナルモノハ銅ノ製版ニ特技ヲ有スト聞キ試ミニ之ヲシテ縦一尺八寸横一尺七寸ノ銅板ヲ製セシメタルニ果然良品ヲ製出セリ即チ用ヒテ東京海灣圖ノ用ニ供セリ是ヨリ全人ハ更ニ研究ヲ重ネ遂ニ縦四尺五寸横三尺ノ大版ノ良品ヲ製スルニ至リ製版上ニ貢獻スル所アリ柳大佐ハ嘗テ之ヲ英國人ニ質シタルニ外國製版ハ總テ機械ニ依ルモ手工ノ良ナルニ如カスト云ヘリト

五月

測量

東京海灣中横須賀近海本牧及木更津ノ部分ヲ測量ス七月 測量成

六月

外國海圖ノ覆版

津輕海峽圖刊成ス但シ英圖ノ覆版ナリ

第四回ノ移轉

芝山内海軍屬舎七番八番ニ移轉ス水兵本部ヲ九番十番舎ニ置カレシカ爲メナリ

彫刻器械ノ備付ノ濫觴

銅版彫刻器械及屬具大小約二十五種ハ是迄附屬松田儀平ノ私有品ヲ用ヒ辨

シ來リシカ本月ニ至リ本人ヨリ買上ケ始メテ官物トナル○彫刻創始ヨリ其業ヲ執ルモノ唯松田一人ノミ故ニ勤務時間外私宅ニ於テモ絶エス其業ヲ執ラシメ之ニ對シ別ニ彫刻料ヲ給セリ蓋シ此ノ如クセスンハ該事業進行ノ遲緩ヲ避クルノ途ナカリシ爲メナリ

七月

古式ノ朝鮮圖ノ刊成

朝鮮全圖彫刻成ル但シ編者未詳ノ東洋古式ノ圖ヨリ編纂シタルモノニシテ殆ト海圖トシテ見ルヘキモノニアラス

暗礁測定報告水路告前ノ發端及水路智識ノ未開

此月十七日大阪丸琉球測量ノ一行柳大佐始メ歸京但シ第一丁卯艦長ハ紀州大島港神瀨(今ノ上瀨)ノ位置水深ヲ測定シ後歸京復命セリ
編者曰フ遠航ノ歸途此測量ニ從事セシハ當時東京ヨリ神戸ニ至ル水路ハ黒潮ヲ避クル爲メ大島ノ内部ヲ航スルヲ常トセリ然ルニ其港口航路ニ當リ明治五年九月汽船「ツル」號船長ホバートカ破浪礁アルヲ發見シ之ヲ神戸港長ニ報告シタル旨兵庫縣令ヨリ通知アリシ爲メ特ニ至急ノ測定告示ヲ

要シタルカ爲メナリ

右測定報告後水路寮海軍省太政官ノ間ニ於テ數回上申下問ノ末附圖ヲ添へ九月十四日ニ至リ漸ク海軍省布達ヲ以テ一般ニ告示シタリ此附圖ハ爾後各方ノ要求ニ依リ數回ニ約千部ヲ補刷回付セリ又外國公使ニ示ス爲メ之カ反譯文ヲ本省文書課ニテ調製セリ其文左ノ如シ

Notice to Mariners.

Here-by Japanese Government have to inform that on July 28th in 1873, we sent Nakamura Katayuki, Captain of His majesty's steamer *Teibōkan*, to the Harbour of Osima, Kii, in order that, the danger hither not marked in published chart, may be ascertained by him, which Captain Hubbard, commanding screw steamer *Teru* was unable to ascertain more distinctly the exact position or character of the danger that, a heavy sea was running, October 20th in 1872; and afterwards the Government was proceeded to bring the following fact.

The exact position of

Osima danger named "Kamize"

- 1.—Light house on the cape Kasinosaki bearing S. W. $\frac{1}{4}$ W. that distance is 1.85 miles.
- 2.—Katsno sima bearing W. N. W. $\frac{1}{2}$ W. that distance is 3.14 miles.
- 3.—East rock 4 fathoms below the surface of the sea, when in low water in spring.
- 4.—West rock 4 fathoms below the surface of the sea, when in low water in spring.
- 5.—The length and breadth of East and West rock united together, on S. N. is a half cable and on E. W. 1 cable.

It is desirous that the accompanying engraving will be added to the No. 356 chart of Osima, corrected and published in 1871, by British Hydrographic Department.

Hydrographic Office, Admiralty,

Tokai 8th August 1873.

此暗礁報告ヨリ告示發布迄殆ト二ヶ月ヲ費セリ之ヲ現今ノ一日ニシテ辨
スヘキ情况ヨリ推ストキハ當時水路智識ノ普及セサル一斑ヲ見テ其全豹
ヲ知ルヘシ

彫刻員ノ教
育

銅版彫刻員二名ヲ採用ス西川增之助 井田道壽此等ハ毫モ素養ナキモノニシテ特ニ松田

儀平ヲシテ其技術ヲ教育シ傍ラ補助セシム

水路告示

清國上海稅務司告示ノ燈臺設置ノ譯文ヲ海軍省ヨリ布達ス

八月

教授課長ノ
新補

海軍省七等出仕伴鐵太郎ヲ以テ生徒教授課長トス

海圖ノ刊成

本年我測量ノ琉球運天港圖彫刻成ル此測量出張ニ先タチ外務省ヨリ英版運天港
圖ヲ借受ケ謄寫携帶測量ノ參考ニ供シタリ

測量艦

大阪丸ノ測量艦ヲ繼續セシメ海軍大尉瀧山正門ヲ以テ其艦長ニ補シ第一丁
卯艦ノ測量任務ヲ解カル

彫刻者ノ增
員

打田新太郎ヲ附屬トシテ採用銅版彫刻事業ヲ補助セシム蓋シ伊太利人ニ就
キ學ヲ所アリシ者ニシテ後年石版開始ノ任ニ當リシモノナリ

海圖ノ欠乏
補充ノ困難

艦隊指揮官ヨリ屢ハ本省ニ支那朝鮮ノ海圖備付ノ要請アリシモ當時水路寮
備付ノモノ全部ヲ通シ僅ニ十種ニシテ一モ副本ヲ有セス僅ニ寫圖ヲ以テ其
要求ニ充ツ當時艦船ニハ定數ノ設ナク橫濱外商ハルトリー書店ノ外買店
アルナク其補充ノ困難ナル要求ノ不規則ナル當局ノ最モ苦辛セシ所ナリ
編者曰フ此部分ノ海圖ハ實ニ僅少ニシテ多クハ「ヒンドレー」商社出版ノ所
謂「ブリューチャー」ト用フ當時官版ト商社版トノ區別明カナラス却テ商社
版ノ便利ナルヲ見テ最モ精良ナルモノトシテ行ハレタリ

金星經過測
量ニ關スル
意見

米國政府ヨリ明治七年金星經過測量ニ付我國ニ於テ觀測所設置ノ要請アリ
之ニ關スル我外務文部兩省ノ意見ヲ太政官ヨリ海軍省ニ移シテ當寮意見ヲ
諮問アリ右事件ハ測量研究上稀有ノ現象ニ付米國政府ノ需ニ應シ且ツ其際
當寮員三名ヲ選拔シ隨從研究ヲ命セラレタキ旨上答ス後チ海軍中尉大伴兼
行十五等出仕磯野健生徒關文炳選拔セラル其詳細ハ明治七年九月ノ部及金
星試驗顛末録ニアリ

燈臺建築及
告示ニ關ス
ル上申

海軍條例ニ於テ水路寮所掌ナル明示アルニ拘ハラヌ燈臺建築及告示ハ工部
省ニ於テ遂行相成リ居ルヲ以テ自今ハ同省ヨリ其著手及公示ハ前以テ詳細
通知アル様致度旨上申ス

艦船測量

春日艦臺灣近海測量ノ爲メ派遣ノ命アリ

九月

艦船測量

海軍大尉青木住真ヲ以テ測量課長トス尋テ臺灣近海測量ノ爲メ春日艦乗組
ヲ命セラル

水路告示ニ
關スル意見

本邦沿海ノ危険及沈船發見等ヲ外國人ニ於テ告示スルモノアリ右等ハ當寮
ニ於テ事實測查ノ上必要ノ件ハ當寮ニ於テ告知致度ニ付關係府縣ヨリ前件
ハ勿論航海ノ目標トナルヘキ事物ノ變化トモ見當リ次第畧圖相添ヘ届出ツ
ル様致度儀ヲ上申ス

製圖課長

九等出仕大後秀勝ヲ以テ製圖課長心得トス

艦船測量

日進艦北海道測量ノ爲メ派遣ニ付測量官トシテ海軍大尉五藤國幹海軍少尉

海圖刊成

吉田重親ニ其乗組ヲ命セラル

磯港ノ圖刊成ス但シ舊幕府海軍ノ畧測ヨリ取ル

十月

測器

最良千里鏡四器(壹器約二百弗)ヲ英國ニ注文ス

海圖ノ購入
及納付

横濱外人書籍商ハルトリーヨリ海圖數百枚ヲ購入シ及第一丁卯艦ヨリ函館
海戰ノ分捕品ナル英蘭二國版ノ海圖七十七枚ヲ納付ス

測器

兵學寮ヨリ蘭國ヘ注文セル「ユニベルサル」インストリユメント「壹基」代價

航海曆ノ主
管

千六百五十一圓ヲ上申ノ末當寮備品ニ轉換セラル

航海曆ノ配備主管ノ設ナカリシヲ以テ艦船ヨリ其要求各方ニ涉リ相互ノ困
難少ナカラス因テ本月ヨリ航海曆ノ配備ハ水路寮ノ主管ニ定メラル

日清氣象警
報交換ニ關
スル上申

上海總稅務司ヨリ南清本邦間天氣電報交換約束致度旨請願シ來ル此事タル
艦船航海上海氣象ニ關シ至大ノ便益アルヘキニ依リ同意ヲ表シ實行シタ
キ旨上申ス然レトモ省セラレス

備 觀象臺ノ設

書籍ノ整理

海圖配備ノ
困難

觀象臺ニ於テ經線儀室ヲ煉瓦造ニシ且ツ連日觀測施行ニ付天測石臺及假臺
 建築ノ事ヲ上申ス蓋シ觀測練習ト來年金星經過ノ測量ニ適セシメンカ爲メ
 ナリ當時地所ハ五拾坪餘ニシテ間口三間未滿ノ長方形ニ過キサリキ而シテ
 觀測器ハ六分儀ヲ用ヒ尋テ「ユニベルサル、インストリユメント」ヲ用ヒ測
 候器ハ晴雨計寒暖計ノ二器アルノミニテ原基ノ備付ナシ當時天測ノ事ハ海
 軍中尉大伴兼行專ラ之ニ任シタリ
 寮内書籍公私混淆ニ付其出納保管ヲ明カニスル爲メ書籍掛ヲ置キ十等出仕
 石川洋之助ヲシテ之ヲ整理セシム
 艦船ヨリ海圖ヲ要求スルニ番號圖名ヲ記セス單ニ支那朝鮮ナル總名ヲ以テ
 スルヨリ取扱ニ無用ノ往復ヲ重ネ又當時實際購買スヘキ圖ノ正確ナル販賣
 店ナク從フテ目錄調製配付ノ事ヲ實行スルニ由ナキヲ以テ要求者^五水路寮
 へ出頭實物指定ノ上要求スルコトニ上申ノ上實行セリ
 十一月

生徒長

測量

水路誌ノ刊
成

經緯度表ノ
刊成

海圖ノ刊行

經緯度ノ起
點

圖書測器ノ
購買

生徒長磯野健水路寮十五等出仕ニ拔擢セラレ生徒高野瀨廉ヲ生徒長トス
 横濱港ヲ測量ス其出測人員ハ柳大佐相浦中佐外四名ナリ
 南島水路誌四卷刊成ス柳大佐石川洋之助ノ合述スル所ニシテ其資料ハ本年
 二月ヨリ七月ニ涉ル南西諸島測量實驗記ヨリ成ル但シ第三卷大島群島ノ部
 ハ欽ク
 大日本沿海經緯度羅針差潮候時干満差立表成ル柳大佐ノ專ラ調査スル所ニ
 係ル
 八重山全島ノ圖刊成ス
 政府刊行ノ太陽曆ハ東京皇城ノ經緯度ヲ初度ト定ムル旨文部省ヨリ照復ス
 川村海軍少輔歐洲ヨリ歸朝ニ付兼テ購買ヲ委任セル圖書測器左記ノ通り之
 ヲ領受セリ

一、支那日本合圖

二十八枚

一、世界圖

二枚

一、アジャ洲	七枚
一、日本北部圖	二十八枚
一、支那(支那海岸圖ナリ)	二十八枚
一、日本南部圖	二十八枚
一、諸海圖	百九十五枚
一、コロノメートル箱共	九
一、コロノメートル附屬品箱	一
一、クイツキバルムメートル	二十
一、パテントログ	二十
一、アチロイデバルムメートル	二十
一、セキスタント	二十
一、ホリソン	二十
一、航海曆千八百七十三年	五冊

天文書ノ注
文

一、全	千八百七十四年	十冊
一、全	千八百七十五年	十冊
一、全	千八百七十六年	十冊
一、シグナルブック		一冊
一、インメンヌ全部		一冊
一、インシアンヲセアン		一冊
一、チャイナシージレクトリー		一冊
一、パイロット		百三十二冊

編者曰フ此圖中支那海岸(自香港至上海)圖ハ商社出版ナルモ當時唯一ノ支那部ノ海岸圖トシテ艦船ノ貴重スル所ニシテ嘗テ本宿少尉カ日進艦乗組中上海ニ於テ得タル「ヒンドレー」社出版ノ支那海岸圖經緯度ヲ斜ニ盛リタルモノハ又別種ノ良圖トシテ特ニ日進艦ニ備付ケ他ニ流用スルヲ許サ、リキ

米人オルモント、ストンヨリ川村少輔へ提出ノ天文書其他ノ目錄調査ノ結果

明治六年

緊急ノモノ速ニ購入方注文許可ヲ本省ニ請ヒタリ其書名等左ノ如シ

- 一、「クレルレス」ノ乗算表
 - 一、「クアース」ノ五位對數
 - 一、「ラップルナルス」ノ四位對數
 - 一、「アルヒス」七位對數
 - 一、「ブルニクル」六位對數
 - 一、「ゼチヨウ」ノ加減對數
 - 一、星學報知論
 - 一、米利堅正午行星位置表示
 - 一、「ベルリン」年代記
 - 一、「フルンノウス」星學書
 - 一、「チャンベチット」天文書
 - 一、「サイッチヘス」ノ星學書
- 半「ドウヅン」
全斷
貳冊
全斷
全斷

右書籍緊要欽ク可カラサルモノナリ此ニ附屬ノ書左ノ如シ

- 一、「クアース」ノ理論
- 一、英佛星學行星位置示表字典大全
- 一、「ストルブス、ダブラエ、リエンチテチユム」
- 一、「ラルヘルス」ノ「ダブラエ、レヂユクシヨニユム」
- 一、「ダブラエ、レヂヲモンタン」
- 一、「レテルス」ノ普通一般表
- 一、「ブレミケルス」ノ比例表
- 一、米利堅正午行星位置示表恒星表
- 一、「ベッセルス」基本星學書
- 一、「エンケス」ノ論說
- 一、「ハウセンス」ノ出版書
- 一、「ラプレーシス」ノ天文器械書

一、「ラグランヂス」器械解剖書

各箇觀象臺ノ出版書左ノ如シ

一、「ワシントン」天文測量書

一、「ヨウルヅ」ノ米利堅平民學校ノ「ダケレツトインニウホイス」

一、「ピンナ」天文測量書

一、「グレインイッチ」出版書

一、「巴黎斯觀象臺」出版書

一、「フェトレウコ」クロームブリッヂ「ラシデ」ハムステート「リアッチ」ノ著書

一、「メドレルス」ノ恒星化法

一、「タイロルス」ノ測量表

一、「ジャヲブス」ノ全斷

一、「ルムケル」ノ表

一、「アルマー」ノ表

一、「ラドクリッフ」ノ表

一、「アイレース」ノ「グレインイッチ」表

一、「ヘンデルソン」ノ「エデンフルク」天文書

一、「インクス」ノ全斷

一、「カムブリッヂ」全斷

一、「ボン」ノ天文書

一、「ブレツセルス」全斷

一、「ポウルコバ」ノ全斷

一、「ストルブス」ノ微物測量書

一、「ストルブス」ノ位置表

一、「フランタモール、ゼチバ」ノ天文書

一、「ベルリン」ノ天文書

一、「アルゲランテルス」ノ表

- 一、「ラッドクリツフ」ノ天文書
- 一、喜望峰天文書
- 一、「モーンヒールスハウセン」等ノ表
- 一、星學社友出版書
- 一、星學社中出版書
- 一、英蘭ノ星學社中出版書
- 一、佛國學校出版書
- 一、「ペーテルスブルグ」學校出版書
- 一、「ベルリン」學校全斷
- 一、「レイプヂツツ」全斷
- 一、「ビンナレ」全斷
- 一、「ラン克蘭ヂス」動作書
- 一、「クナース」全斷

- 一、「ハベルス」全斷
- 一、「ベルトランズ」算術書
- 一、「コウチース」動作書
- 一、「フレシユエルス」ノ全斷
- 一、「クレルレ」日記表及算術書
- 一、「ヲツポルヂール」ノ書簡
- 一、「ワットリン」ノ星學理論
- 一、「クリンケルフェイス」ノ全斷
- 一、「ブルリチン」ノ星學窮理並算法書
- 一、算術年代記

右書目ノ中大數冊ハ請求ニ從ヒ贈物トシテ献納申候也

右書名佛獨ノ如キ詳カニ譯字ヲ下ス能ハサル者ハ假字ヲ以テ原字ヲ書ス博雅君子ノ訂正ヲ待
ツノミ(原文)

編者曰フ當時書籍缺乏ノ際此等ノ書籍ヲ要スルノ急ナル大旱ノ雲霓モ雷

ナラサリキ

十二月

谷元氏ノ出仕

海軍省七等出仕谷元道之當寮ニ出仕ヲ命セラレ測量課ニ從事ス

編者曰フ谷元氏ハ川村少輔ト同伴歐洲ヨリ歸朝直チニ當寮ニ勤務ヲ命セラレ同氏意見トシテ測量ニ素養アル英人ヲ採用シ寮務ノ要部ニ置キ大ニ寮務ノ發達ヲ圖ラントノ議ヲ起シ柳大佐ハ水路事業ハ本邦人ニ於テ十分ニ發達セシムヘキ自信定見アルヲ以テ外人雇用ニ因リ却テ複雑ノ關係ヲ生スルハ事ニ害アリトシ固ク執テ聽カス議遂ニ止ム尋テ谷元氏ハ會計官ニ轉セリ

生徒轉校ノ議

水路寮生徒ハ非役少尉補ト共ニ此際兵學寮生徒ニ合併スヘキ旨海軍省ヨリ兵學寮ヘ達セラレ其趣當寮ヘ傳達アリ然レトモ此事實行セラレスシテ止ム願フニ兵學寮ノ設置アル以上ハ特ニ水路寮ニ生徒ヲ置クノ必要ナシトノ議論海軍部内ノ或一部ニ行ハレタルニ由ルナラン

明治六年總況

總況

明治六年寮務ノ大体ハ一月ヨリ南島測量ノ準備ニ忙ハシク二月ヨリ七月マテハ柳大佐ハ殆ト要部ノ人員ヲ率ヒ測量ニ從事シ其間相浦中佐寮務ヲ代理シ又其他ニ於テハ就中測量船ノ管轄及生徒教育事務各課適才ノ採用ヨリ各艦船各廳ニ關スル圖書測器ノ調製購買配備觀象臺設置ニ關スル計畫ニ至ル迄何レモ創設ノ時代ニシテ基礎標準容易ニ定マラス且ツ其事務事業ノ性質トシテ一般ニ其智識ニ缺クル所多ク從ウテ關係各部互ニ其事情ニ通セス屢ハ扞格牴牾スル所多ク而シテ其計畫施設解決疏通ノ事一ニ柳大佐ノ頭腦ニ依ラサルモノナカリキ然レトモ艦船トノ關係ニ於テハ相浦中佐ノ之ヲ助ケタルコト亦少ナシトセス

本年末現在ノ局版海圖及書誌ノ全部左ノ如シ

番 號	圖 名	番 號	圖 名
一 號	釜石港	八 號	瑯瑤瑁

明治六年

三號	宮古港	九號	品川
四號	壽都港	十八號	運天港
二號	野付	十一號	礪港
五號	小樽港	十七號	八重山全島
	東京海灣	二十號	根室
(以上我測)			
十號	津輕海峽	六號	箱館港
七號	下田港		朝鮮地圖
(以上覆版)			

書誌ハ量地括要、臺灣水路誌、北海道水路誌、南島水路誌、日本全國經緯度羅針
 差潮候時全表ノ五種
 而シテ水路誌ノ印刷ハ總テ日就社ニ命シタリ

從明治五年十月至同六年十二月經費調表

費目	年度	
	五年 自十月 至十二月	六年 自一月 至十二月
文武官員其他諸給料	三、三二二、三五〇九	一五、二〇九、五八六
測器其他諸器械	九三、七七七	五七一、二五〇
書籍費	一〇一、〇九一	七九、一九五
測量費	二九〇、五六〇	一、七二二、六〇〇
觀象臺費		五三三、九三三
生徒費		一、五九五、〇七八
諸雜費	二六、八三三	八七三、四六八
計	三、八三五、七七〇	二〇、五八五、一一〇

備考 費目測量費ニハ琉球全島測量費ヲ含マス
 編者曰フ明治三、四年ハ帳簿文書不備歲計ノ徵スヘキモノナシ本年ハ不完

全ナカラ豫算的文書ニ依ルヲ得タルモ固ヨリ其梗概ヲ示スニ過キス

明治七年

一月

測量艦乗組
加俸

意見上申ノ結果測量艦乗組加俸左ノ如ク定メラル

- 一、測量艦出張中其士官等測量ニ關係不致者ハ艦隊同様ノ加俸被下常碇泊所ハ加俸不被下候事但シ艦長ハ常碇泊所ト雖加俸被下候事
 - 一、艦長並ニ士官測量ニ關係スルトキノミ其日數ニ應シ測量加俸被下候事
 - 一、當寮士官測量出張ハ定則ノ通り
 - 一、總テ測量艦へ乗組候士官常碇泊所ハ加俸不被下候事
- 編者案スルニ測量艦ニ測量ノ爲メ乗組ヲ命セラレタル測量士官ト乗組定員士官トノ給與上ノ權衡定マラサル爲メ測量事業上少ナカラサル不

海圖天覽

便ヲ醸シタル結果ナラン

九日海軍始ニ付兵學寮ニ於テ新測製圖ヲ天覽ニ供ス

測器海圖費

編者曰フ當時ハ毎年新年式ノ御例トシテ九日ヲ以テ海軍始ノ式アリ

水路書誌

艦船へ供給ノ測器海圖ハ豫算定額外ニ於テ取計フヘキコトニ定メラル

客年川村海軍少輔歐洲行ノ際購入方委托ノ書籍客年十一月受領以外殘餘ノ分今般松村海軍中佐歸朝ノ際携帶兵學寮ニ於テ同中佐ヨリ之ヲ領受セリ其書籍種類左ノ如シ

- 一、ゼ、アドミラルチー、リスト、オフ、ライツ、 貳拾冊
- 一、デンハムス、メルセー、エンド、チビガーシヨン、 壹部
- 一、コロンビヤ、チビガートル卷ノ三 壹冊
- 一、チビガーシヨン、 壹部
- 一、メジテルニアン、シー、 壹部
- 一、パイロット、ラフ、インコルリー、イン、ツ、ゼ、コンチキシヨン、 壹部
- 一、パロンメートルマニウアル 壹部

一、	コースト、ヲフ、ヒスリー、バロンメートル、マニウアル	壹
一、	ノース、エンド、ソース、バシ、 <small>ウ井ンドウ、エンツ、キウーレンツ</small>	壹
一、	アドミラルチー、カタロギウー、ヲフ、チャーツ、プラン、ツヒウス	壹
一、	タイド、テーブル、ホール、ゼ、ブリチス、エンド、アイリス、パイロット	壹
一、	ラウ、ヲフ、エンダランド	壹
一、	サンス、トルウ、ベヤリング、ラール、アジムス、テーブル	壹
一、	レマークス、ヲフ、バツヒンベ	壹
一、	ハイドログラヒック、ノーチス、ニウハウンドランド	壹
一、	アフリカン、パイロット卷ノ二	壹
一、	ニウゼルランド、パイロット	壹
一、	ゼ、アドリヤチック、パイロット	壹
一、	ウエストインジャ、パイロット卷ノ一	壹
一、	ウエストインジャ、パイロット卷ノ二	壹

一、	アフリカン、パイロット卷ノ一	壹
一、	ノース、パイロット卷ノ二	壹
一、	プレツクシー、パイロット	壹
一、	バンコーベルアイランド、パイロット	壹
一、	ペルシヤンガーフ、パイロット	壹
一、	ゼ、ダニス、パイロット	壹
一、	ガーフ、ヲフ、アデン、パイロット	壹
一、	チャンチルアイランズ、パイロット	壹
一、	ソースアメリカン、パイロット卷ノ一	壹
一、	ウエストコースト、ヲフ、ヒンドスタン、パイロット	壹
一、	ゼ、ノルウェー、パイロット卷ノ一	壹
一、	ノースシー、パイロット卷ノ一、同二、同四	三
一、	チャンネル、パイロット卷ノ二	壹

一、東印度多島海支那並日本操帆指南	壹
一、東印度洋操帆指南	壹
一、北大東洋操帆指南	壹
一、北大西洋操帆指南	壹
一、南大東洋操帆指南	壹
一、地中海操帆指南	貳
一、ヲーストラリア操帆指南	三
一、ノバスコシア南東岸並ホンデー灣操帆指南	壹
一、スコットランド西岸卷ノ二	壹
一、コースト、ヲフ、アイルランド卷一、同二	貳
一、カンジア或ハクレート	壹
一、不列斯土兒海峽	壹
一、マーガレイン小峽	壹

一、エングランド西岸	壹
一、操帆指南	貳
一、支那海卷ノ一及二	壹
一、支那海 六卷ノ内一	壹
一、新認得土蘭並ローレンス川	壹
一、バルチックシー	壹
一、デルデニース並マルモラ海	壹
一、インメンス航海書	壹
一、ゼーンス航海書	壹
一、羅鍼鐵差篇 千八百六十九年	六
一、航海圖並器械目錄	壹
一、全世界燈臺記錄	壹
一、英國艦船諸士官必携書	壹

一、フォーストラリヤ東北方見取本

壹冊

一、海圖並觀象圖

壹冊

一、大西洋奇氣現象記錄

壹冊

一、四季天氣錄奇氣局ノ甲

三冊

一、エンサイクロヘジャ

壹部拾冊

全數百拾冊

編者曰フ右ノ書籍ハ開局以來始メテ見ル所ニシテ大畧當時世界ニ涉ル英水路部出版ノ水路誌燈臺表其他航海ニ關スル書類ヲ備フルヲ得タリ是ニ由リ水路記事上智識開發ヲ促シタルモノ實ニ少ナカラス

印刷肉

銅版印刷肉ノ缺點多キカ爲メ其良法研究ノ爲メ舊津藩紙幣印刷肉製法ヲ參考トシテ徵用セリ

燈臺表

燈臺表ハ工部省燈臺寮編纂刊行ノモノヲ艦船供給品ト定メラル

海圖刊成

山川港ノ圖刊成ス

二月

生徒轉校ヲ止ム

當寮生徒兵學寮生徒へ合併ノ儀實行相成ニ付同寮ニ於テ入學試驗ノ施行ヲ了ヘタルモ後チニ本省ニ於テ詮議ノ結果合併ノ議ヲ撤シ従前ノ儘据置カル、旨達セララル

海圖刊成

石垣港及慶良間海峽ノ圖刊成ス

測量

日進艦北海道航海ノ際五藤海軍大尉函館真砂町海軍用地八千五百一坪ヲ測定ス

第一回本局新築豫算

水路寮新築ノ計畫ヲ營繕課ニ協議ス其建坪約三十二坪ニシテ煉瓦造費用四千百八十七圓ト豫算ス然レトモ行ハレス

彫刻

附屬打田新太郎自費ヲ以テ米國へ銅版術修業ノ儀願出タルヲ以テ附屬ヲ免シ其願ヲ許可ス

海圖ノ急製刊行

臺灣生蕃事件ノ結果征討ノ已ム可カラサルヲ知リ其準備ノ爲メ多口、嘈哦、國姓、淡水其他南清各港圖ノ英版原圖アルモノハ其官版ト商社版トヲ問ハス日

明治七年

製圖課長

教授課長

測器

外國博覽會

ニ繼クニ夜ヲ以テシ再製急刊シタリ爲メニ其畧製タルヲ免カレサリキ
水路權助伴鐵太郎ヲ製圖課長トス
海軍大尉中村雄飛ヲ以テ教授課長トス
英國へ注文ノ「アストロノミカル、コロック」蘭國へ注文ノ觀星合儀到着ス
來ル明治九年米國ヒラデルヒヤ府萬國博覽會出品ノ條件ヲ本省ヨリ達セラ
ル

三月

海圖刊成

艦船測器定
數表ノ新定

楠溪クシントン（コルサコフ）薩隅内海、口ノ永良部、一湊ノ諸港圖刊成ス
艦船備付測器ハ是迄定數ノ設ナク需要供給共ニ其必要起ル毎ニ艦船本省、水
路寮ノ間ニ於テ意見ヲ異ニシ或ハ備品補充ノ途ヲ缺キ其不便少ナカラサル
ヲ以テ兵學寮御雇英國海軍少佐ドーグラスニ就テ英國海軍ノ備品定數ヲ調
査シ之ヲ我國ノ現狀ニ照ラシテ其定數表ヲ考定シ自今ハ之ヲ標準トシテ配
備スルヲ適當トスル旨上請シ本省ハ裁可ノ上其趣ヲ艦隊ニ達セラル其艦船

技術官加俸
ノ新設

印刷及彫刻
器械ノ注文
測天器室ノ
新築

海圖ノ刊成
及寫圖

備品定數表ハ附録第一號ノ如シ
當寮製圖彫刻技術官ハ技術上達功績ヲ舉クルモノアルモ高等官ニ登用ノ途
ナク獎勵上不都合少ナカラサルニ付主艦寮技術官加俸ノ例ニ倣ヒ水路寮技
術官加俸表新定相成度旨上申ノ末海軍卿ヨリ太政大臣ニ稟請裁可セラル該
加俸表ハ附録第二號ノ如シ
印刷器械及彫刻器械ヲ英國ニ注文ス
觀象臺据付「ユニベルサル、インストリユイメント」及「アストロノミカル、コ
ロック」室ヲ新築ス

四月

那霸港、臺灣全島、臺灣南部、臺灣清國屬地部及車城錨地ノ圖刊成ス
編者曰フ臺灣ニ關スル諸圖ハ臺灣事件ニ付明治六年海軍省八等出仕兒玉
利國（後チ海軍少將）竊ニ清國ニ渡リ臺灣ノ事情ヲ探リタル際ニ得タル各種
ノ清國製地圖ニ就キ英版圖等ヲ參酌シ急遽調製スル所ニ係ル而シテ此等

大銅板ノ調製

ノ調製ニ關シテハ大後石川專ラ之ニ任シタリ
又一月ヨリ本月ニ至ル迄ハ臺灣生蕃征討事件ニ付寫圖ヲ以テ臨時ノ急ヲ
充タセシモノ數十葉ノ多キニ及ヘリ
豎五尺六寸横二尺五寸ノ大形銅板壹枚ヲ代價百圓ニテ購入ス即チ渡邊三次
郎ノ製スル所ナリ

因ニ記ス現今使用ノ銅板ノ調製人吉田某ハ即チ渡邊三次郎ノ高弟タリシ
モノナリト云フ

水路記事材
料提出方

日本支那太平洋海上記事編集ニ付諸省所管ノ船舶及商船ニ毎年六月十二月
ノ兩度ニ於テ海上氣象及針路等ノ報告ヲ當寮ニ提出方上申ノ結果太政官達
第五十七號ヲ以テ一般ニ布達セラル

測量

臺灣測量ノ爲メ青木大尉ニ日進乗組ヲ命シ出張先ニ於テ社叢丸ニ轉乘ス蓋
シ本月ニ至リ臺灣生蕃征討ノ事起リシ爲メナリ

編者曰フ當時測量ト稱スルモ上陸地點又ハ投錨等ノ實地計畫調査ヲ成セ

外國船測量

外國船ノ視
察

測量

五月

ルノミニシテ別ニ測圖調製ノ事アラサリキ

米國船「トスカロー」號ニ御國南東岸ノ測量ヲ許可セラル(太政官第六十三號達)
米國船「トスカロー」號ハ太平洋ノ深海鍾測ヲ爲シ我國ニ渡航シタルヲ以テ相
浦中佐(肝付)中尉ヲシテ該船ニ就キ參考ノ爲メ測量器其他ノ模様ヲ視察
セシメ尋テ實測ノ寮版海圖十六葉ヲ該船ニ贈與セリ

鳳翔艦ト測量艦大阪丸トヲ以テ北海道及津輕海峽海底電信布設ニ要スル水
深及發着地點ヲ測量ノ舉アリ此事電信局ノ依頼ニ由リ柳大佐主トシテ之ニ
任ス其測量著手ニ及ヒ潮流急激鍾測器ノ不完全ナルヲ發見シタル趣キナル
ヲ以テ本寮ハ横濱ノ商館ニ命シ米船「トスカロー」號ノ深海鍾測器ヲ急遽模造
セシメ且ツ全船ヨリ教示ノ使用法記述ノ上共ニ送付シ之カ使用ニ充テタリ
當時千代田艦及電信局屬船電信丸モ或ル地點ノ助測ヲナセリ抑モ此深海測
ハ未タ一ノ經驗アラサリシモ柳大佐ノ自信能ク其任ヲ全クセリ即チ其測量

成績左ノ如シ

一、電線沈架圖

一、三廐灣

一、佐井灣目測圖

一、福島灣

一、當分至矢越埦畧圖

一、三廐經緯度磁針差高潮時溫度記事

一、電線沈架線水深圖

一、全上底質表

編者曰フ磯部大尉ノ談ニ依レハ當時羅針自差ノ測定法ヲ知ルモノナク柳大佐ノ測定ヲ見テ始メテ之ヲ解シ其示教ニ由リ大ニ他日ノ利益ヲ得タリト

大阪丸及鳳翔艦ハ眞木海軍少將ノ指揮ニ屬シ吉田中尉及生徒若干名ヲ便乗セシメ電線沈架測量前後北海道各港擇捉諸港ヲ走測シ尙ホ樺太南部ヲ試航セリ

大吠沖疑礁ノ調査

大吠埼ノ北東約八十湮ニアル疑礁ニ關スル取調ヲ新治縣令ニ照會ス
六月

銅版彫刻者ノ教育

銅版彫刻ハ海圖製作上最モ緊要ナルニ人員寡少ニシテ民間ヨリ補充ノ途ナク新タニ適材ヲ教育スルノ外ナキヲ以テ三月通學生十名ヲ置キ度旨本省へ上申シ五月ニ至リ銅版手傳ノ名義ニテ十名雇用ノ儀再度上申ノ結果許可セラル乃チ銅版手傳約束ト稱スル規則ニ據リ本月ヨリ之ヲ實行ス該約束書ハ附録第三號ノ如シ

編者曰フ該手傳ハ實際所謂徒弟ニシテ専ラ松田儀平及井田道壽ノ教育スル所其存シテ今日ニ至ルモノ荒川邦政(出身年齡十八年二ヶ月)片江又八(全十六年)只木信雅(全十五年)岩本武知(全十五年一ヶ月)濱田盛次(全十四年五ヶ月)ノ五名ノミ蓋シ此施設ニ關シテハ柳大佐ノ最モ苦辛セシ所ニシテ今日彫刻術ノ發達ハ此ノ人材教育ニ根源スルモノナルヲ忘ル可カラス

大阪人某英版日本航海全圖ヲ反譯刊行センコトヲ請願ス之ヲ許サス
厚岸港ノ圖刊成シ又琉球群島英海軍海圖ノ覆版不臘達礁脈及銅山港此二圖ハ高ノ覆版ノ圖刊成ス

海圖刊行ノ請願
海圖ノ刊成及覆版

日進艦乗組海軍少尉本宿宅命ヨリ臺灣南部各港灣錨地ニ關シ實驗上水路誌
ノ追補トナルヘキ有益ノ記事報告アリ之ヲ艦船乗組士官ヨリ受ケタル水路
記事ノ嚆矢トス○同時日進艦乗組員海軍中尉岡部政實南清沿岸航海ノ際ニ
實驗セル水路記事アリ共ニ有數ノ記事ニシテ當時ハ勿論年久シク支那方面
ノ航海ニ益ヲ與ヘタルモノナリ

七月

英國軍艦「シルビア」ニ御國南東海岸測量紀勢海岸ナリヲ許ス(太政官第八十五
號達)又全軍艦ニ御國瀬戸内通リ長崎迄ノ測量ヲ許ス(太政官第八十九號達)

觀象臺落成ニ付水路寮管轄被仰付測量事務ノ儀ハ全寮測量課官員ニ於テ取
扱可申旨海軍省ヨリ達セラル○依テ觀象臺假規則ヲ制定ス(附錄第四號ヲ見
ヨ)是レ相浦中佐及大伴中尉ノ專ラ調査スル所ニ係ル爾後觀測事業ハ大伴中
尉磯野十五等出仕ヲシテ之ニ當ラシム

編者曰フ此施設アリシヨリ測器試驗ニハ幾多ノ便宜ヲ見タリ然レトモ創

業ノ際規則ノ順序ハ容易ニ行ハレス量地掛ト測天掛トノ紛雜ヲ免カレサ
リキ

相浦中佐ヲ以テ測量課長トス

八月

膠州灣、銅山港、揚子江、圍頭及深滬二澳ノ四圖刊成ス蓋シ皆「イムレ」商社出版
圖ノ覆版ナリ

直隸海峽諸水道、海洋島錨地圖刊成ス蓋シ英海軍海圖ノ覆版ナリ

春日艦臺灣近海測量ノ爲メ差遣セララル(海軍省達)

奄美大島海峽西部ノ圖刊成ス

九月

千島國振別郡東部ノ海灣ヲ單冠灣ト稱ス(太政官第一〇一號達)

香港島ノ圖刊成ス蓋シ「イムレ」商社出版圖ノ覆版ナリ

橫濱港ノ圖刊成ス

金星經過測量ノ爲メ米國天文博士ジョージ・ダビソン(後ニ米國水路部副長)チットマン(現今ノ米國海陸測量局長)エドワードナル三氏來朝ス

編者曰フ米人來朝ニ先タチ米國政府ハ天文學上明治七年金星經過ノ實測ハ緊要事ニ付同國海軍提督ヲ該實測委員長トシ四班ヲ組織シ世界ノ各處ニ於テ實測施行ノ企圖アリ乃チ六年五月ニ於テ米國國務卿ヨリ在日本米國公使ヘ日本ニ於テ該測量施行必要ニ付全政府ヘ照會ヲ要スル旨發案セシ時ヨリ七年十二月九日長崎ニ於テ金星測量終了ニ引續キ東京ト外國トノ經差測定ノ終了(即チ明治八年一月)迄ノ期間ニ於テ各國公使太政官外務省文部省海軍省工部省及水路寮ノ間ニ意見又ハ希望ニ關スル照復ノ爲メ數百通ノ文書ヲ交換セリ今其經過ノ大要ヲ明ニスルカ爲メ便宜上此間ノ要點ヲ一括シテ本月ノ部ニ於テ左ノ如ク摘記ス其詳細ハ金星試驗顛末録ニ就テ見ルヘシ

是ニ於テ大伴(肝付)中尉、磯野少尉補、生徒關文炳ヲ隨行セシメ長崎ニ出張シ測

地ヲ定メ五藤大尉、金木少尉補ヲ攝州摩耶山ニ出張セシメテ其準備ヲ爲シ尋テ柳大佐、相浦中佐ハ長崎ニ出張シ米佛兩國ノ實測ヲ熟察シ加藤高杉二少尉ヲ加ヘテ大伴、磯野、關ト共ニ米人ニ就キ實地天測術ヲ練習セシム即チ十二月七日金星經過當日ニハ米人ハ長崎太平山ニ佛人ハ金比羅山ト神戸諏訪山ニ墨奇斯古人ハ橫濱野毛山ニ我ハ東京觀象臺及攝津摩耶山ニ於テ各自觀測ス觀象臺ニ於テハ川村海軍中將其他海軍武文官等臨場セリ伴少佐之カ觀測ヲ監督シ頗ル好果ヲ得後チ金星經過記ヲ作ル○該内外國人觀測ノ結果ハ左表ノ如シ

者 測	測地	緯 北	經 東	後	
				切	外
吉田中尉	青木大尉	中村大尉	觀象臺	h m s 9 18 57.27	h m s 3 48 58.25
				35° 39' 22.0	139° 44' 19"
曆	海			h m s 3 49 42.0	35° 26' 50.0
スト副 ルミ デニ ヤス	墨奇斯古	野毛山	h m s 9 18 44.16	h m s 3 47 55.5	h m s 139 41 02.4
			35° 26' 54.0	139° 41' 02.4	h m s 3 50 24.0
曆	海			h m s 3 10 48.0	32° 45' 00"
ダビ ソン	米國博士	太平山	h m s 8 39 04.6	h m s 3 10 24.2	h m s 129 52 24.0
			32° 43' 21.0	129° 52' 24.0
尉中伴大		山			
ン ジ ヤ ン サ	佛國博士	金比羅山			
佐中浦相	佛國天文	寺福濟			
ロ ア	士ドラク	諏訪山	h m s 8 51 34.0	h m s 3 30 28.8	h m s 32 45 17"
			34° 41' 00"	132° 53' 30.0	h m s 3 33 00.0
尉大藤五				h m s 3 30 29.5	
豐仕福士成	開拓使出		h m s 9 23 07.0	h m s 41 47 13.5
			41° 47' 13.5	140° 46' 45"	h m s 3 55 10.3
曆	海			h m s 3 54 48.0	41° 51' 00"

午	前	午	推實國	地名
h m s 3 21 09.5	h m s 11 28 38.5	測實日	東京
h m s 3 23 19.13	h m s 11 27 13.77	h m s 11 00 30.08	算推同	京
h m s 3 22 24.0	h m s 11 27 42.0	h m s 11 00 42.0	算推英	橫濱
h m s 3 21 45.4	h m s 11 29 24.6	h m s 11 04 07.0	測實墨	
h m s 3 23 06.0	h m s 11 28 24.0	h m s 11 01 24.0	算推同	
h m s 2 43 36.0	h m s 10 49 54.0	h m s 10 22 48.0	算推英	長
.....	h m s 10 53 59.0	h m s 10 26 05.0	測實米	
h m s 2 42 42.5	h m s 10 52 11.0	h m s 10 24 31.0	算推同	
.....	h m s 10 52 25.0		測實日	崎
			測實佛	
			算推同	
h m s 2 43 28.3			測實日	神戶
h m s 3 08 04.4	h m s 11 13 16.0	h m s 10 46 06.8	測實佛	
h m s 3 05 00.0	h m s 11 20 00.0	h m s 10 40 00.0	算推同	
h m s 3 03 13.5	h m s 11 13 25.5	h m s 10 46 15.5	測實日	函
h m s 3 26 09.2	h m s 11 34 26.0	測實日	
h m s 3 28 17.7	h m s 11 30 46.0	h m s 11 04 05.6	算推同	
h m s 3 27 30.0	h m s 11 31 24.0	h m s 11 04 24.0	算推英	館

ジョージ、ダビンソン氏ハ金星測量ト全時ニ經度電測ニ依リ長崎ト浦鹽斯德トノ經差ヲ測定シ進ンテ英佛ノ兩都ニ及ホシ遂ニ華盛頓ニ達セシムルノ計畫ヲナシタルヲ以テ柳大佐ハ乃チ之ニ由テ東京ト華盛頓トノ經差ヲ測定センコトヲ希望シダビンソン氏ハ之ニ全意シ全氏ハ長崎ニ止マリチットマン、エドワード兩氏ヲ東京ニ派シテ其事ニ從ハシメ明治八年一月業ヲ了フ大伴(肝付)磯野二士ハ終始之ニ從ヒ見學セリ

編者曰フ經差ヲ測定スルニ電氣ヲ用キルノ法ハ夙ニ米國ニ於テ專ラ之ヲ施行シ其好果ヲ收メタルモノナルカ我國ニ於テ未タ其用法ノ如何ヲ知ラサルノ時代ニ屬シタルヲ以テ經差ノ測定ハ唯經線儀移動ノ比較ニ依リ我國ト香港、上海、桑港等各地トノ間ニ往來スル艦船ニ於テ施測セルモノヲ平均シ而シテ經度ヲ定ムルノ起點ヲ長崎身投石及橫濱英海軍病院ニ置キ以テ全國各港ノ地點ヲ測定シ來リシカ此ニ至リ此貴重ナル新法ヲ學得シ今ニ至ルマテ該測術上ノ好果ヲ收メツ、アリ

右金星及經差測定ニ關シジョージ、ダビンソン博士ノ我ヲ誘掖薰陶セルノ悃切ナリシハ恰モ慈母ノ赤子ニ於ケルカ如ク至ラサル所ナシ我國正式天測術ノ發端ハ實ニ此ニアリト謂フヘク且ツ全博士ハ該術ニ關シ必要ナル書籍ヲ贈リ又各種器械ノ注文、購用法、傳習等ニ至ル迄親シク周旋ノ勞ヲ取り爲メニ我觀象臺創業ノ基礎ニ至大ノ便益ヲ與ヘタリ尙ホ同博士ハ我カ筑波カ始メテ桑港ニ航海セルトキ航海ニ必要ナル圖書ヲ全艦ニ贈リ且ツ便宜ヲ與ヘ其後モ屢ハ有益ノ書籍ヲ寄贈セリ此事實ハ我邦人ノ宜シク牢記スヘキ所ナリ(因ニ其後謝禮ノ爲メダビンソン博士一行ニ貴重ノ本邦製品ヲ贈與セリ)

肝付中將ノ談ニ據レハダビンソン博士ノ誘掖ニ由リ始メテ得タル測術ノ要項ハ約左ノ如シ

- 一子午線經過儀ニ依リ「トルコット」法ニテ緯度ヲ精測スルコト
- 一子午線經過儀ニテ恒星ヲ測リテ時刻ヲ精密ニ定ムルコト
- 一精密ニ測定シタル時刻ヲ電機ノ經線儀コロングラフ時記儀通信儀ニ依リ甲乙兩地

生徒ノ補欠ニ關スル意見上申

ニ送受交換シテ該兩地間ノ經差ヲ定ムルコト

當寮生徒ノ内七名ハ測量出張及觀象臺ニ使用シタル結果其補欠ヲ上請スルモ補欠ハ許可セラレヌ一方ニ於テハ艦船ヨリ航海士官トシテ轉用ノ要求絶エス樺太臺灣行ノ如キ臨時事件ニ應スルハ無論ナルモ平時轉用ハ測量事業ニ非常ナル障碍ヲ來タシ其要求ニ應シ難ク若シ省議ニシテ艦船航海士官ヲ當寮ヨリ供給スヘキモノト決定セラル、ニ於テハ左ノ件々ヲ許可セラレ度旨上申ス

生徒乘艦練習

- (一) 艦船航海士官ハ水路寮ノ管轄トスルコト
 - (二) 非役航海士官ハ水路寮出仕ヲ命シ平時測量ヲ練習セシムルコト
 - (三) 兵學校航海生徒卒業者ハ艦船ノ數ニ應シ實地測量練習ノ爲メ水路寮ヘ廻付ノコト否ラサレハ艦船士官補充ノ爲メ相當ノ生徒ヲ補欠スルコト
 - (四) 測量艦船一隻ヲ絶エス備フルコト
- 支那地方航海ノ艦船ニ水路寮生徒若干名實地測量ノ爲メ乘艦ノ儀ヲ上申シ

許可セラル

編者曰フ柳大佐ノ方針ハ水路測量ハ是非共専門ノ測量船ニ於テセサルヘカラス然レトモ當時其船ナシ故ニ己ムヲ得ス務メテ生徒ヲシテ艦船航海測量ニ從事セシムルヲ常トセリ

日支開戦ニ關スル意見上申

現ニ臺灣生蕃征討中大久保辨理大臣ハ清國政府ト國際談判ヲ開キ和戰ノ決未タ定マラス三條太政大臣ヨリ一旦緩急アラハ戰備ニ應スルノ覺悟アルヲ要スル旨夫々内諭アリ當寮關係ニ於テハ圖誌測器ノ調製配布ニ遺憾ナカラシムルハ軍事上最大要件ナルヘク因テ特ニ運送船一隻ヲ被渡當寮官員ヲ乘組セ必要圖書測器ヲ充分ニ積込ミ又長崎及鹿兒島ニ出張所ヲ設ケテ更ニ豫備品ヲ貯ヘシメ而シテ出征艦船ニ對シ其要求配付ヲ立辨セシメ且ツ航海士官ニシテ負傷戰死等アルトキハ該運送船乗組員ヨリ補充スルヲ得セシメ更ニ事宜ニ應シテ支那要地ノ視察測量等ニ從事セシムル等ノ事ハ目下ノ急務ト確信致候事若シ戰ニ決セハ金星測量人員モ悉ク之ヲ轉用シ戰時ノ急ニ應

シ度旨海軍卿ニ上申ス

十月

臨時英人ノ
雇用

英人ケビテンオッサラバン(辭令ハスリーピント誤譯ス)ヲ雇用ス同人ハ前後二十年間商船々長トシテ支那海航海ニ經驗アリ臺灣及清國々際談判破裂セハ軍事上使用ニ必要ノ材ナリトシテ川村海軍中將カ招致セシモノナリ臺灣事件平ラクニ及ヒ支那海水路記事調査上ノ爲メ當寮へ採用セラレ九等出仕石川洋之助ヲシテ之ニ就テ調査セシメ大ニ得ル所アリ尙ホ支那通商案内ナ^{チャイナコンメルシブルガイド}ル一書ハ全人ノ献納ニ係リ當時支那水路記事上ニ大ナル利益ヲ與ヘタリ後チ石炭運送船石川丸船長ニ轉ス

海圖出版ニ
關スル法律

當時水路上ノ智識ハ殆ト一般ニ通スルモノナク從フテ民間ニ於テ粗畧ノ測量圖ヲ刊行シ且ツ其改正ノ要アルヲ知ルコトナク却テ船舶ニ障礙ヲ與フル少ナカラス依テ海圖ノ調製ハ當寮ノ職司トシテ一般ニ布告ヲ發セラレ度旨上請ノ結果太政官第一一〇號ヲ以テ左ノ布告アリ

中外諸海圖ハ海軍省水路寮ニ於テ實測ノ上刊行候ニ付御國人民新ニ礁洲ヲ發見シ港灣ヲ測量候者有之候ハ、圖面相添ヘ速ニ全寮へ可届出候此旨布告候事

但シ礁洲ヲ發見シ港灣ヲ測量候者届出候節ハ全寮ニ於テ取調確實ノ上ハ本人姓名ヲ其海圖ニ記シ施行ス若シ又他ノ海圖等自力ヲ以テ版行致度者ハ全寮へ伺出ノ上施行可致事又文部省へハ海圖類出版願出候者有之トキハ水路寮へ照會ノ上可差許旨達セラル(當時出版物ハ文部省管轄)

測量

第二回水路
寮新築上申

海圖ノ覆版

省命ニ依リ横須賀海岸砲臺設置ニ付該地點附近ヲ測量ス水路寮ハ假設ナルニ付キ觀象臺隣地川村海軍大輔邸ヲ買上ケ該所ニ新築シ觀象臺ト連絡ヲ通シ度儀上申ス省セラレス

吳淞江口、甬江口、澎湖列島、直隸及遼東海灣、舟山群島諸海峽ノ諸圖刊成ス但シ「イムレ」社出版圖ノ覆版ナリ

支那部燈臺
表刊行ノ初

明治七年

外國圖ノ寄贈
分課規則改定ノ意見

モ原書古キ爲メ不完全ナリキ
澳國海軍水路局ヨリ全局版海圖三十八葉ヲ寄贈シ來ル
當寮分課規則改定事業順序新定ノ意見ヲ石川編輯掛ヨリ上官ニ建言ス
十一月及十二月

水路誌刊成

臺灣水路誌補刊成ス即チ本宿宅命ノ報告ヨリ採ル

海圖購買人

府下尾張町西村商會へ本寮出版海圖ノ賣捌ヲ許可ス

露國版海圖ノ反譯

露國版海圖ノ反譯ヲ外務省出仕諸岡通義ニ托ス爾後之ヲ例トス

海圖ノ覆版

定海港、泉州港、厦門港ノ三圖刊成ス蓋シ「イムレ」社出版圖ノ覆版ナリ

測器

艦船綱具類ヲ測器附屬品トシテ水路寮ノ所管トセラル

技術官時間外増給ノ件上申

當寮技術者ハ定時間外ニ臨時寫圖ニ従事スル多キヲ以テ時間増シ給ヲ上請シタルモ許可セラレス

外國海圖ノ寄贈

米國ヨリ米版海圖一式ヲ寄贈シ來ル

經線儀修理傳習

經線儀組立及修理法ヲ米人ダビン博士ヨリ傳習セシムル爲メ附屬富森友

測器

藏ヲ長崎ニ派遣ス

海岸測量經緯度ヲ求ムルニ必要ナル左ノ四測器(代價總計約三千弗)ヲ米國へ

注文ノ事ヲ許可セラル

一、トランシット、インストリユームメント 一、イコートリアル、インストリユームメント

一、コロノガラフ付アストロノミー、コロツク

本二ヶ月ハ殆ト其全部ヲ金星測量事業ニ費セリ

本年總況

本年ハ測量製圖編集各事業ニ必要ナル諸器械圖書ノ設備並ニ分課責任ノ基礎未タ定マラス水路事業ノ發達上最モ大切ノ時機ニ屬スルニ當リ官民トモ萬事文明改進ノ勢ニ驅ラレ一方ニハ水路ノ智識技術ニ待ツ所ノモノ續出スルニ拘ハラス一方ニハ其技術ノ尙フヘク其習得施設ノ容易ナラサルコトヲ輕視スルモノ多カリシハ當局者ノ最モ苦辛セシ所ナリ即チ本年ハ稀ニ見ル

測量
總況

所ノ天下多事ニシテ水路事業ニ於テハ津輕海峽水底電線沈架ノ測量、北海道千島各港及樺太ノ軍艦走測及視察、臺灣生蕃征討中ノ測量、佐賀ノ亂ニ關シ測量艦ノ補缺、清國政府ト國際談判ノ結果ヲ豫想シ開戰準備ノ爲メ各方面ニ對スル臨時圖誌ノ調製、配備、觀象臺落成ニ付其管轄事業ノ設備實施、諸艦船ニ航海士官補充ノ爲メ測量士官及生徒ノ流用、生徒ノ存廢ニ關スル紛爭、分課規則事業順序ノ制定ニ關スル懸案調査、金星測量ニ關スル事業等一時ニ輻湊シ其處理上ニ幾多ノ論難攻撃ヲ受ケタルモ能ク之ヲ排除シタルノミナラス比較的諸事業改進ノ途ニ就キタルハ以テ當局者カ一定ノ方針ヲ持シ適材ヲ適處ニ配シ之ヲ鼓舞獎勵シ勇往邁進シタルニ由ラスンハアラス

又本年海圖刊成ノ比較的多カリシハ臺灣ニ關スル清國事件ノ急ニ應シタルカ爲メナリ

年末人員左ノ如シ

奏任	判任	等外	附屬	下士	銅版手傳	雇	寮番	給仕	計
----	----	----	----	----	------	---	----	----	---

十人	二十二	九	一	八	九	二	十二	三	七十三
----	-----	---	---	---	---	---	----	---	-----

本年歲計ハ附錄第五號ヲ見ヨ

明治八年

一月

經緯度奏聞

海軍始兵學寮御臨幸ノ際柳大佐ハ觀象臺經緯度北緯三五度三九分二一秒東經一三九度四四分五七秒

水路寮生徒ノ廢止

米人經差測ナルヲ奏聞ス
 本月ニ至リ水路寮ノ生徒ヲ廢セララル當時生徒中成績優等ノ者四名高野瀨廉、荒畑岩次郎、田中原太郎、大木延建ヲ水路寮十五等出仕ニ藤本治信、鈴木環、小林春三、小掠元吉、雨宮原一、大山節郎、鶴見氏智、藤原信高外ニ當時艦船ニ乘組勤務ノ者有川貞白、關文炳、三原重業、林昌澄、武藤喜平治ハ本年內ニ等外出仕ヲ命セラル

此生徒中水路事業ニ終始身ヲ委テタルモノハ高野瀨廉(水路大監鈴木環(水路大監)大木延建(海軍大尉)其他ハ時々出テ、艦長航海長其他部外ノ勤務ヲ取リタル者磯野健(後海軍少佐)有川貞白(後海軍少將)關文炳(亡海軍大尉)小掠元吉、小林春三(後海軍大尉)藤原信高(後海軍大尉)三原重業(後海軍大尉)林昌澄(後海軍大尉)武藤喜平次(後海軍大尉)其他辭職又ハ相尋テ死亡ス(高野瀨、荒畑、鈴木ノ三名ハ海軍少尉ヨリ海軍中佐ニ至リタルモノ水路官設置後水路監ニ轉任ス)又前記以外ノ生徒タリシモノ西喜助、青木稻造、丸山重俊(朝鮮警務顧問)秋山義邦、古川行春、山内寛、三戸四郎、山口亨藏ハ生徒中ニ退寮シ又海軍砲術生徒福地邦鼎、今ノ武富軍務局長、大塚暢雄、荒木亮一、稻生震也ノ四名ハ測量研究ノ爲メ水路寮ニ於テ測量術ヲ練習シタルモノ測量ニ従事スルコト長カラスシテ艦隊乗員トナリテ去ル故ニ前後通シテ生徒トシテ教育ヲ受ケタルモノ二十六名アリシモ磯野健ノ外ハ皆卒業セスシテ止ミタル事情前記ノ如シ(十七年附録第八號ヲ參照セヨ)

編者案スルニ水路官ノ教育ハ明治五年三月測量生ヲ置キシ以來二年半有餘ニシテ廢止セラレタルモ當時事業上其教育陶冶ノ必要ハ毫モ減スルコトナキヲ以テ爾來ハ出仕官又ハ雇員ヲ置キ實地測量勤務ヲ兼テ其術ヲ修養セシメ測量官ノ缺ヲ補充セリ此類ヨリ出身セシ者ハ加藤重成(亡海軍大尉)三浦重郷(亡海軍中佐)吉村美明(海軍大尉)其他柳大佐ノ門下生四名即チ金木十一郎(亡海軍大尉)三浦義深(後海軍少佐)岸田吉三郎(後海軍水路大監)居崎政光(亡海軍大尉)等ニシテ水路事業ニ最モ功績ヲ舉ケタルハ後人ノ牢記ニ價スルモノナリ顧フニ水路寮生徒ノ教育タル測量術ヲ主トシ航海運用術ハ傍ラ之ヲ兵學校練習艦ニ於テ練習セシメ而シテ測量及航海士官ニ適スル將校ヲ養成スルニアリシモ正式ノ海軍將校教育ノ方法ヨリ見レハ稍ヤ變則タルヲ免レサルノ觀アリタルヨリ遂ニ此ニ至リタルモノナラン然レトモ柳大佐ノ主持セル意見ハ水路測量ハ英國ノ如ク専門ノ測量艦ヲ備ヘ航海運用測量ノ三者ヲ備具スルモノニシテ始メテ適宜ノ海圖ヲ作り得ヘシト

貴重ノ書籍

云フニアリタルモノ、如シ然ルニ當時此意見ヲ遂行スルノ途開ケスシテ一方ニ於テハ生徒中唯海軍將校ノ名ヲ目的トシテ入學セルモノアリ又一方ニ於テハ兵學校ニ航海測量ノ正科ヲ置キアラサル等ノ事アリテ結局當時海軍一般技術ノ未開ニ由ルト云フノ外ナカラン蓋シ柳大佐カ此ノ如キ難況ニ當リ苦辛教練シテ得タル前記ノ人々ハ其後屢々航海士官ノ補缺ニ逢ヒタルヲ以テ又其補缺測量官ノ薰陶ニハ其心ヲ勞スルコト絶エサリキ米人ダビソン博士歸國ニ臨ミタイムアシマスマラチチユード測天必携書一冊ヲ柳大佐ニ贈リ來ル後覆版シテ之ヲ各測量員ニ分與セリ

肝付中將ノ談ニ據レハ本書ハタイムアシマスマラチチユード時刻方向角緯度等ノ意ヨリ出テタル名ニシテ諸測天事業報告ノ精髓ヲ集メタルモノニシテ此書タニ携帶セハ時刻經度ヲ含ム方向角緯度ハ勿論其他如何ノ測天事業ニモ必ス其實例ヲ見ルヲ得テ其施行ヲ容易ナラシム洵ニ有益無比ノ測天必携書ト謂フヘシ

銅版手傳四名ニ官費英語學ノ稽古ヲ命ス

彫刻手語學

海上記事

海上記事水路寮ニ於テ編集ニ付キ使府縣沿海ニテ暴風雨又ハ海嘯其他海上ノ氣象ヲ見ルトキハ其時々全寮へ届出ツ可シ(海軍省達)

二月

柳大佐、相浦中佐以下十數名東京海灣中下總利根川口船橋ヨリ千葉沿岸木更津迄ノ測量ニ著手シ五月ニ至リ完結ス而シテ驗潮ハ品川第一砲臺ニ於テ施行セリ

分課規則ノ改定

分課規則ハ從來ノ假定ノモノアリシモ事實行ハレサルコト多ク各部ノ事業ハ總テ測量課ノ從屬ノ如キ觀アリ蓋シ當時ノ製圖師ハ製圖組織ノ法ニ通セス編輯員ハ水路航海ノ智識ニ乏シク從フテ製圖及編輯室ハ常ニ測量課員ノ雜談所トナリ從フテ幾多ノ弊害ヲ生シタル結果兼テ客年ヨリ調査セル該改正懸案ヲ詮議決定シ水路寮分課諸規則ヲ改正シ本月十五日ヨリ實施ス(附錄第一號ヲ見ヨ)然レトモ其弊害ハ容易ニ除去セラレサルモノ多カリキ水路測量上寫真ハ必要ノモノナルヲ以テ主船寮ヨリ寫真器械ヲ讓受ケ之ヲ

寫真採用ノ開始

海圖ノ覆版
及反譯

實用シタルモ未タ好果ヲ得ル能ハス
朝鮮東海岸及金角港婆衣婆太灣(Voevoda Bay)ノ二圖刊成ス但シ露版ノ覆版ナ
リ當時露國語ノ譯者ナク横濱碇泊露艦「ガイダマーク」ニ就キ質問ノ上之カ解
釋ヲ得タリ

三月

英國ニ注文セル鐵製銅版印刷器械到著ニ付キ其組立据付ニ關シ種々講究ノ
末僅ニ之ヲ了シタルモ其完全ナル使用法ニ適スル人ナキヲ以テ特ニ民間ニ於
テ有名ナル彫刻師松田玄々堂ノ兄弟ナル松田太三郎肉製及撒肉ニ巧ナリヲ
雇用シ之ニ充テ尙ホ紙幣寮今ノ印刷局雇獨乙人リーベルス銅版師ブリグ紙
幣寮刷版局長中村裕興ノ來寮ヲ請ヒ之ヲ傳習セシメタリ○此正式印刷器械
ヲ得其練習成リテヨリ著シク印刷上ノ便ヲ得タルモ手働ニ屬スルヲ以テ運
轉ニ非常ノ力量ヲ要シ爲メニ其工手ハ身体ノ衰弱ヲ醸シ病軀トナルモノ少
ナカラサリキ

正式印刷器
械ノ据付

海上記事

海上記事差出方ニ付客年四月太政官達アルモ實効少ナキニ付更ニ本年四月
限リ所管船舶ヨリ右記事可差出旨當寮ヨリ各府縣へ達ス

海圖覆版

大祖伯德灣(Peter the Great Bay)及釜山港ノ二圖刊成ス但シ英圖ノ覆版ナリ
米國海岸測量局長ヨリ米製航海曆ヲ寄贈ス之レ我邦ニ於テ米曆ヲ得タル始

書籍ノ寄贈

メトス但シダビン博士ノ好意ニ由ル
清國製支那東岸海岸圖及港泊圖十三葉ヲ福島厦門領事ヨリ寄贈セリ蓋シ英

清國製海圖

圖ヲ清國ニ於テ覆版セルモノ當時支那部ノ海圖調製ニ有益ノ參考トナリシ
モノナリ

外國船ノ測
量

英國測量艦「シルビア」ハ昨七年測量未了ノ地紀州尾鷲灣附近ヨリ遠州御前埼
ニ至ル海岸ノ測量ニ從事スル旨内務省ヨリ關係沿海諸縣へ達セリ

四月

英國測量及探究艦「チャーレンジャー」ハ世界各海探究ノ途次横濱ニ來著ニ付
英人雇員オッサラバント共ニ柳大佐相浦中佐石川九等出仕全船ニ赴キ測器

外國測量艦
ヲ視察ス

其他ノ視察ヲナセリ全艦ハ深海測量ノ結果世界最深ノ海底ヲ發見シ地學ニ一新紀元ヲ與ヘタルモノニシテ後年當寮ニ於テ其探究報告ナル二大書籍ヲ購求セリ

測量艦

在長崎第二丁卯艦ヲ測量艦トシ水路寮ニ其管轄ヲ命シ海軍大尉青木住真ヲ以テ其艦長ニ補ス

測量中止

山陰道及北陸道測量ノ爲メ海軍中尉吉田重親、海軍少尉高杉春祺、海軍少尉補金木十一郎外六名ニ第二丁卯艦乗組ヲ命セラレ諸測量準備悉ク成リ下ノ關迄出張シタルモ五月ニ至リ該艦ハ事務局ノ爲メ對馬及朝鮮測量ノ急要ヲ生シ山陰北陸ノ測量ハ差止メラレ其結果一行中三名ニ歸京ヲ命セラル

東京海灣測量

東京海灣ノ圖ハ嘉永六年後明治以前ノ英尺測ヨリ成ルモ其當時必要ナル測標ノ施設ヲ許サ、ル事情等ヨリ極メテ粗畧信スルニ足ラス因テ明治五年六月ニ木更津近海十一月ニ品川近海全六年五月ニ横須賀近海十一月ニ横濱近海本年二月ヨリ利根木更津間ヲ測量セシモ尙ホ引續キ本月ヨリ殘部三崎劍

埼以內相房沿海ノ測量ニ著手ス五月ニ至リ陸軍省ヨリ富津海堡建築地點測量及海底檢査依頼ノ結果全時ニ之ヲ測量シ全部ノ測量ハ十月ニ至リテ終了(當時海堡地點海底地質檢査用鑿鑽器入用ニ付雇英人オッサラバンヲ横濱ニ遣リ商館ニ注文セシム其製造費貳百貳拾四弗ニシテ竣工ノ上之ヲ使用セリ)

右ノ測量ニ從事セルモノ柳大佐之カ主任トナリ相浦中佐、五藤大尉、兒玉、加藤、高杉三少尉、製圖師狩野守貴外九名ニシテ其他ニ水兵六名ヲ用フ

編者曰フ此測量ニテ東京海灣全部ノ測量ヲ完了シタルモ測法未タ完全ナラス製圖上各部海岸地點ノ連絡ニ非常ノ困難ヲ來タシタリ其原因ハ從事者中ニ其技術著シキ懸隔アリタルハ其一因タルヘキモ主因ハ平面測量ノミヲ知リテ未タ海岸測量術ヲ知ラサルニアリシモノ、如シ故ニ後年ニ至リ一部ノ精密ナル改測ヲ了ル毎ニ既測部ノ連絡ニ再ヒ困難ヲ生シタリ

印刷肉ノ新
製及使用ノ
不適

刊行海圖尺
度ニ關スル
批難

紙幣寮刷版局へ依頼シテ製造セル銅版印刷肉一斤全寮ヨリ廻付シ來ル。編者曰フ當時製圖主任タリシ大後秀勝ノ談ニ據レハ大藏省紙幣寮ノ製肉ハ外國製ト全シク緊張ニシテ高價ナルノミナラス普通海圖ノ印刷紙ハ肉ノ爲メニ紙質ヲ剝キ取ラレ且ツ全紙ノ印刷ハ一日二十枚ヲ超ユルコト能ハス屢ハ傳習試驗ノ勞ヲ取ルモ到底其目的ニ副フニ至ラス遂ニ之ヲ廢シ從來ノ本邦製肉ヲ用フルコトニ復セリト

水路寮出版海圖ノ内宮古、釜石、野付、小樽、函館、磯、津、輕海峽、下田、八重山、根室、厚岸、其他支那各港圖ハ圖尺狹小ニ過キ實用ニ適セサルヲ以テ悉皆英圖ノ如ク大尺度ニ改版シ實用ニ適セシムヘク其爲メ艦隊ヨリモ打合アルヘキ旨本省ヨリ注意アリ

編者曰フ當時支那部ハ其覆版ニ用ヒタル商社版原圖ノ多クハ海岸圖中ニ載セタル分圖ニシテ其尺度極メテ小ナルモノナリ故ニ之ヲ伸畫セハ却テ不信ヲ重ヌルノ害アリ我測量原圖アルモノニ在リテハ當局ニ於テ無論適

當ノ尺度ヲ希望シタルモ製版當時ハ四分之一以上ノ銅版ヲ作ルモノナク其後大版ヲ作り得ルニ至リタルモ各部新圖ノ調製ニ急ナル人員ノ寡少ナル容易ニ改版ノ手段ヲ得サリシハ已ムヲ得サル所ナルヘシ今日ヨリ見レハ當時艦隊ニ於テハ海圖伸畫ノ害アル理ニ通スルモノ少ナク其實行シ難キコトヲ要求シ來リ當局者モ亦之カ爲メ新測ノ東京海灣圖ノ尺度ヲ一哩一吋九九七(現時ハ〇吋七五)トシテ續版ニ製シタル如キ互ニ極端ニ走リタルカ如キ觀アリ蓋シ進步ノ段階トシテ免レサルノ事情ナルヘシ顧フニ當時ハ普通海圖ト雖東亞細亞方面ニ於ケル支那部ノ海岸ハ香港スラ畧測圖タルヲ免カレス又朝鮮部ハ殆ト皆無ト云フモ不可ナルナク而シテ上記各部ニ對シテ有スル小數ノ海圖ト雖其尺度ノ當否ハ勿論測圖ノ程度ハ恰モ今日ノ露領沿海ノ圖ト相類セル不完全ノモノナリシモ(當時ノ英海圖目錄ヲ見ハ思ヒ半ハニ過キン)他ニ取ルヘキノ海圖ナカリシナリ

五月

測量艦測量
及測量艦ノ
管轄替

第二丁卯艦ハ對馬及朝鮮沿岸ノ測量役務ヲ命セラレ海軍中尉吉田重親、海軍少尉補外三名乗組出測ニ從事シ長門彦島ノ福浦港、對馬ノ嚴原及阿須港並ニ西泊港、朝鮮ノ釜山港ヲ測量シ對馬及釜山ノ記事ヲ調査シ歸途十月ニ至リ宇和島及佐賀、關海峽ヲ測量シタリ全時雲揚艦ハ朝鮮江華島砲臺ト砲戰ヲ開キ國際問題ヲ惹起シタル爲メ十一月第二丁卯艦ハ朝鮮回艦ヲ命セラレ中牟田西部指揮官ノ管轄ニ屬シ金木少尉補外一名乗組ノ儘ニテ在韓邦人保護トシテ全地ニ回艦セリ

水路誌材料

本邦水路誌編纂ニ付右材料トシテ沿海府縣へ郡、村、驛名通知ヲ要スル旨照會ス

海圖刊成

青森灣ノ圖刊成ス

書籍ノ寄贈

米國海軍觀象臺長ヨリ測天年報自一八六七年至一八七二年六冊及恒星根數表一八四五年ヨリ全ヨリ成リ星數一〇、六五八顆ヲ有スルモノヲ寄贈ス蓋シダビン博士ノ厚意ニ由ル昨七年北海航海ノ際測量セシ圖面貳拾枚眞木海軍少將ヨリ提出ノ分本省ヨ

艦船測量圖ノ廻付

リ廻付セラレ

編者曰フ大阪丸ノ此畧測圖ハ記録ヲ欠キ其何レノ地タルヲ知ル能ハサルモ多分擇捉等ノ各港ナラン

六月

艦船渡測器定表

七年四月決定ノ艦船渡測器定表ハ艦隊ニ於テ實際上改正ヲ要スルニ至レル趣キニ付改正案提出スヘキ旨本省ヨリ達セラル(十月ノ部參照)

書籍ノ寄贈

「ブラクテカール、ユース、オフ、メテオロヂー」ナル氣象書米國博物館ヨリ寄贈ス編者曰フ本書ハ當時氣象學調査上利益ヲ得タルモノナリ

藏書

月末藏書ハ和漢書百五部洋書四百四十六部ニ達セリ

七月

觀象臺測器原基ノ設備

英國へ注文ノ原基晴雨計、螺管晴雨計、原基寒暖計、驗濕儀、乾濕寒暖計、量雨器、驗風儀、太陽寒暖計、米國へ注文ノ恒星時經線儀電氣仕掛到來ス但シ觀象臺用トス肝付中將ノ談ニ據レハ此等ノ諸器械到着後氣象觀測ニ付始メテ其具体的

觀測ヲ施スコトヲ得タリ又其内恒星時經線儀ハ恒星ノ測望ニ際シ時差及緯度測定ニ子午線經過儀使用ノ便利ヲ始メテ全フセシメタリ

八月

水路誌刊成

軍艦測量

支那東岸水路誌刊成ス是レ客年春日艦乘員岡部中尉ノ實驗報告ヨリ取り千八百七十四年版上海稅務司刊行ノ支那燈臺表ヲ譯セルモノヲ附録トシテ加ヘ編纂スル所ニシテ當時全海區ノ航海ニハ有益ノ參考トナリシモノナリ露國ト樺太千島交換ノ約成リシ結果日進艦樺太方面回航ニ付海軍少尉高杉春祺外一名員外ヲ以テ乘艦ス九月ペトロポールスキー港ニ著シ其經緯度ヲ實測シ(北緯五三度〇分三三秒東經一五八度四五分三〇秒)十一月歸京ス此行本宿少尉ハ千島ノ走測ヲ施シ後之カ報告書ヲ提出セリ政府ニ於テ國內開港場ヘ水先法施行ノ目的ヲ以テ其規則施設ニ關シ内務海軍兩省ニ於テ協議ノ上原案調成スヘキ命アリシ結果本月及九月ニ至リ赤松海軍少將柳海軍大佐該御用掛ヲ命セラレ驛遞局ニ於テハ塚原周造水路寮ニ

水先條例施設ニ關スル調査

於テハ石川洋之助黑野元生右調査主任ヲ命セラレ英國水先條例ヲ反譯調査ノ上草案ヲ調製シタルモ後ニ重ニ内務省ノ主管ニ屬セシムルヲ至當トスル議ニ依リ之ヲ止ム

九月

補助測量船

新艦ノ測器議裝

東京海灣測量ハ五月ヨリ著手シ殆ト九月初旬ニ終了シタルモ常用小蒸氣船ニテハ沖合ノ鍾測事業抄ラス依テ兵學寮所轄蒼龍丸ヲ借り受ケ度儀九月十二日上申許可アリタルモ全船ハ其準備ニ殆ト二ヶ月ヲ要シ十一月五日ニ至リ漸ク準備成リ品海拔錨各所ノ鍾測ニ從事シ十八日ニ至リ終了セリ横須賀ニ於テ製造ノ清輝迅鯨二艦ノ測器儀裝準備ハ當寮ノ取扱ヒニ屬スルヤ又主船寮ニ屬スルヤ不明ニ付伺出ノ結果主船寮ノ豫備品欠乏ノ故ヲ以テ當寮ニ取扱フヘキ旨指令アリ

編者案スルニ艦船渡測器ハ其購買準備手續主船寮ト水路寮トニ跨カリ新艦測器儀裝ノ分ハ主船寮ニ屬シタルモ時トシテ水路寮ニ於テスルコトア

外國部海圖
ノ不備

航路標識設
置案

リテ一定セス從フテ新艦計畫又ハ竣工ノ前ニ其筋ノ通知ナク已ニ竣工
ニ及ヒ急ニ艤裝ノ命アルモ直チニ其準備ニ應スルニ由ナク爲メニ水路當
局者ハ其處分ニ困難セシコト數年ニ涉レリ○迅鯨艦ハ御召艦ト定メラレ
タルヲ以テ其測器ニ屬スルモノハ當寮測器掛ニ於テ特製セルモノハ勿論
外國製品ニハ加工シテ菊ノ御紋章ヲ彫刻シ美麗ヲ極メタルモ遂ニ御召艦
トナラスシテ止ム

練習艦筑波米國航海ニ際シ桑港及太平洋航洋圖ノ請求ヲ受ケタルモ各一葉
ノ外ナク又寫圖ニ違ナキ爲メ遂ニ航海中貸渡スコトトナレリ
十月

英人ゼームス内海及九州沿岸四國南岸ニ二十一箇所ノ航路標識ヲ置クノ必
要ナル旨ヲ建議ス即チ左ノ如シ

謹テ一書ヲ呈シ左ニ列擧スル危險ノ巖礁及淺灘ノ所名ト位置ヲ閣下ニ申
報ス若シ礁標又ハ浮標ヲ以テ之ヲ標示セラル、ニ於テハ右所在海濱ノ航

海ヲ大ニ便易ニス可シ

又内海ニ於ケル豊後海盆ノ正南及南西並ニ九州西海濱ニ燈臺設置スヘキ
ノ位置ヲモ併セテ申報ス

第一 礁標一箇 和田岬ト淡路島北角トノ間ニシテ大約其中央ニ在ル中ノ
瀨(平磯ニシテ英製ノ海圖中「アリン」
シエス、ローヤルロツク「ト名クル者」)

第二 兩尖浮標一箇 久留島瀨戸ノコノ瀨(英製ノ海圖中「メルシユ」
スロツク「ト名クル者」)

第三 大礁標一箇 平戸島ノ南角ヨリ南東ニ在ル危險ノ一礁ニシテ殆ト
松島ヘノ直線内ニ當リ唯大潮干潮ノ時ニノミ露出スル伏瀨

第四 大石礁標又ハ鐵礁標一箇 島原灣ノ入口ニ在ル最危險ノ一礁ニシ
テ即チ島原南角ノ早崎ト天草北端邊ノ通詞島ノ間大約其中途ニ横タ
ハリ干潮ノ時ニ露出スルナカ瀨

第五 礁標一箇 上甌島ノ北東端ト薩州トノ間ニ在ル中瀨(英製ノ海圖中「ピ
ラニールロツク」
ト名クル者)

明治八年

第六 鐘浮標一箇 鹿兒島灣ノ入口ニシテ英國海軍局ノ海圖ニ表記セシ
如ク九州南西海濱ノ位置ニ在ル神瀨

第七 礁標一箇 山川港ヘノ入口ノ東北東大約一里半ニシテ通常航路ノ
右方ニ在ル笠瀨(英製ノ海圖中「チート」
ルズ、ロツク「ト」名クル者)

内海諸燈臺

第八 第四等不動赤色燈明ヲリニューゴンシマ(燈灘ノ大島南西端
邊ナル「小尖島」)ニ設置スヘ
シ此燈ハ東方ニ於ケル久留島瀨戸ヘ往返ノ引路燈ニシテ東イ北四分
三北ヨリ南周シテ西四分三北(眞方位)迄ヲ照暉ス

第九 不動白色燈明ヲシロイイワ(英製ノ海圖中「ホワイトトツ」
「プド、ロツク」ト名クル者)ニ設置ス可シ此燈
明ハ南東ヨリ北周シテ北二分一西ニ至リ暗夜ニ於テ四里乃至五里ニ
達ス

第十 不動白色燈明ヲバマハマニ設置ス可シ此ヲバマハマハ大約南イ
西二分一西ノ角ニシテシロイイワヨリ其距離三鏈タリ而シテ燈明ノ

位置ハシロイイワ燈明上鉛直線ニ見ヘキ様建設シテ能ク之ヲ高掲ス
可シ然ルトキハコノ瀨ノ海岔正中ノ航路ヲ通過スルニ當リ此燈明
シロイイワ燈明ニ異ナラス全等ニ照暉スヘシ然レトモ其弧度ハ唯北
イ東ヨリ北々東四分一東迄トス(眞方位)此燈明ハ兩路狹窄ノ海峽ヲ通
過スル引路燈タリ

第十一 不動綠色燈明ヲ津馬南西角ノ南ナル角ニ設置ス可シ(久留島瀨戸北
方ヨリ入口)
此燈明ハ暗夜ニ於テ大約八里乃至九里ニ達シ其弧度ハ南四分一西ヨ
リ西周シテ北西迄トス(眞方位)此燈明ハ久留島瀨戸ヘ西方ヨリシテ近
ツク可キ引路燈タリ

第十二 第一等旋回燈明ノ其光二十里ニ達ス可キヲ野間岬ニ設置ス可シ
(薩州ノ
西海濱)

第十三 上甌島ノ東端ナル二子島ヨリ北イ東大約一里ニシテ英製海圖中
高サ五十「フィート」ト記セル小島ニ九里乃至十里ヲ照暉スル不動赤色

燈明ヲ設置ス可シ此燈明ハ晝夜共ニ甌島ト本洲トノ間ナル海岔ノ最良引路燈タリ但シ甌島本洲兩方共ニ一里四分一離隔シテ航スレハ無事ニ經過スルヲ得ヘキナリ

第十四 不動白色燈明ヲ天草南西ノ末端ナル大島ヨリ西ノ南大約一里半ニアル西方末端ノ小島ニ設置ス可シ此邊ハ危險ノ處ニシテ深サ九尋ナル巖礁散布ノ海底有リ

第十五 二十一里乃至二十二里ニ達スル第一等白色閃光燈明ヲ大瀬埼即チ五島岬ニ設置ス可シ此燈明ハ上海ヨリ長崎ヘ來航ノ引路燈ニシテ且又自他支那北方ノ部ヨリ五島ノ外傍ヲ歷テ函館ヘ航海ノ引路燈トス

第十六 第二等不動白色燈明ヲ豊後海岔ノイユライリユース巖上ニ設置ス可シ

第十八 第三等ノ白色閃光燈明ヲ内海ヘノ入口ナル豊後海岔ナル高島ニ

設置ス可シ(内海ハ高島ノ東端)

第十九 交互ニ閃光スル第二等赤白色燈明ヲ土佐國伊佐埼(足摺埼)ニ設置ス可シ

第二十 第二等不動赤色燈明ヲ阿波國ムロトサキニ設置スヘシ此レハ紀伊海岔ヘノ西方ノ入口ナリ

第二十一 第三等白色旋回燈明ヲ紀伊海岔ノ西方ナル阿波國エイシマノ東角ニ設置ス可シ

以上

千八百七十五年九月廿三日

品川ニテ アイ、エム、ゼームス百拜頓首謹白

朝鮮漢江ノ佛測海圖三葉陸軍省ヨリ本省ヘ廻付ノ分至急謄寫スヘキノ命アリ即チ鹽河第一第二漢江江華島東岸ヨリ濟物浦附近之部(小陵河)江華島北部ヨリ上流ノ漢江ニシテ孟春艦ハ寫圖ヲ得ルノ違ナク朝鮮ニ急航セリ

海圖水路誌ノ寫本調製

編者曰フ當時朝鮮西岸ハ一ノ英圖アルナク此粗畧ヲ極メタル佛測圖ハ唯一ノ貴重圖トシテ各方ヨリノ頻繁ナル要求アリ其謄寫上最モ困難ヲ極メタリ又水路誌ニアリテハ嘗テ臺灣蕃地事務局ニ於テ反譯セル英版支那海水路誌ノ一部及一佛國人ノ粗畧ナル航海記事ノ譯本ヲ訂正シ寫本ヲ以テ其急需ニ應シタリ此等ノ急需ハ本月雲揚艦ト江華島砲臺トノ砲戰開始ヨリ十二月黒田辦理大臣ノ渡韓國際談判ニ至ル迄止マサリシ

航海曆ヲ作ルニ足ルヘキ根原タル觀象臺ノ設備ハ經費ヲ要スルト外人ヲ雇用スルヲ要ストノ二說ノ障礙ヨリ微々振ハス是レ實ニ後來ノ悔ヲ遺スモノタリ此ノ如キ僅少ノ經費ハ其關係ノ大ナルニ比スレハ惜ムニ足ラス又外人ノ雇用ハ人ヲ得ルニ難ク寧ロ有爲ノ士ヲ外國天文臺ニ遣リ密ニ其事業ヲ視察セシムルニ若カス此ノ如クシテ諸海國ノ如ク海軍天文臺ヲ發達セシムルハ今日當局者ノ三顧ヲ價スル旨實例ヲ擧ケテ觀象臺實測掛海軍中尉大伴兼行ヨリ建議セリ

觀象臺設備
ニ關スル建
議

測器定數表

印刷室ノ新
築

報時球ノ建
設

艦船渡測器定數表改定意見未タ上申ノ途ニ就カス此際(常備)豫備(運送)ノ三艦種ニ應シテ區別シ相當ノ改定意見ヲ伺ヒ出ツヘキ旨省達アリ(六月ノ部參照)

銅版印刷室新築ヲ許可セラル但シ新築ハ十一月當寮移轉ノ後ニアリ

編者曰フ英國ヨリ購入ノ此器械ハ其重量大ナル爲メ堅固ノ築造ヲ要スルニ因リ土臺ハ碁盤目ニ布置シ且ツ甲板式床板ヲ張レリ此ノ如キ新器械ノ設備ハ成ルト雖尙ホ一日百枚ヲ印刷スルハ容易ノコトニ非サリシ

品川碇泊艦船ノ經線儀比較ニ便ニスル爲メ品川大井村タイムボールヘ報時球建設ノ建議ヲ納レラレ其施設講究中四月ニ至リ華族伊達宗基所有地三百五十五坪ノ獻納アリ依テ之カ設備ニ著手シタルモ艦船ノ都合ニ依リ八年十月ニ其建設ヲ止ム

海圖刊成

藏書

陸奥國安渡灣野邊地錨地及大畑浦ノ三圖刊成ス

本省文書課ヨリ當寮必要ノ書籍米版北太平洋危險報告實地航海書天文書太平洋海岸潮表目標距離決定表「ライト、キー、パース」海底溫度器金星經過目錄外

明治八年

四十種ヲ領收ス

十一月

臨時測量艦

第二丁卯艦ハ去月人民保護ノ爲メ朝鮮回艦ヲ命セラレ本月ニ至リ測量艦トシテ西部指揮官ノ管轄トナリ測量地方ハ水路寮ヨリ協議スヘキ旨達セラレ但シ測量ノ爲メ金木少尉補外一名寮員々外乗組トナル

測器製法

海圖刊成

當寮附屬器械師ハ電氣工廣瀨自慙ナル者ヨリ屢々羅針製法ノ傳習ヲ受ク大島名瀨港ノ圖刊成ス

測器材料

十二月
測器課測器掛ニ於テ羅針文字盤用トシテ雲母產地ヲ河瀨觀業權頭ニ照覆ノ末其產地ヲ愛知縣ヲ最トシ之ニ次キ京都府大阪府ナルヲ知レリ而シテ其後屢々各府縣ニ依頼シ之ヲ買収用辨セリ

外國船測量

去ル三月許可セル英測量艦「シルピア」御國南東岸測量著手ニ付全艦長ヨリ先ツ三河灣以東三角測量ヲ施シ明年四國沿海ノ三角測量ヲ施スノ目的ナルモ

儀裝

第五回ノ移轉

該地方中日本水路寮ニ於テ既測又ハ目下測量豫定アル各港灣ハ重複ヲ避クル爲メ省畧スヘキヲ以テ通知ヲ乞フ旨英公使外務省ヲ經テ海軍省ヨリ下問ニ付既測地ハ宇和島佐賀關ナル旨上答ス

海軍中佐相浦紀道ハ迅鯨艦儀裝兼務ヲ命セラレ

事業漸次發達シ到底寮舎ノ狹隘ヲ許サ、ルヲ以テ上申ノ結果當寮ハ本月ヲ以テ芝山内三島谷二番三番屬舎ヘ移轉シ元ノ寮舎九番十番屬舎ヲ水兵本部ヘ引渡ス

編者曰フ此寮舎ハ今ノ政友會本部ヨリ三島町ニ至ル地八千三百七十三坪ヲ有シ明治二十六年今ノ水路部ヘ移轉スル迄ニハ改造建増等ヲ成シ製圖室、彫刻室、印刷室、原備圖庫ヲ具ヘ殆ト十八年間ノ本據トシタリ然レトモ固ヨリ假舎ニ過キサリシヲ以テ屢々正式建築ヲ要スル旨上申シタルモ許可ヲ得ルニ至ラサリシ然レトモ水路事業設備ノ根基ハ殆ト此地ニ於テ定マリタルヲ以テ記憶ニ價スル地點ナリトス

規則改正
圖誌目錄ノ
進達
海圖ノ覆版

明治七年七月假定ノ觀象臺規則中先任大尉トアルヲ尉官ト改正ス
當寮刊行圖誌全部目錄省達ニ依リ進達ス(附錄第二號參照)
年末ニ至リ朝鮮鹽河ノ圖第一自留以受島至須袁孫堡砦全第二自須袁孫堡砦至小陵河口小陵河ノ畧圖自河口至
小陵即チ京城)ノ三圖刊成ス
年末人員左ノ如シ

奏任	判任	等外	附屬	下士	銅版 手傳	寮番	給仕	計
十三人	廿三人	十六人	二人	六人	九人	十三人	四人	八十六人

內長官柳大佐、庶務課長(長官自ラ當ル)、測量課長相浦中佐、製圖課長伴少佐、
編集課長心得石川九等出仕、會計課長栗原中主計ナリ
本年經費左ノ如シ

經費表 △印ハ洋銀ノ符合

文武官其他諸給料	二二三、二二一、九六二
寮内測器其他諸器械	△一六五、八一四 △六三六、〇〇〇

製圖費 <small>銅版石版器械其他諸器械及雜費</small>	一、二三〇、七四〇
圖書器械費 <small>寮用不分明</small>	△八八一、二三四 △五七七、一一〇
艦船用測器圖書費	△一、二一五、一八〇 △四三一、一〇〇
寮用書籍費	二八七、八六五
測量費 <small>旅費及日當實視費</small>	一、四七六、五二九
外國人給料並饗應費	二、〇二五、一六八
內國旅費	
運送費	
諸雜費	一、九二二、四九一
計	△三三、四二六、九八三 △一、六四四、二一〇

本年總況

本年モ前年ニ比シ稍ヤ進歩ノ蹟アリト雖事業ノ設備ハ尙ホ幼稚ニシテ彼ノ

水路官養成ノ基礎ト頼ミシ生徒ハ一月ニ於テ全廢セラレタル結果測量官補
 欠方法ノ講究、水路誌材料ノ蒐集、分課規則ノ制定、觀象臺ノ設備、又測量ニ至リ
 テハ東京海灣ト山陰北陸各港トノ二班計畫實行中後者ハ對馬朝鮮方面ニ變
 シ一方ニハ樺太千島交換ノ結果北海方面ノ航海アリ尋テ雲揚艦ノ朝鮮トノ
 砲戰ニ因リ艦隊ノ運動及國際談判ノ爲メ辦理大臣ノ派遣アリタル結果準備
 皆無ノ圖誌製造供給ニ頻繁ヲ極メ併テ寮廳移轉ノ舉アリテ其設備ニ苦辛スル
 等何レモ皆急要事件續出シ最モ多事ナリシ但シ四月以降ハ東京海灣其他ノ測
 量ニ全力ヲ舉ケ又十月以降ニ於テハ朝鮮事變ノ爲メ全力ヲ舉ケタルモ文書甚
 タ不備ナルヲ以テ寫本寫圖ノ假製ハ極メテ多數ナリシニ拘ハラヌ其詳細ノ記
 録ヲ缺キ又特別ノ艦船航海測量ニ係ル報告ハ水路寮ニ達セサルカ或ハ其報告
 ヲ缺キタルヲ以テ全ク其詳細ヲ示ス能ハサルハ共ニ遺憾トスル所ナリ
 唯本年分課規則ノ設定ハ實行上缺ク所アリタルモ稍ヤ具体的ノモノトナリ
 各部ノ責任ヲ冥々ノ中ニ養成シタルハ其効少ナシトセス

明治九年

一月

製圖及編修
ノ臨時雇員

水路誌ノ反
譯海圖ノ購
入

朝鮮事件ニ關スル警戒尙ホ解ケヌ本月ハ圖誌ノ調製更ニ繁ヲ加ヘシヲ以テ
 製圖手傳四名編修寫字生二名ヲ増加ス
 朝鮮水路誌譯成ル(原書英支那海水路誌一八七四年版朝鮮部寫本ヲ以テ各所
 ニ配付ス其後要求アル毎ニ寫本ヲ以テ之ニ應ス
 編者曰フ當時民間活字業者ハ讀賣新聞東京日日新聞兩者ノ外ハ規模小ニ
 シテ印刷ノ力ナク右兩社モ當時社務頻繁ノ爲メ其需ニ應セス窮餘寫字本
 ヲ以テ僅ニ其供給ヲ了セシハ以テ當時ノ文化ノ度ヲ知ルニ足ル
 清輝、迅鯨、千早、天城、四艦ニ供給スヘキ日本及支那部ノ英版海圖缺乏ニ付合計
 千二百七十二枚代價二千五百五十圓内外ヲ以テ購入ノ儀ヲ上請シタルニ付

海圖ノ購入

觀象臺測器室

觀象臺ノ出版書

測量中止

海圖供給謝絶

海圖ノ急製

差向其半數ノ購入ヲ許サル
 觀象臺ノ原基晴雨計、寒暖計、乾濕寒暖計室(四坪)ノ新築ヲ許可セラル
 觀象臺ニ於テ氣象畧表第一號ヲ發刊ス記スル所ノ事項ハ三月ノ風位、風力、
 天候、氣壓、溫度ノ平均ニシテ明治十四年迄毎年四回發行セリ
 本洲北西岸長門能登間ヲ測量スルカ又ハ之ニ先タチ中牟田西部指揮官ニ於
 テ緊急測量ヲ要スト認ムル地點アルカ何レニシテモ測量艦ヲ用ヒ度旨協議
 シタルモ該指揮官ハ當時ノ事情之ヲ許サストノ意見ナルニ依リ測量事業ヲ
 中止シ測量課員ヲシテ寫圖事業ヲ補助セシム
 開拓使所轄ノ玄武、矯龍、函館ノ三船ヲ海軍所管ニ變シ朝鮮方面ヘ急航ニ付海
 圖供給ノ要請ヲ受ケタルモ他ノ供給ノ急ナルヨリ之ニ應スル能ハサリシ
 韓地御用取扱官用トシテ九州朝鮮近海々圖五揃大急提出方省達アリ即日提
 出ス尋テ又韓地航海ノ諸艦船用トシテ日本朝鮮間ノ航海圖及江華島海圖十
 揃提出方省達アリ

海圖ノ讓與

海圖ノ別途購入

測量艦止ム

元生徒轉勤

有益ナル米書ノ寄贈

英版日本附朝鮮圖(英版第二三四七號)橫濱商館ニ唯一葉ノ貯蓄アリ當寮ヨリ
 其買上ケ(代價三圓五十錢)ヲ約定スルト全時ニ開拓判官ヨリ此際韓地ニ關ス
 ル急用ニ付直チニ商館ヨリ轉買シ度旨依頼アリ之ニ應ス
 朝鮮事件ニ關スル海圖購入費ハ別途支出ヲ上請セシニ許可セラル
 二月

西部指揮官所管測量船第二丁卯艦ハ常備艦ニ編入セラル
 元生徒林、武藤、三原ハ少尉補ヲ命セラレ軍艦乘員トナリ又水路事業ニ從事セ
 ス

米國政府ヨリ寄贈ノ米國水路局總制、海岸測量普通教授書、航海曆、タムソン深
 海測量器用法教授書、諸恒星位置訂測便覽表外十七種ヲ本省文書課ヨリ領収
 ス

編者曰フ此書籍中米國水路局總制ハ即チ米ノ水路局ノ分課規則及事業取
 扱ノ順序等ヲ記セルモノナルカ我水路寮ハ創業以來著々其改進ヲ圖ルト

雖其組織上如何ナル手段方法ヲ取ルヲ過當トスルカ未タ嘗テ先進外國ノ例ヲ知ラサルヲ以テ疑問百出其解決ニ苦ミ居タル際此書ヲ得始メテ水路事業ニ必要ナル職務分課ノ要領ヲ知ルヲ得タルハ恰モ暗夜ノ針路ニ一大燈光ヲ認メタルカ如キ感アリシ況ヤ米國ノ開局ハ一八六七年(明治元年ノ前年)ノ近キニアリシヲ以テ其程度ニ於テ大ニ我寮當時ノ事業及後日ノ施設ニ適好ノ參考トナリシモノ少ナカラス余ハ非常ナル歡喜ヲ以テ之ヲ譯了シタリキ(原備ノ譯本參照)本年九月廢寮大改革ノ際改定セル具体的分課組織ハ此書ノ教訓ニ負フ所實ニ少ナカラサルコトヲ忘レサルヘシ

英測量艦「シルビア」艦内製圖室模樣寫取ノ爲メ製圖手一名ヲ出張セシメ之ヲ寫取ス此寫圖ハ卷物トシテ他日ノ參考ノ爲メ保存ス

英艦「シルビア」ニ寮版海圖釜石港外十八圖ヲ贈與ス

艦船渡海底溫度器二十箇(代價約三百六十圓英國注文ノ儀)ヲ上申ス測器定數ニハナキモ此際追加ノ必要ノ旨艦隊指揮官ヨリ上申ノ結果ニ依ルモノニシ

英測量艦製圖室ノ調査

海圖ノ贈與

測器ノ新追加購入

航路標識案

測量

外國博覽會
へ海圖ノ出品ノ嚆矢

海圖刊成

テ本省ヨリ漸次定額内ヲ以テ支辨スヘキ旨當局へ指令アリ

去年十月英人ゼームスヨリ提議ノ航路標識設置案(八年十月ノ記事ニアリ)ハ御採用適當ナル旨海軍省ヲ經テ正院へ上申ス

横須賀港ハ明治六年測量後港内變化アルヲ以テ再測ヲ許可セラレ測量ニ著手ス

文部省ノ依頼ニ應シ米國へラゲルヒヤ萬國博覽會へ出品ノ爲メ當寮出版海圖五十四葉外ニ東京内海ノ寫圖一葉ヲ該事務局ニ送付ス

編者曰フ是レ我海圖ヲ外國博覽會へ出品シタル初發ナリ明治十年十月其賞狀ヲ得タルモ文部省出品圖書ノ中ニ含有シ海圖ニ關スル特記ナシ十二年再ヒ米國博覽會ニ出品セル時ノ記事ヲ參照セヨ

陸奥野邊地灣ノ圖刊成ス配付用ノ爲メ六十八枚ヲ本省へ提出ス

編者曰フ刊行圖誌ノ配付ハ當時本省取扱ニ付枚數ハ其指定ニ依ルト雖或ル時ハ本省ニ於テシ或ル時ハ上申又ハ下問ニ依テ之ヲ改定セリ蓋シ艦船

ヨリ或ハ本省へ要求シ或ハ水路寮へ要求シタルカ爲メナリ
朝鮮時件ニ付重ニ空地ニ關スル海圖臨時至急ノ要求ハ前月ヨリ引續キ更ニ
本月ヨリ四月マテニ於テ測量製圖兩課員ヲ合併シ其謄寫ニ從事シ約三百七
十枚ヲ寫了セリ

編者曰フ當時有スル所ノ朝鮮部ノ海圖ハ左記ノ外ナク(但シ東岸部ヲ除ク)
且ツ釜山トハミルトントヲ除ケハ粗畧ヲ極メタル畧測圖ナリ

森林島附近

江華島附近

鹽河及小陵河假圖(顧フニ英人ゼームス提出ノ假圖)ヘルナンド島錨地
勿溜島錨地

右寫圖

鹽河之圖第一(八年十二月末佛圖覆版)

鹽河之圖第二(全上)

小陵河(全上)

右刊行圖

平壤及大同江 米畧測

釜山港

ハミルトン港

朝鮮南部叢島

右英版

右寮版ヲ除ク外ハ英版圖アリト雖其原圖ハ數葉ニ過キサルヲ以テ何レモ
寫圖ヲ以テ其要求ニ應シタルモノナリ而シテ我刊行圖モ多大ノ供給印刷
ヲ成シタルハ勿論ナルモ其詳記ヲ缺ケリ

オースタラリヤ北東海岸圖二十二葉ヲ海軍少尉八木俊親ヨリ買上ク

三月

英測量艦ハ對景其他或ル地形ヲ寫スニ寫眞器ヲ用ヒ好果ヲ收ムルヲ以テ當

寮ニモ大形寫真器ヲ備ヘ之ヲ利用センコトヲ上請ノ末石川島造船所ノ貯品ヲ下附セラル

内地經差電測ノ嚆矢

北海道、東京間ノ經差電信測定ノ件ヲ開拓使ヨリ本省ヲ經テ當寮ヘ依頼アリ然ルニ此種ノ測量ハ米人傳習後ノ初發ニ係リ且ツ觀象臺ニハ未タ電信器ノ備付其他一ノ準備ナキニ依リ全使及電信局ト數回往復ノ末大伴中尉ヲ主任トシ四月八日ヨリ測量ヲ開始シ五月六日ニ完結ス○此測量ハ開拓使ニ於テハ使員福士成豊ヲ青森ニ出張セシメ我寮ニ於テハ大伴(肝付)觀象臺主任之ニ當リ其好績ヲ收ム是レ我内地ニ於ケル經度電信測量ノ嚆矢ニシテ東京青森間ノ地點ノ關係上大ニ他日ノ便ヲナシタルモノナリ

英水路局記録ノ入手

英海軍水路局事務章程取調ノ必要アルモ民間入手ノ目的ナキヲ以テ在倫敦公使館本野書記官ヘ入手送付方ヲ依頼セリ其結果明治十年二月「エ、メモイア、オフ、ゼ、ハイドログラヒカール、デバートメント、オフ、ゼ、アドミラリチー」即チ英水路局記録ト題セル一書ヲ送付アリ因テ黒野出仕ヲシテ之ヲ譯セシメタリ

編者曰フ此書ハ千八百六十八年シー、エッチ、リチャードノ記述ニ係リ具體的ノ章程ニ非スシテ英水路局ノ沿革ノ要領及職任事業ノ取扱ヲ説明的ニ記述シタルモノナルモ事實上世界中水路事業ノ模範トシテ見ルヘキ英國水路局ノ實情ヲ擧ケタルモノナルヲ以テ嚆キニ得タル米國水路局總制ト兩者相待テ益、我カ前途ニ横ハリシ幾多ノ問題ヲ解決シ其向フ處ニ勇往邁進スルノ方針ヲ定ムルニ與テ力アリシモノナリ

譯書刊成

羅針鐵差新篇刊成ス蓋シ「アドミラリチー、マニエル、ホア、ゼ、デビエーション、オフ、コムパス」ト稱スル英書ニ就キ大伴中尉ノ抄譯ニ係ル

編者曰フ羅針鐵差(即チ自差)ニ關スル智識ハ當時我邦ニ在テハ殆ト皆無ナリシカハ此書ノ譯述刊行ハ艦船ニ非常ナル効益ヲ與ヘタリト云フ蓋シ當時此新書ノ解釋ハ勿論適當ナル用語ノ新定ニハ數回ノ修正校訂ヲ重ネタルモノニシテ譯述者ノ最モ苦辛セシ所ナルハ言フマテモナシ

海圖刊成

陸奥安渡、大畑浦、相州横須賀港、朝鮮釜山港ノ四圖刊成ス

明治九年

四月

英海軍海圖一揃二千五百二十枚代價貳百貳拾參磅餘(四年前ヨリ屢次購入方
上請ニ及フモ許サレズ近時海軍擴張遠洋航海上是非トモ購入必要ノ儀再請
ノ未定額内支辨ヲ許可セラル

編者曰フ當時定額金ニハ限リアリ別途ノ支辨ハ許サレズ艦船ヨリハ要求
アリ其結果ハ常ニ寫圖ヲ以テ之ニ應シタルモ或ル時ノ如キハ原圖ヲ艦船
ニ送り艦船ニテ寫取セシコトアリ

明治四年前露國軍艦ハ下總犬吠埼沖ニ於テ險礁ヲ發見シ其高サ水面上二十
呎ナルヲ告示シ米國ニ於テハ一旦之ヲ圖記シ後不存在トシテ之ヲ削除シタ
ルモ其存否尙ホ疑アルヲ以テ地方官ニ其取調ヲ命シタルモ判然セス因テ寮
員ヲ軍艦ニ便乗セシメ檢測セシメンコトヲ上請シ其許可ヲ得タリ然レトモ
當時實行ノ機ヲ得サリシ

編者曰フ此礁ハ所謂犬吠埼ノ北東約八十哩ニアリト云ヘル疑礁ニシテ明

治四年以來日英軍艦屢々之ヲ搜索シタルモ之ヲ認メサル旨其都度告示セ
シモ今尙ホ存否囂々疑問ノ中ニアルモノナリ

イコトリアルデレスコップ
赤道儀ハ觀象臺ニ缺クヘカラサル要品ナルノミナラス明治十一年水星日面
經過測ニハ是非トモ之ヲ使用シ度キモ其製造ニハ二十ヶ月ヲ要スルヲ以テ
今ヨリ獨乙ヘ注文ヲ要スル旨上申許可ノ末外務省及獨乙公使ヲ經テ之ヲ注
文ス其代價三百六十磅ナリ

編者曰フ我觀象臺ニ此器械ヲ購入設備スルコトハダビン博士ノ慫慂ス
ル所ニシテ其來書ニ據レハ此新器械ノ製造ハ獨逸國ノ外ニ適當ノ製造者
ナク當時世界ニ於テ唯三器アルノミ且ツ其製作ハ据付地點ノ位置ニ適合
セシムヘキモノナルヲ以テ注语法モ亦特別ノ注意ヲ要スルカ故ニ今者米
國ヨリ獨逸ヘ注文ノ爲メ余親ヲ行キ注语法ヲ指定スヘキニヨリ若シ貴國
ニ於テ注文ニ決セハ共ニ斡旋ノ勞ヲ取ラント云ヘリ今者此器械ノ注文ハ
全博士ノ厚意ニ基キタルノミナラス其製造ニ關シ親シク説明ノ勞ヲ取リ

航海語字典
ノ借用

軍艦施測ノ
朝鮮部新測
圖

タリト云フ
「ヨングス、シーメンズ、マニエル」ヲ兵學校ヨリ借用ス是レ水路航海語ノ解釋ニ
適スル辭書ノ皆無ナルニ苦ミタルニ由ル
朝鮮派遣ノ軍艦ヨリ送達セル朝鮮南岸畧測海圖四葉本省ヨリ調査刊行スヘ
キ命アリ

測器定表ノ
改正

編者曰フ是レ順天浦、猪仇味、加背梁、閑山海ノ四葉ナランモ記録ヲ缺ケリ
諸艦船渡測器定表^{七年ニ制定}ニ關シテハ制定以來客年六月以降實施ノ結果屢々改
正必要ノ議アリ之カ改正案附録第一號ヲ見ヨ^{ヲ提出ス}八月ニ至リ許可實施
ス○當時海軍各部ハ尙ホ創業ノ時代タルヲ免カレサルヲ以テ各部ノ關係未
タ定マラス此改正案作成ニ關シ艦隊、本省、水路寮ノ間ニ意見ノ交換容^チラ易
サリシ

海圖製作費

海圖製作費トシテ本年二月ノ借入金百七十圓ハ拂下代金收入ニ付全金額ヲ
返納セリ

分課規則改
正案

編者曰フ民間海圖拂下費用ニ關スル書類ハ缺乏シテ其發端不明ナルモ此
書類ニ據レハ當時拂下費用ハ別ニ借入レ收入充ツレハ之ヲ返却スルノ方
法タリシカ如シ又海圖賣捌ハ最初當局直賣ナリシモ此頃ヨリ芝區柴井町
書肆松井忠兵衛ヘ其賣捌ヲ命シタリト記憶ス
庶務、測量、製圖、編集ノ四課ヲ測量、記事、製圖ノ三課ニ改正センコトヲ上申セシ
モ省セラレス

測量船新造
ノ建議

編者曰フ是レ米國水路局總制ノ例ニ倣ヒ改正ノ意見ヲ出シタルモノナリ
測量艦ハ専門ノ設備ノ新艦ヲ造ルカ英國ニ注文スルカ客年八月上申セシモ
未タ許サレス一時貸渡ノ艦船ニテハ其設備ノ不適當ナルノミナラス期限モ
亦定マラス事業ノ障害少ナカラサルヲ以テ不日完成スヘキ天城艦ヲ専門測
量艦トシテ當寮管轄ノ儀再三上請ノ末測量ハ最大要務ナルモ艦隊設備モ亦
未完ノ際ナレハ當分臨時艦隊中ノ船ヲ差繰リ用辨スヘキ旨指令セラル

五月

海圖製作資
本金

分課表提出

艦船渡海圖
定表ノ初設

海圖製作資本金トシテ本省許可ノ上會計局ヨリ受領ス
文武諸官ノ職務分課ヲ取調ヘ本省人別課ニ送附スヘキ旨達アリ即チ附録第
二號ノ通り提出ス
諸艦船ヘ海圖渡方は迄一定セス障碍少ナカラサルヲ以テ左記ノ如ク定メ度
伺出ノ結果六月裁可アリ東西兩部指揮官ヘ達セララル

一 東部艦船

- 一 日本國航洋全圖 壹部 但シ 七 枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 三十二枚
- 一 清國航洋全圖 壹部 但シ 十四枚
- 一 朝鮮海航洋全圖 壹部 但シ 壹 枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 六 枚
- 一 日本海露西亞沿海航洋全圖 壹部 但シ 四 枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 八 枚

一 西部艦船

- 一 日本國航洋全圖 壹部 但シ 七 枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 三十二枚
- 一 清國航洋全圖 壹部 但シ 十四枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 六十八枚
- 一 朝鮮國航洋全圖 壹部 但シ 壹 枚
- 一 全 港泊圖 壹部 但シ 六 枚
- 一 日本海露西亞沿海航洋全圖 壹部 但シ 四 枚
- 一 全 ポシエツト灣等港泊圖 壹部 但シ 壹 枚
- 一 兵學校艦船
- 一 筑波艦 東部艦船同様
- 一 富士山艦 乾行艦 攝津艦 日本全圖 並東京海灣諸海圖
- 一 蒼龍丸 利根川丸 東京灣海圖斗リ

一 外國へ航海ノ節ハ其時々入用ノ分當寮ヨリ相渡歸朝ノ上直ニ返納之事
 一 東部ノ艦船西部ヲ航スル時ハ西部ノ分ヲ一時増補ス西部ノ艦船東部ヲ航スルトキモ全斷増補ス
 一 東西指揮官へ各國航洋全圖並港泊圖壹部 皇國版五十七枚 英國版二五二〇枚 相備置候事
 但シ御許可相成候ハ、英版注文可致候事
 一 海圖ノ儀ハ年々改正スルモノナレハ新圖ヲ得ルトキハ之ヲ艦船ニ分布シ古圖ハ之ヲ當寮へ返却スヘキ事
 右伺出候也

追テ本文ノ通り御許可相成候ハ、是迄艦船渡附ノ海圖表中ニ不足ノ分有之候ハ、直ニ相渡シ表外過上ノ分ハ當寮へ早々返却可相成候事
 右ノ結果其後便宜寮員ヲ派シ艦船ニ就テ其過不足ヲ調査セシメタリ
 本省主船局ノ依頼ニヨリ鉛錘索製作法ヲ調査シ左記ノ如ク同局へ通知ス
 鉛錘索ニハ二種アリ一ハ通常ノモノニシテ其長二十尋ヨリ三十尋ヲ用フ

鉛錘索製法

一ハ深海用ニシテ其長百尋ヲ用フ索ノ周ハ何レモ一吋タルヘシ其製作法ハ最上ノ麻ヲ用ヒ通常ノ鉛錘索ハ「ラーセルレード」六線組 深海鉛錘索ハ「ケーブルレード」十八線組ニ製スヘシ即チ「ラーセルレード」法ハ「ストランド」「ヤーン」ヲ合セ「燃」リタルモノ三條ヲ合セ之ヲ逆撚ニスヘシ「ケーブルレード」法ハ「ラーセルレード」三條ヲ合セ左撚ニスヘシ

六月

聖上北國御巡行ニ付仙臺ノ松島附近測量必要ノ爲メ海軍大尉五藤國幹、全中尉吉田重親、海軍少尉補有川貞白等ヲ以テ春日艦員外乗組トシ東名灣 即チ石之卷灣ノ一部ヲ實測セシム月末業ヲ起シ七月初旬ニ止メ其以北ノ諸港灣ヲ廻航シテ歸ル

松島附近ノ測量

内外國寄贈圖誌

筑波艦米國渡航ノ際全國ノ東西兩岸圖七十二葉及水路誌二冊購入ヲ依頼シタルニ桑港海岸測量局長ケビテンロツセル之ヲ全艦ニ寄贈シタルヲ以テ後其返禮トシテ我實測海圖二十七葉ヲ寄贈ス

海圖寄贈

土藏新築

軍艦測量

相模灣附近
測量

米人ダビソン博士ヨリ海圖二百四十枚ヲ寄贈ス
 圖誌銅版及艦船渡測器圖誌等大ニ増加シ且ツ外國注文物品到達セハ格納ニ餘
 地ナキヲ以テ舊舎ヨリ土藏一ヶ所ヲ移築シ其他更ニ十二坪ノ土藏一ヶ所至
 急新築ノ要アルヲ上請シ八月裁可ヲ得テ建築ニ著手セリ
 淺間艦ハ理事官宮本外務大丞ヲ乘セ朝鮮へ廻艦ニ付員外ヲ以テ海軍大尉中
 村雄飛、少尉兒玉包孝、少尉補三浦義深、全藤本治信ヲ乘組マシメ測量ニ從事
 セシム七月初旬ニ永宗島ニ到着シタルモ艦中日々汲水事業ニ忙殺セラレ八
 月ニ至リ漸ク測量ニ著手シ僅ニ月尾島沖ヨリ頂山島ニ至ル原點ヲ測リ得タ
 ルモ天候ト非常ナル潮升トニ困難シ遂ニ其他ニ著手シ能ハサリシト云フ
 英測量艦「シルビア」ハ御國南東海岸ノ測量許可以來著々施測中ナルヲ以テ其
 重複センコトヲ慮リ相州三崎ヨリ伊豆沿海遠州御前崎ニ至ル迄ハ我ニ於テ
 實測著手ノコトニ英艦トノ協議纏リタル結果柳大佐、相浦中佐、高杉少尉、高野
 瀨、關兩少尉補等外六名及水火夫四名千代田形艦ニ乘組ミ測量ニ從事ス此測

水路誌刊行
手續

海圖注文

新版改版英
圖購買約定
ノ許可

水路雜誌ノ
初刊

量ハ十月ニ至リ約完結ス蓋シ十月ニハ磯野少尉静岡ニ出張シ大伴大尉ハ觀
 象臺ニ在リテ東京静岡間ノ經差電測ニ從事シ約一ヶ月ニシテ成業セリ
 水路誌類ノ艦船渡トシテ刊行スルモノハ海圖ト全様ニ取斗ヒ刊行ノ都度伺
 出テズ唯其例數ヲ進達スルコトニ致度旨上申認可セララル
 英海軍海圖壹揃貳千五百二十枚(代價約四百八十七磅)東西兩部指揮官用トシ
 テ至急英國へ注文ヲ要スルヲ以テ定額外購入方上請ニ及ヒタルニ財務ノ都
 合上定額外下附シ難キモ差向注文ハ實行シ物品到着次第可届出旨指令セラ
 ル
 艦船渡海圖定表改正ノ結果今後本邦及支那ニ於ケル英版新圖又ハ改正圖出
 來ノトキハ二十通購買ノ儀必要ニ付豫メ約定ヲ結ヒ置度旨上請許可セララル
 (十月ノ部参照)
 水路雜誌第一號第二號去月刊成ニ付本省へ差出ス其後各官廳其他ヨリ續々
 要望アリ之ニ應ス

編者曰フ英國ニハ「ハイドログラヒック、ノ―チ―ス」ナル書類アリ即チ水路誌刊行後ニ得タル有益ノ關係アル水路報道ヲ斯ク名ツケテ逐號刊行シ水路誌^{サブプレメント}追補以外ニ速報ノ手段ヲ取レリ因テ此例ニ倣ヒ發行セル雜誌ニシテ即チ今ノ水路報道ノ嚆矢ナリ

其第一號ハ朝鮮事件ニ際シ日進艦乗員本宿中尉ノ實驗報告スル所其第二號モ亦樺太千島交換ノ際全官カ日進ニ於テ千島附近ノ水路ニ關シ實驗報告スル所ニシテ共ニ大ニ當時ノ參考ニ供セラレシ所ノモノナリ

朝鮮ノ濟物浦、項山島泊地、猪仇味、加背梁、長門ノ福浦港(以上朝鮮事件ノ際軍艦略測)五島、鯛浦及若松浦(以上三浦重郷)少尉補等ノ試測、北洲ノ福島灣、津輕ノ三厩灣(以上七年柳大佐略測)刊成ス○以上ノ九圖ハ銅版手傳卒業試驗彫刻ニ據リ其測量モ亦略測ニ過キサルモノナリシモ需用ノ急ニ應セン爲メ一時ノ參考用ニ過キサル旨言明シテ之ヲ配布ス

圖誌貯藏

八年度末即チ本月貯藏ノ圖書ハ洋書二百一十一冊和漢書百十七部四百八十冊

海圖試刻刊成

ニシテ海圖數左ノ如シ

英版	米版	佛版	露版	澳版	蘭版	清版	局版	淨寫	寫圖	總計
一、〇一六三〇三	二四	二二	三六	七一	一三	八〇	七一	七五	一七一〇	

航泊日誌ハ軍艦十六冊商船二百三十三冊

銅版手傳ノ卒業

銅版手傳卒業試驗完結シ各附屬ヲ命セラル

書籍寄贈

印度洋及太平洋ニ關スル報告書三冊米國政府ヨリ寄贈ス

海圖刊成

對馬ノ網代灣ノ圖刊成ス是レ朝鮮事件ノ際孟春艦ノ略測スル所ニ係ル

八月

天測器械ノ入手

米國天文博士ダピソンニ依頼セル「メリジアン、インストリユメント」及「テレガラヒツク、インストリユメント」我領事ヲ經テ入手ス

海圖寄贈

黑岡大尉露版海圖若干葉ヲ寄贈セリ

水路寮ヲ廢シ水路局ヲ置ク

海軍職制及事務章程(太政官無號達)發布セラレタル結果水路寮廢セラレ水路

明治九年

局ヲ置カル(海軍省丙第一、二、三號達參照)

該章程ノ要領ハ省務ヲ支分シ軍務會計主船水路醫務兵器ノ六局ヲ置キ大ニ局長ノ權限ヲ廣メ省務ニ關スル一切ノ事務ヲ分掌セシメ海軍卿之ヲ統轄ス而シテ水路局ノ分掌ハ左ノ如シ

一、海河ヲ測量シ其海圖ヲ調製シ水路誌ヲ編集シ測量ニ關スル諸具ヲ管掌ス

二、局中庶務測量製圖計算ノ四課ヲ置キ事務ヲ分掌セシム

編者曰フ此海軍省改革ハ純粹ノ文官組織ヲ變シ十九年純粹ノ武官組織トナルノ階梯ニシテ其官制ハ大佐局長ニシテ大書記官ヲ兼ネ少佐副長ニシテ少書記官ヲ兼ネ又文官課長ノ下ニ武官ヲ置ケリ而シテ此改革ニ依テ水路事業ニ一期限ヲ開キタルハ十二月假定セル水路局各課假章程及水路局事務取扱順序(附錄第四號)ナル書類ニ就テ之ヲ知ルヘシ○此改革ニ依リ局長ノ權限ヲ廣メラレタル結果大ニ上申ノ數ヲ減シ事務ノ進捗ヲ見タリ

九月

置局ノ職員

廢寮置局ニ依リ左ノ通り補職アリ(詳細ハ十年附錄第二號ヲ見ヨ)

局長 海軍大佐 柳 檜 悅八月 副長 海軍少佐 伴 鐵 太郎八月

測量課長 海軍中佐 相 浦 紀 道十月

觀象臺事務專任 海軍中尉 大 伴 兼 行

庶務課長 海軍九等出仕 石川 洋之助十月

製圖課長 海軍九等出仕 大 後 秀 勝十月

計算課長 海軍中主計 小 林 忠 直十月

編者曰フ此大改革ハ政府大ニ人員ヲ淘汰減少シ歲計豫算ニ大節減ヲ加ヘタルヲ以テ其結果文官ハ一般ニ減俸ヲ行ヒタルモ尙ホ其進歩ヲ繼續シタリ

海軍省年報用ノ報告編輯ニ關シ省達記三套第六八號ノ結果水路局報告編輯例則案ヲ具シ左記ノ如ク上申セリ

事業年報ノ開始例

一、官員ノ數
 一、測量出張員
 一、局用圖書測器費
 一、製圖銅版並諸刊行費
 一、雜費

一、測量地方及測量船
 一、海上氣象記事
 一、測器圖書ノ出納
 一、艦船渡品費
 一、官員給料
 一、雜報

編者曰フ此報告例ハ明治十年ヨリ實施シ詳密ニ之ヲ本省ニ報告シ本省ニ於テハ海軍各部ノモノヲ集メテ之ヲ編集シ海軍省年報ト題シ海軍各廳ニ配賦セラレタリ故ニ水路局ニ於テハ別ニ刊行セス唯該年報ニ載スル所ノモノハ種類ニ依リ各廳事業ヲ湊合シテ唯其要領ヲ擧ケ又當局ヨリ提出セル報告ノ控書ハ已ニ廢棄セラレタルヲ以テ明治十九年水路部年報刊行迄ノ間ハ水路事業ノ基礎完成期ナルニ拘ハラヌ此良好ナル參考書ヲ欠キタルハ編纂上遺憾トスル所ナリ

艦船渡書誌ノ定數

航海曆配付定數ヲ東海鎮守府司令長官ト左ノ通協定ス

- 一 鎮守府 各一部
- 一 常備演習艦四等以上 各二部
- 一 常備演習艦五等以下 各一部
- 一 修復艦船 各一部
- 一 運送船 各一部

測器ノ良品

獨逸へ注文ノ可搬子午儀及、コロノグラフ「二器」アストロノミカール、コロック

測器屬具

一器到著ス是ヨリ天測術ニ一層ノ精確ヲ見タリ

測器附屬用トシテ電信器械一座電信局ヨリ讓受ク

十月 當局書誌拂渡シ定價及出版費差繼拂ノ事ニ關スル會計局長ノ提議アリ(詳細

ハ十年附錄第三號及十年五月ノ部ニアリ)

艦船供給品圖紙

艦船各廳渡製圖紙區々不定ニシテ取扱上障碍少ナカラス依テ上申ノ末其規

書誌定價及製作費差繼拂ノ發端